

---

# アップルケーキに愛をこめて

芹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アップルケーキに愛をこめて

### 【Nコード】

N2960W

### 【作者名】

芹

### 【あらすじ】

パパの再婚で男爵令嬢となったエメル、14歳。ママができたのは嬉しいけれど、超絶美形の兄二人のセクハラ攻撃に驚愕。パパとママは新婚旅行を兼ねて領地に行ってしまう、自分の身は自分で守るしかない。だから僕は男の子になる！自分を僕と呼び、男の子の服を着て戦うんだ！エメルの奮闘やいかに。

## 1 始まりの不幸（前書き）

パパの再婚で男爵令嬢となったエメル、14歳。ママができたのは嬉しいけれど、超絶美形の兄二人のセクハラ攻撃に驚愕。パパとママは新婚旅行を兼ねて領地に行ってしまう、自分の身は自分で守るしかない。だから僕は男の子になる！自分を僕と呼び、男の子の服を着て戦うんだ！エメルの奮闘やいかに。

## 1 始まりの不幸

何からお話すればいいでしょうか。まずは自己紹介。

僕の名前は、エメル・フォン・リーデンベルク。十四歳。れっきとした女の子です。

僕がなぜ自分を僕と呼ぶようになったのか。

それはもう悲劇としか言いようのない出来事が原因でした。

ことの発端は、パパの再婚です。

僕のパパときたら自慢にも何にもありませんが、三回結婚し三回離婚しています。

離婚の原因はすべて、パパの浮気。

とびっきりの美男子で、妻子があるにも関わらず女性たちが寄つて来ることを差し引いても、離婚の非はパパにあります。

どうしようもないパパと最初の奥さんとの間に生まれたのが、僕です。

三度の離婚の後、二度と結婚はしないと誓ったにもかかわらず、パパは男爵未亡人の婿となりました。

継母のディリアさんは、とてもいい人です。

僕に優しくしてくれるし、何よりもあのパパがぞっこん惚れ込んでるんです。

だからいいんですが、問題は継母には連れ子がいたってことなんです。

それも怖ろしく美形の息子が、二人も。

兄の方は、トーニオ・コンスタンツ・フォン・リーデンベルク、十七歳。

弟はレオン・クラウス・フォン・リーデンベルク、十七歳。

お気づきでしょうが、二人は同い年です。

トーニオさんはディリアさんと最初の夫との間に生まれた実の息子ですが、トーニオさんがまだ幼い頃、両親は離婚されたそうです。その後ディリアさんは再婚し、連れ子だったのがレオンさん。

5年前、ディリアさんの再婚相手が馬車の事故で亡くなられた後も、二人は兄弟としてディリアさんに育てられたんです。

今回の結婚に際し、パパは言いました。

「何が心配と言って、お前の身に降りかかる不幸ほど心配なものはない。向こうには飢えた若い雄狼が二匹もいるんだ。か弱いウサギを狼の前に差し出すようなもんだ。これは何とかせねばならん。ああそうとも。父親の威信にかけて、何が何でも絶対に何とかせねばならん」

その何とかというのが何なのか。

僕はてっきり、結婚をあきらめるものばかり思っていました。

パパの幸せを願ってはいるものの、僕にとって狼とは浮気マニアのパパなんです。

その狼が、世の女性たちにいかに凄惨な地獄を見せるかを幼少の頃から身をもって体験した僕にすれば、狼に「飢えた」だの「若い」だのが加わると、これはもう逃げ出す以外に方法は無いように思え

たんです。

ところがパパが何とかしようと僕を連れて行ったのは、王都クラレストにある理髪店でした。

そこで僕は、女の子の命たる長い髪をばつさり呆気なく切られ……

……ああ、その時の心境たるや！

涙目の僕の目の前で女の子の命はモップで手早く集められ、ゴミ箱の中に消えました。

何よりも僕の髪は癖つ毛で、雨の日なんかはボワッと広がるタイプのシロモノです。

男の子のように短く刈られ熟練の理髪師でさえ苦労してセットしているその髪を、この先どうやって撫でつければいいんでしょうか。

がつくり肩を落とした僕は、そのあとパパの行きつけの洋装店に連れて行かれ 余談ですがパパは王宮の兵士という薄給の身でありながらとんでもなくお洒落で、また余談ですがディリアさんはハンサム且つ屈強な戦士のパパに一目惚れしたそうでした。そうして僕は男の子の服をこっそりあてがわれたのでした。

パパは言いました。

「お前はあの『あばずれドロシー』に似て、綺麗な顔をしている。そこところが心配でならないよ」

『あばずれ』は聞かなかったことにして、ドロシーは僕の実母の名前です。

母は舞台女優でしたが、今は再婚して遠国に住んでいます。

パパは綺麗な顔と言ってくれたけれど、僕にはそうは見えませんでした。

だって洋装店の鏡の中にはスーツを着て蝶ネクタイをつけた、薄茶色の髪と茶色の目の小柄で痩せっぱちで目だけがぎよるぎよると大きい、男の子がいたんですから。

パパはさらに言うんです。

「背筋を伸ばせ。なよなよしていると付け入られる。髪に触れるな。OKのサインになる。仕草に気をつける。しなをつくるなど、断じていかん」

パパは、実体験に基いて言ってるんだろうと思いました。その道ではプロ中のプロですから。

僕はパパに連れられて、二人の兄に会うためにリーデンベルク邸へ行くことになりました。

王都郊外のランツにある兵士宿舎に男爵家の紋章のついた馬車が到着すると、物見高い人々が僕たちを囲みました。

婿入りするパパに対し「男の嫁入り」と陰口を叩く声も聞こえ、僕が小さくなっていると、

「愛さえあれば、他のことはどうでもいい。無視しろ」

とパパは言い、上機嫌で人々に手を振ったりします。

愛がすべて                      パパのポリシーなんです。

僕たちが住むトライゼン王国は、農業と牧畜を主要産業とするのどかな国です。

ランツから王都クラレストに至る石畳の街道沿いには牛や馬や羊が草を食む丘陵が広がっていて、大半は貴族や大地主の領地です。

馬車がクラレストに入るや景色は一変し、いかがわしい貧民街や

賑やかな商店街やお金持ちの大邸宅があつて、都会の洗練と喧騒が一緒くたになつていゝように見えました。

王宮を中心として貴族の重厚な邸宅が立ち並ぶ中、灰色がかつた黒っぽい煉瓦造りのリーデンベルク邸は威風堂々としています。

大理石床のホールを抜け椋材の広い舞踏室を通る間、僕の口はあんぐりと開いたままでした。

高い天井、華麗な装飾を施した柱、絢爛たる絵画の数々。

部屋数は全部で五十あり、僕たちはディリアさんの私的なサロンに案内されました。

サロンは一階に三つ、二階と三階に一つずつあるそうです。

わすれなぐさいろ勿忘草色の壁紙。薔薇色のカーテン。高価な黒檀に精巧な象眼を施したテーブル。薄紅色のソファ。

花の咲き乱れる中庭に面したその部屋が、二人の兄と僕との初顔合わせの場所となりました。

二人とも黒のフロックコートで正装し、目を見張るほどの美形です。

兄のトーニオさんはさらさらの金髪が肩まで伸び、瞳は透き通るような青、優雅で大人びて見えます。

弟のレオンさんは緩やかに波打つ黒髪が襟足にかかり、底の知れない黒い瞳で、雰囲気は何となく不良っぽいというか、でも真摯な目をしていました。

パパとディリアさんが仲良く中庭に出て行つた後、僕はトーニオさんに手招きされました。

レオンさんはサロンの隅にあるベンチに腰かけて雑誌を読み始め、

隣にトーニオさんが退屈そうに座り、僕は二人の間に座るようにと言われました。

言われた通りに座ると、トーニオさんがいきなり顔を近づけてきたんです。

「君、初めて？」

「は？」

トーニオさんは、曖昧に微笑みました。

「大丈夫、俺にまかせて。優しくするから」

唇と唇が触れそうになり、僕は呆気にとられ、硬直したまま動けませんでした。

「キスから始める？ それとも手荒なのが好み？」

「あの、あの、あの……」

僕はようやくのことで後ずさり、背中にレオンさんの腕が当たって振り返りました。

レオンさんは雑誌を読む姿勢を崩さず、冷たい一瞥を僕にくれるだけです。

「ふわふわの茶色い綿帽子わたぼうしみたいな髪だねえ」

トーニオさんが僕の髪に指を入れてすき始め、僕の方はぶるぶる震えました。

トーニオさんが言っていることの意味ぐらい、僕にだってわかりません。

でも、そんなのあり得ない。

貴族の子弟で規律正しい王立ギムナジウムの学生が、こんなこと言うなんてあり得ない。

「君、人形みたいだね。色白で目がおつきくて。うん、とびつきり可愛くて俺好み。さて、お遊びは終わりにして、キスから始めよう」

そう言っ僕を抱き、のしかかるように唇を近づけたから、僕の中の学生像は木っ端微塵に吹き飛びました。

「き、き、きやああああ　　つつつつ！！！！」

僕は、多分生まれて初めての絶叫を、二度三度と続けました。

「きやああああ　　つつつ、きやあああ　　つつつつ！！」

当然パパとディリアさんは驚いて、飛んで戻って来ます。

僕がよろめきながら立ち上がるとトーニオさんはおなかを抱えて大笑いし、僕は目をぱちくりさせました。

「何がおかしいのっ」

トーニオさんは涙を拭きながら、笑いながら、言うんです。

「　そんなに　真剣に受け取られると　困るんだけど　　あははは」

僕は、顔が真っ赤になるのを感じました。……かれかわれたんだ。

「どうしたの？」

ディリアさんが尋ね、

「ああ。トーニオがまた、悪い冗談で困らせたんだ」

レオンさんが僕をちらつと見て、何でもないことのように答えます。

「ごめんなさいね、エメルちゃん」

「いえ、気にしてませんから……」

パパを見ると、心配そうに僕を見ていました。

僕はこの時、わかつたんです。パパは正しいって。なやなよしてると付け入られるって。

僕は、決めました。

今この瞬間から、男の子になる。男の子になって自分の身は自分で守る。二度と悪い冗談なんか、言わせないって。

その時以来、僕は自分を僕と呼ぶようになったんです。

## 2 貴公子は悪魔のように

真夏の結婚式が無事に終わり、パパとディリアさんは仲良く夏の別荘へパネムーンに出かけて行きました。

2週間、邸内はメイド頭のアンナさんと厩番のゲイルお爺さんと狼たちと僕だけになります。大して気にしていませんでした。他のことで頭が一杯だったから。

ディリアさんが別荘で快適に過ごすためと称してコックを連れて行ってしまったから、その上パパがディリアさんに同調して料理はエメルにまかせればいいなんて言うものだから、僕が皆の食事を作ることになったんです。

僕は料理は好きだけど、パパの薄給でできる範囲のメニュー 安価なじゃが芋やソーセイジや卵を使った料理しか作ったことがなくて、コックのハンスさんからもらったレシピに載っているような高級品を上手く作れるかどうか……。

しかも今は夏休み。

毎日三食、できればお菓子やケーキなんかも作りたいから、僕のささやかな脳はそのことで一杯になっていました。

僕は張り切って朝食を作り、トニーオさんは「うまい！ とうもろこしのスープ、久しぶり」と喜び、レオンさんは焼きたてのスクリーンを黙々とおかわりしていました。

アンナさんから貰った黒いエプロンをつけ、慣れた手つきで料理

を運ぶ僕。

実際、僕は慣れていたんです。パパとの二人暮らしが長くて、料理も配膳も後片付けもお皿洗いも僕の仕事でしたから。

そんな僕をしげしげと見ながら、トーニオさんが言いました。

「君のこと、今日から『メイドくん』と呼ぼう」

メイドくん……。こういう場合、怒った方がいいんでしょうか。

トーニオさんは優雅な顔に謎めいた微笑を浮かべて、面白い動物を見るような目つきで僕を見て、僕にはトーニオさんが美しい悪魔に見えました。トーニオさんという人は、どこか悪魔めいてるんです。

やっぱりからかわれてるに違いないから、ここは怒るべきなんだろうと口を開きかけた時、レオンさんが冷たい一瞥を僕に向け、視線に負けないくらい冷たい口調で言っんです。

「……座れ」

まだ食後のフルーツを運んでいなかったけど、それはアンナさんをお願いして、僕はエプロンをはずしてシャツとズボン姿になり、急いでトーニオさんとレオンさんの向かいの席に座りました。

「お前はこの家の娘だ。皿運びなどしないでいいから、座って食事しろ」

レオンさんの低い声が響き、僕は困惑しました。

だって僕が運ばなかったら、誰が料理を運ぶんです？

ディリアさんは結婚の御祝儀と称してメイド全員と執事までも避

暑地にある別荘に連れて行ってしまったし、アンナさんはお掃除担当という事になってるし。

困ってる僕をじつと見るレオンさんの視線が鋭くて、端正な顔立ちなのに表情が険しくて、形のいい唇は横一文字に引き結ばれていて

どう言えはいいんでしょう、僕はレオンさんが怖い。

返事が待たれてる気がしたから、恐る恐る答えました。

「はい……」

料理を運びながらどうやって座って食事をするかは、後で考えようと思いました。

「料理、上手だねえ。すごく美味しかったよ」

トーニオさんは、ナプキンで口もとを拭いています。

「……喜んで頂けて嬉しいです」

「得意料理は何？」

「そうですね……。ブラトカルトフェルン（焼きじゃが芋）とかザワークラウト（キャベツの酢漬け）とか、アイスバイン（塩漬け豚肉の煮込み）とかです。パパの好物なので。でも、あの、値段の安い料理しか作ったことがないので、高級料理を僕なんかが作って、お口に合いますかどうか。もし気に入って頂けたら、幸いです」

レオンさんがカタツと音を立ててフォークを置いたので、僕はびくつとしました。

「作文を読んでもるのか？」

レオンさんの質問の意味がわからなくて、僕は目をぱちくりさせました。

「作文？」

「レストランのオープニングセレモニーの来賓の挨拶みたいだったよー」

トーニオさんは、頬杖をついて笑っています。

「君、どうして俺たちに敬語を使うの？」

トーニオさんに尋ねられ、困ってしまいました。どうしてそんなこと聞くのって、僕の方が聞きたいです。

パパが連れて来た数多いお客様たちは、特にパパと親密な女性たちは、僕のことを羨の行き届いた子だつて褒めてくれたし、そんな時のパパは嬉しそうで鼻高々で、そういうパパを見てると僕も嬉しいし……。

うつん、違う。本当の理由は、もっと昔の別のところにある。

分かってるけど、それについては思い出したくないし、話したくない。

「お二人とは初対面に近いですし、礼儀正しくした方がいいかと……」

「礼儀ねえ。俺たちつて兄妹になったんじゃないっけ？」

「それは……はい、今は……」

「今は？」

レオンさんが、聞き咎めました。

「なるほど。あの二人がいつ離婚するか分からないということか」  
レオンさんの口角が上がり、笑ってるんだと思いましたが、それはとても笑顔とは言えない怖ろしい表情でした。

「気持ちは分かるねえ。メイドくんのママ、四人目だっけ？ いつ五人目に首がすぐ変わるか分からないよね。俺のパパも三人目だし、

離婚したらもともと赤の他人の俺たちは他人に戻るわけだし。変に親しくない方が後々のためだよ。うん、わかるよ」

「そんな！……そんなつもりじゃ……。ただ僕は……」

「ただ僕は？」

レオンさんが僕の言葉を引き取ったから、答えざるを得なくなりました。

「その……できることなら、お二人に気に入られなくて……。あの……今まで他人だったのに、急に兄妹になって、それで……。どうしてもいいのかわからなくて……。せめて言葉遣いだけでも、きちんとしようって……」

言ってしまいました。でも昔、致命的な失敗をしたからとまでは言えませんでした。

僕はうつむいていましたから、二人の表情は見えませんでした。見るのが怖かった。きつとおどした情けない僕を笑ってるだろうと思ったから。

うつむいたまま、僕は立ち上がりました。

「あの、僕、そろそろ向こうへ……」

「座れ」

レオンさんの声が静かに響き、僕は慌てて座り直しました。

こわごわ顔を上げるとレオンさんは首をかしげ、トニーさんは不思議そうな顔で僕を見ています。

僕の緊張は頂点に達し、とても落ち着いて座っていただけません。

「すみませんでした……」

いつものように、僕はまずは謝りました。パパに叱られた時や、

心ならずもお客様の女性の気分を害してしまった時のように。

でも何故かこの時は涙がこみ上げて、目をぱちぱちして何とか堪えようとしたけれど、止まりませんでした。

「あーあ、泣かせちゃった。レオンって女の子を泣かせるの、得意だもんなあ」

レオンさんの表情は見えませんでした。が、「お前なあ」とトーニオさんに言ってるのは聞こえました。

「レオンさんのせいじゃないです。……僕がいけないんです。すみません……そろそろ、ほんとに、僕、向こうへ……」

お盆だけ持って、キッチンに逃げました。

自分が情けなくて恥ずかしくて、こんなことでこの家の娘やトーニオさんとレオンさんの妹が務まるんだろうかと不安で、涙がこぼれました。

でも頑張らなきゃ。ここが僕の家なんだからと目をこしこし拭き、自分に言い聞かせるのでした。

その日の夜中のこと。おかしい気配に気づき、目が覚めました。真新しいベッドは慣れないせいか寝苦しく、やっと眠ったと思ったら眠りは浅く、ようやく深い眠りについた矢先のことでした。

窓から心地よい夜風が入って来るのに、何故か暑い。目が覚めて最初に気づいたのが、それでした。

そして次に気づいたのは……僕の頬を撫でる手、男の子用のパジ

ヤマを着た僕の胸の上に乗っている肘。  
腕から腕の付け根、肩へと視線を移し、首の上に乗ったその人物の顔を見上げました。

「き、き、きや」

叫びそうになった僕の口をトーニオさんの手が塞ぎ、僕は必死にもがきました。

トーニオさんは僕の隣で肘枕をし、僕を見下ろしています。

「怖がらなくていいよ。可愛い妹の寝顔を見に來ただけなんだから」  
寝顔を見に來た　？　夜中に　？

でもとりあえず僕はその言葉を信じ、口を閉ざしました。

トーニオさんはにつこり笑って僕の口から手を離れたと思ったら、指で滑るように楽しそうに僕の唇をたどるんです。

「何するんですかつ」

「うーん、俺の話、聞いてくれる？」

トーニオさんは僕の質問には答えず、僕は転がり落ちんばかりの勢いでベッドの端まで逃げました。

そして、気づいてしまったんです。トーニオさんのシャツの胸元が大きくはだけ、上半身裸に近いということに。

「きやああ……」

生涯で二度目の絶叫をあげかけた僕の口をトーニオさんの手が塞ぎ、空いた方の腕が僕の背中に回り、僕は何とか逃げ出そうと両手を突っ張りました。

「静かに。メイドくんの寝顔も見たいし、そろそろ部屋に戻るよ。叫ばないと約束してくれないと、この手を離せないんだけど」

笑いながら言うトーニオさんに、僕は何度もうなずきました。部

屋に戻ってもらえるなら、口でも鼻でも何でも閉じます。

トーニオさんは僕の口から手を離し、背中の手はそのまま、僕の顔をのぞき込みました。金髪が僕の頬にはらりと落ち、悪魔めいた青い目が瞬いています。

「さて。俺たちがどんな風に愛し合うかという話だったね」

「ええっ」

そんな話、してないっ。僕は泣きそうになりました。夜中に起こされて、どうしてこんな目に合わなければならないの。僕は静かに眠りたい。

「君は本当に可愛くて、綺麗だよ。初めて会った時、天使みたいだなと思ったんだ」

初めて会った時といったら蝶ネクタイをつけてスーツを着て髪が飛びはねて、嵐の後の痩せっぱちの力カシみたかったはず。

クラレストの洋装店の鏡に映った自分の姿を思い出し、あれが天使に見えるなんてこの人の目はおかしいと思いました。

「男の子の恰好をすれば誤魔化せると思ってるんだろうけど、君のおかげで俺の新たな趣味が目覚めたみたいなんだよねえ。俺って両刀使いかもしれない」

誤魔化すんじゃないかって闘おうとしてるんですと言いかけて、怖ろしいことに気づいてしまいました。

……トーニオさんは変態なの？ 考え込む僕を見て、トーニオさんは吹き出しています。

「話は変わるけど、この屋敷には悪霊が棲んでるんだよ。ものすごく勘がよくて、俺たちみたいな若い恋人の気配を嗅ぎ付けては邪魔しに来るんだ」

「悪霊……？」

俺たちみたいな恋人って言った？ 僕とトーニオさんが恋人？  
やっぱりこの人は、おかしい。

「耳を澄ませてごらん。悪霊の足音が聞こえるだろ？」

確かに聞こえます。廊下をばたばたと走る足音。いきなりドアが開き、飛び込んで来たのはレオンさんでした。

「出たな、悪霊」

「何やってるんだ」

「見ればわかるだろう。部屋を飛びかう愛の羽が見えないのかい？」

トーニオさんはのんびりとした口調で、ゆっくりと僕から離れていきます。

僕は急いでガーゼケットを首まで引き上げ、目を見開き、部屋中を見回しました。愛の羽なんて飛んでないんだけど。

「ドアが開いている。鍵はどうした」

「うゝん。どうしたかなあ」

トーニオさんとレオンさんの目が同時に僕に向けられて、僕は硬直しました。

鍵はどうしたと尋ねてるの？ 鍵は……寝る前に掛けたはず。でもそう言えばトーニオさんは、どうやって部屋に入って来たんでしょう。もしかして僕が鍵を掛け忘れたとか？

必死に思い出そうとしながら、僕はレオンさんを見上げました。僕をじっと見つめるレオンさんの顔は女性のように綺麗なのに、厳しさや冷淡さが覆いかぶさって優美な顔立ちの印象を変えてしまっているみたいです。

澄んだ黒い瞳は底知れない深淵のようで、吸い込まれそうになっているうちにレオンさんの目に怒りが走り、僕はぎくりとしました。

「最初に言っておく。この屋敷で不道德なことは許さない。どうしても言うなら、よそへ行け」

レオンさんはそれはそれは恐ろしい目で僕を射すくめ、すぐさま視線をトーニオさんに移しました。

「部屋から出ろ、トーニオ」

不道德……僕が？

レオンさんの言葉が、冷たく鋭く僕の心に突き刺さります。

寝る前に確かに鍵を掛けたと思うけれど……不道德？

いや、そうじゃない。トーニオさんを部屋に招き入れたとレオンさんに思われてしまったんだと、僕は気付きました。

誤解ですと言わなければ釈明しなければと頭では思いながら口はわなわなと震えるばかりで、見開いた目をさらに見開き、咽喉の奥からこみ上げる熱いものを止めることで精一杯でした。

「おまえさ、兄上に向かって何言ってるの」

「こんなことに兄も弟もないだろ」

腕組みをしてトーニオさんを見るレオンさんの目は剣呑で、静かな口調は刃のようです。

「ああ、わかった。メイドくんにおやすみの挨拶をしたらね。すぐに済む。疑うなら廊下で待ってれば」

ひらひら手を振るトーニオさんから目を逸らし、レオンさんはちらっと僕を見て背を向けました。

肩の上でふわりとなびく黒髪は柔らかそうに見えるけれど、細身の体軀も背中もがちがちに硬そうで、全身で僕の存在を否定してい

るみたいで泣きなくなりました。

否定されて当然です。自分の釈明もろくにできない奴なんか……。

レオンさんは無言で出て行ってしまい、トーニオさんは長い足を床につけ、ベッドに座ったまま伸びをしました。

「もう少し見ていたかったなあ、メイドくんの寝顔。あ、どうやってここに来たかを説明したいんだけど、いいかな」

と尋ねられたけれど、それどころじゃなかった。

僕の頭の中で、同じ言葉が繰り返し再生されていました。

不道徳                      不道徳                      。

「今夜は暑くて窓を開けても風は入って来ないし、眠れなくて庭を散歩してたら、メイドくんの部屋の窓が開いてることに気づいたってわけ」

「窓？ でも……」

僕の部屋は三階にあるし。

「二階の俺の部屋から三階によじ登って、雨樋あまどいづたいにここまで来たの。結構スリルあったよー。で、窓から入った。ちょっと危険かもしれないよ、窓を開けたまま寝るなんて」

確かにそうだと痛感しました。今度から窓はきっちり閉めて眠らなければ。

「ってことを伝えたくて君が目を覚ますのを待ってたんだけど、待ってる間に俺の方が目覚めてしまったってわけ。理解してくれた？ はい、理解しました。よく分からないけれど窓を開けるのは危険だということは、はつきりくつきり脳に刻み込まれました。」

「わかってくれたんだね。良かったー。じゃ、次は花咲く野原で愛し合おう」

は？

「あの……決して……」

次は、ないです。窓を閉める話から、どこをどうたどれば花咲く野原になるんでしょうか。

トーニオさんはやりとし、

「じゃ俺、寝苦しい部屋に戻るから。お休み、メイドくん」

と言いつつ、僕に顔を近づけるんです。

「お休みのキス、欲しい？」

「結構です」

笑いながら颯爽と出て行くトーニオさんを横目で見て、僕はうなだれました。

問題その一。僕は不道德なことなんて何一つしていなくて、部屋の鍵は窓から入ったトーニオさんが開けたんだということを、どうやってレオンさんに釈明すればいいんでしょうか。

僕は、本当にあの人が怖い。

朝の挨拶でさえ勇気を振り絞ってるのに、話しかけるなんてとても……。

問題その二。こういう事はやめてほしいと、トーニオさんにどう伝えればいいんでしょうか。

レオンさんは僕なんかとは口を聞かないけれど、トーニオさんは気さくに話しかけてくれます。伝え方を間違えれば、トーニオさんまで僕と話してくれなくなるかもしれない。

問題その三。トーニオさんがした事で、僕の記憶が掘り起こされ

たような気がします。

とつくに忘れていたはずの、おぞましくも思い出さくない記憶。これについては考えないことにしました。決して思い出さないように、封印をして。

僕は深呼吸をして、ベッドに横たわりました。

眠れないままドアに目をやり、ふと思いました。

男の子になると決心したはずなのに、少しも変わってない。

うじうじした性格も緊張すると言葉が出なくなる体質も、まるっき以前と同じ。

これじゃ、いけない。男の子になりきって闘うって決めたのに。

目下の敵は、自分の釈明すら出来ない自分自身です。

明日の朝、ドアの鍵と窓についてレオンさんに説明するんだぞと自分に言い聞かせ、何度も口上を練習しました。

よし行けるとベッドの中で拳を握り目を閉じた僕の脳裏を、ある疑問がよぎって消えました。

トーニオさんは、何故ドアの鍵を開けたんでしょうか。

まるで、レオンさんが来るのを待ってたみたいに。

そして僕は眠りの瞬間が訪れるまで、闇のようなレオンさんの美しくも怖ろしい漆黒の瞳の中でもがいたのでした。

### 3 瞳の奥の想い ？

翌朝の早い時間、僕はロールパンを焼いていました。タベはよく眠れなかったから、眠い目をこすりつつ。

タイル貼りのキッチンは広くて清潔で、窓から明るい日差しが差し込んでいます。

パンは上手く焼けたけれど、コンソメスープは失敗でした。

プロのように透き通ったスープを作るのは難しい。

それでも味はまあまあかなと自分を慰めながらサラダ用の野菜を刻んでいると、レオンさんが入って来たんです。

とても存在感があつて、ただ立っているだけで熱と光を発散しているかのようなレオンさん。

糊のきいた白いシャツを着て、黄褐色の鹿革のズボンに黒のブー

ツ 乗馬に出かけるような装いです。

「あの……」

レオンさんが顔を上げ、突き刺すような目で僕を見た瞬間、吹き飛んでいった僕の言葉。

夕べのことを釈明するために寝る時間を惜しんで考えた口上は、咽喉の奥であえなく玉砕して消えました。

「……ごさいます」

「おはよう」

目を伏せて小声で朝の挨拶をするのが精一杯の僕の頭上から、レオンさんの低い声が聞こえます。

レオンさんはテーブルに乗ったお皿を抱え、キッチンから出て行ってしまいました。

僕は軽蔑されてる。

レオンさんの冷ややかな気配から、そう感じました。

どうしてすらすらと釈明できないんだろう。

タベのことを理路整然と説明し、僕には窓を開けっぱなしにした以外に落ち度はないということを、堂々と胸を張って話せばいいのに。

でもレオンさんが戻って来た時、僕はやっぱり情けない奴に戻り、目を合わせないように黙々と胡瓜を刻んでいたんです。

背中に視線を感じ振り返ると、カトラリーを手にしたレオンさんが僕を見ていました。

「これも持つて行つていいのか」

「……はいいつ」

気合をいれた僕の声は見事に裏返し、包丁を握り締めた姿には鬼気迫るものがあつたのかもしれない。レオンさんは微かに笑い、再びキッチンから出て行きました。

笑われた。でも。僕は、わくわくと小躍りしました。

あの人が、話しかけてくれた。しかも、手伝ってくれてる

！

喜び勇んでハムやチーズやその他の料理をワゴンに寄せ、食事をしながら給仕もできるよう道具一式も乗せて、ダイニングに向かっただんです。

「今日はお出かけから、お昼はいらないよ」  
トーニオさんは夕べのことなど無かったかのように、明るく振る舞っていました。

僕は丁寧な対応をしようと気を配りながら、どうやってトーニオさんを傷つけずに釈明しようかと知恵を絞り、結局トーニオさんの前では話せないことに気づきました。

「俺もいない」  
レオンさんの一言に、がつくり肩を落とす僕。いないんじゃ釈明できない。

朝食の後片付けを終え、僕は自室に戻りました。

僕の部屋は広くて、薄い水色の壁紙や曲線を多用したベージュの家具が可愛らしく、カーテンもベッドカバーもソファも薔薇模様です。

この間まで古くて狭い兵士宿舎に住んでいた僕としては落差が大きく、落ち着きません。

しばらくカウチに横たわって本を読んでいたけれど、豪華な部屋ではどうしても落ち着けず、どうすれば一番落ち着くかと考えた末、アンナさんからモップを借りて廊下の掃除をすることにしました。

慣れない家の中では、長年し慣れたことをするのが一番落ち着きます。

黒いエプロンをつけ三階から一階まで廊下を磨き立て、満足感で一杯になりながら裏庭でモップを構えました。 棒術です。

一年前、恋と冒険を求めて各地をさすらう傭兵だったパパが、とうとう落ち着くことを決めてトライゼンの王宮兵士となり、時間に余裕ができたせいか僕に格闘技を教えてくれたんです。

もつともレスリングも中国拳法も剣術も、僕には才能が無いとパパはさつさと諦めてしまったけれど。

唯一及第点をもらえ、時々ではありますがパパから教わったのが棒術です

基本動作を続けていくうちに汗だくになり、ほんの少しですが自分が強くなったような気がしました。

昼食はアンナさんのリクエストで Pasta にして、午後の早い時間から夕食の仕込みに取りかかりました。

ミートローフは思ったよりもいい出来ばえで、ヨーグルトスープの入った鍋と一緒にワゴンに乗せ、別のワゴンには胡瓜と海老の冷製、ナスのサラダを乗せて、僕は胸を張って食卓に向かったんです。

「前の家でもそうやって給仕してたのか？」

レオンさんが尋ねたから、僕は深呼吸しました。

「はい。よくお客様が見えたので」

「客？」

「その……親しい女性とか。あ、ディリアさんと出会ってから、そんなこと一切無いです。本当です」

「パパと親しい女性が食事してる間、メイドくんは何してるの？一緒に食事するの？」

僕がミートローフを切り分けている横で、トーニオさんはお皿をレオンさんに渡しています。

「その時々で違っつていうか……。一緒に食べようって言われたらそうしますし、二人でレストラン気分を味わいたいみたいだったら、給仕に専念したり……」

「給仕ねえ。娘に給仕をさせて、恋人と食事をする父親ってどんなだろう」

トーニオさんが呟くように言い、僕は困惑しました。

「パパにやれと言われたんじゃないんです。僕の方から言い出したんです。ママが欲しいと思ったから。パパが素敵な女性を射止められるなら、給仕だって何だってします。パパにレストランでデートするお金が無かったのは僕を養ってたせいだし……」

レオンさんがじつと僕を見ていたから、言葉に詰まってしまいました。

「すみません。……トーニオさんの言う通りだと思います。僕が給仕をするせいでパパがどんな風に見えるかって、考えたことがありませんでした」

「おまえが頑張ったから、パパはディリア母上を射止めた。それでいいじゃないか」

レオンさんが言い、僕の心にぱっと明かりが灯りました。レオンさんが褒めてくれた  
？

でもその後レオンさんはいつものように口数が少なく、話し上手なトーニオさんと精一杯気の効いた応対をしようと頑張った僕のお喋りが続くばかりで、夕食は終わってしまったんです。

夜。ベッドに横たわった僕は、何とも言えない恐怖に襲われました。

記憶の奥底から蘇る光景。

忘れたはずなのに、封印したはずなのに、ゆらゆらと亡霊のように現れるあの顔。

外廊下のガス灯がぼんやりと光り、真っ暗な部屋の中が照らされる。

眠ってる僕の体をまさぐる男の手。酒と煙草の臭い。

僕は頭からガーゼケットをかぶり、あれは昔のこと、もう終わったことだと自分に言い聞かせました。

……でも、消えない。

呼吸が苦しくなつて汗が噴き出し、突然おこりのように全身が震え、僕はうつ伏せになってベッドにしがみ付きました。

汗が止まらないのに、寒い。

ドアがかちつと音を立てて開いたような気がして、ガーゼケットの隙間から何度ものぞき、鍵を掛けたことを確かめました。

時間が経つのが遅く、延々と苦しみが続く。

夕べもろくに眠れなかったのに。

決してトーニオさんが悪いわけじゃない。

あの人は何も知らないまま、僕をからかっただけ。

でも誰かが部屋に入ってくるんじゃないかとびくびくしている限り、眠れない。

そう気がついて、僕は枕とガーゼケットを腕に抱き、部屋を出ました。

どこなら眠れるのか。

どこに行っても亡霊がついて来て、泣きそうになりながら一階に降り、サロンのソファで眠ろうかと考えてやめました。ドアのある部屋は怖い。

勝手口から裸足で外に出て、眠れそうな場所を探して庭を歩きました。

厩に入ると血統の良さそうな馬たちの間に、パパの老牡馬のカムタンが侘しく収まっています。

ハネムーンから戻ったら新しい馬を買うとパパは言ってたけれど、僕はこの年寄り馬が好きです。

思い出をいっぱい背負ってくれているから。

柵を乗り越え中にもぐり込むと、カムタンは鼻面を僕に押し付けて来ました。

僕のママが買った宝くじが当たり　と言っても二十万リキュだけれど　それを頭金にして買った馬です。

パパとママが仲良かった頃、僕は六歳ぐらいだったと思う。カムタンの後ろに荷車を取り付け、三人でピクニックに出かけたことをぼんやりと思い出しながら、藁の上に置いた枕に顔をうずめガーゼケットに埋めました。

馬房はどんよりと暑かったし、蚊がぶんぶん飛んでいたけれど、気にしませんでした。

馬を買ってしばらく経って、僕が七歳の時、ママは家を出て行ってしまった。

そんな事は思い出さないように、ピクニックの思い出だけに浸りながら、ようやく眠りにつきました。

夜明け前、朝の気配が白々と馬房に差し込んでいます。

馬具室の方角からカタカタと物音がして、ゲイルお爺さんが来たんだと思い、僕は飛び起きました。

僕が馬房で寝たと知ったら、ゲイルさんは心配するに違いありません。

枕とガーゼケットを抱え、忍び足で馬具室の前を通ると扉が半開きになっていて、中にいる人物が見えます。

「レオンさん……？」

思わず呟いて、あっと口を閉じたけれど既に遅く、レオンさんが驚いた表情で振り返りました。

黒い瞳が男の子のパジャマを着た僕の全身をたどり、枕とガーゼケットで止まります。

僕の視線はレオンさんの腕に釘付けになりました。血が出てる……。

「怪我したんですか、レオンさん」

僕はガーゼケットと枕を放り出し、レオンさんに駆け寄りました。血は白いシャツ一面に飛び散っていて、レオンさんは水に浸した布で腕の傷口をぬぐっています。

「僕にやらせてください」

きれいな布と消毒薬をつかみ、僕はレオンさんの前に座りました。「パパの怪我の手当てを何度もしましたから、慣れてるんです」

レオンさんは迷っている様子でしたが、てきぱきと傷口を消毒する僕にあきらめて、手にした布を置きました。

「パパは怪我が多かったのか？」

「はい。……あの、兵士つて乱暴な人が多くて」

嘘です。本当は、酒場で酔った勢いで喧嘩をして帰って来たんです。でもそんなこと口にできる訳がありません。

「レオンさんはどこで……？」

出かけてたのかなと、白いシャツと濃紺のズボンに目を走らせました。

夜中にどこへ出かけたんでしょうか。パパと違って、レオンさんからお酒のおいはしないけれど……。

返事がないので顔を上げると、レオンさんは傷薬を塗る僕の手をじつと見つめています。

聞いてはいけない事なんだと、僕は悟りました。

つまり……恋人？ でもどうして怪我を？ レオンさんの恋人には別の恋人がいて、三角関係のもつれから刃傷沙汰になったとか？ パパの過去の事件をあれこれ思い出しながら僕の妄想はどんどん膨らみ、同時にどんどん悲しくなりました。

レオンさんはパパみたいに浮気性なんでしょうか。

何の根拠もなくパパとレオンさんが重なって、僕の気分はどんよりと暗く落ち込んでいきます。

手当が終わり、レオンさんは片付けようとする僕から薬瓶を受け取り、棚に収めて振り返りました。

「ありがとう。助かったよ」

その一言で心がぱあつと明るくなり、笑顔でうなずく僕。

レオンさんの方はいえはもつと何か言いたそうに唇が開き、すぐに閉じ、僕に手を伸ばします。

僕の頭を丁寧に撫で、レオンさんは馬房から出て行きました。

頭を撫でられて喜ぶ子犬になった気分をしばらく味わったけれど、やがて嫌な予感が込み上げてきました。

今は、朝なんです。寝起きの僕といったら……。

「ひっ」

馬具室の棚に置かれた鏡を恐る恐るのぞき、僕は絶叫を呑み込みました。

僕の寝起きの頭　　凄まじいまでに四方八方に飛び跳ねた髪。  
レオンさんは頭を撫でくれたんじゃないくて、僕の可哀相な髪を直しただけなんだと気づき、全身から力が抜けていきました。

部屋に戻って清潔な衣服に着替え、キッチンに入るとトニーオさんがオムレツを焼いていました。

「たまには手伝うよ」

「はい」

僕はにつこりして、フライパンの中に目をやりました。

「上手なんですね」

オムレツは、ほど良い色に焼けています。形もパーフェクト。オムレツを綺麗に焼くのは、難しいことです。

「俺の特技のひとつ。特技は他にもあるけど、知りたい？」

はい、なんて言ったら大変なことになりそうです。

「いえ、いいです」

安全を考え、遠慮しておくことにしました。

トーニオさんのくくつと笑う声とおムレツをお皿に乗せる音を背中で聞きながら、僕は壁に設えられた大きな食器棚からサラダ用のガラス鉢を取り出しました。

振り返ると目の前にトーニオさんの胸があり、ひっと叫び声を呑みこんだ僕からガラス鉢を取り上げて横のテーブルに置くと、トーニオさんは食器棚に両手をついて、僕を腕の中に閉じ込めてしまっただんです。

「拒絶の練習だよ、メイドくん。しつこく迫る男を、一発で撃退してごらん」

トーニオさんは真顔だけれど、唇の端に笑みがあります。

僕は、必死になって頭を働かせました。拒絶　拒絶　撃退する言葉。

「早くしないと間に合わなくなるよ」

トーニオさんは視線を僕の唇に落とし、少しずつ唇を近づけて来ます。

「えっと……えっと、嫌です、とか、勘弁してください、とかっ」

「海千山千の男は、そんな程度じゃ引き下がらないの」

しどろもどろの僕を見るトーニオさんの目は妖しく、首を僅かに傾けています。

僕はどうすればトーニオさんを怒らせないで逃げ出せるか、どこかに逃げ場はないかと辺りをきよきよ見回しました。

「時間切れかな」

トーニオさんの唇が僕の唇に触れそうになり、僕は食器棚に目一杯背中を押しつけました。

食器棚に張り付いたポスターのようになって、涙目になって首を横に振る。

「子供相手に何やってるんだ」

はっとキッチンの入り口を見ると、腕組みをしたレオンさんが立っています。

不本意なことに僕の目から涙が一粒こぼれ落ち、僕は食器棚に張り付いたまま、蟹のように横に移動しました。

「メイドくんの反応が面白くて、ついついやり過ぎてしまう……」

トーニオさんは僕を見て涙に気づき、はっと口を閉ざしました。

「ねえ、メイドくん。何も泣かなくなつて……」

その言葉は最後まで聞けませんでした。

そばにあった布巾をつかみ、走ってダイニングに向かったから。

僕が泣いてるのは、自分が情けないからです。

男の子になりきって自分を守るんだって決めたのに、トーニオさんにかかわれない方法も思いつけないし、やめてほしいと上手に伝えることも出来ない。

その上うじうじ泣いたりなんかして……。

せめて泣くのはやめようと、袖で目を拭いました。

「ごめん、悪かった」

トーニオさんが追いついて来て、言いました。

「だけどメイドくん、よく思い出してね。俺は確かにからかったけど、ぜんぜん君に触れてないよね？ その柔らかーいほっぺを撫で撫でしたけど あ、髪と肩には触れたっけ？ それ以外、全然触れてないんだよ、とっても残念だけど。無理やりキスするつもり

もなかった。ぎりぎり粘るつもりだったけど。それからしつこい男は、ぶん殴るか張り倒すかすればいいんだよ、俺が言うのも変だけど」

「……まだトーニオさんの性格がよくわからないから、どうすればいいのかわからないんです。同じことをしても、人によって受け取り方が違うし……」

「受け取り方って……。君、そんなことまで考えてんの？」  
トーニオさんは、困惑しているようです。

「泣いてるのは、自分が情けないからです。うまく意思を伝えられなくて」

僕は困っているトーニオさんを見上げました。

「同じ家に住んでるんだから、そろそろ性格をつかんでもいい頃なのに、まだよくわからなくて……。こんなことを尋ねて気分を悪くしないでください。……トーニオさんははっきり言われた方がいいのですか、それとも遠まわしにそれとなく言われた方がいいですか……？」

「はっきり言つてやれ。それで駄目なら殴ればいい。本人がそうしろと言ってるんだから」

横からレオンさんに言われ、トーニオさんは苦笑しました。

「おいおい」

「自業自得だろう」

「泣かせたのは悪かった。メイドくんはなかなか落ちないから、口説き甲斐があるよ。俺の名誉をかけて、本気出そうかな」

さらさらの金髪をかき上げながら僕を見るトーニオさんのそばに、レオンさんがゆっくりと歩み寄ります。

「いい加減にしるよ」

低い殺気立った声に、僕はびくつとしました。

トーニオさんの顔からいつもの冗談めいた笑みが消え、鋭くレオンさんを睨み返します。

広いダイニングルームがしーんと静まり、トーニオさんとレオンさんが睨み合ってる。

二人の顔はまるで似てないけれど、身長は同じくらいで体格も似ていて、本当の兄弟みたいに仲がいいと僕は思っていました。

でも、違つかもしれない。決して仲がいいわけじゃないかもしれない。

仲が悪いようには見えないけれど、この二人の間には根深い何かがあるのかもしれない。

そう思わせるような獰猛な気配がありました。

「……僕、もう泣きませんから。約束します。だから、やめてください」

今にも殴り合いが始まりそうで怖くて僕は懇願し、レオンさんが射抜くような目で僕を見たから竦みました。

やっぱり、レオンさんは怖い。

そのまま何も言わず、レオンさんは部屋を出て行ってしまいました。

「あの……」

「オムレツ三人分、食べちゃっていいよ」

そう言ってトーニオさんも出て行ってしまったんです。

### 3 瞳の奥の想い ？

僕の食欲はすっかりなくなり、オムレツは昼食に使うことにして、キッチンを片付け自室に戻りました。

馬のいななきが聞こえ窓から外を見ると、レオンさんが馬に乗って出かけるところでした。

その後、本を開いたけれどさっぱり字が追えず ああ、何とも表現できない不安のようなものが胃のあたりでとぐるを巻くんです。

パパと二人目のママが不仲になり始めた頃感じた不安に、似ているかもしれない。

その頃僕たちは隣国のマイセルンに住んでいて、パパは傭兵という職業がら何日も家を空けることが多く、ママは酒場の経営者だったから夜は僕一人で過ごしていたんです。

9歳になっていたし夜一人でいることには慣れていたけれど、ママがパパと喧嘩して 原因はパパの浮気だから100%パパが悪いんだけど 家に帰って来なくなってから一人が怖くなりました。

このままパパもママも帰って来ないんじゃないか、僕はずっと一人ぼっちなんじゃないか。

そう思うと不安が胃の下あたりから這い上がってきて、吐き気をもよおすほどでした。

今もそう。兄弟喧嘩の原因を作ってしまったって、僕はこの家にいられるのでしょうか。パパの幸せの邪魔をしているんじゃないでしょう

うか。

そんな事をくよくよ考えていると気持ちが悪くなってきた、僕は部屋を出て一階に降り、勝手口から庭に出ました。

庭師が丹精込めた花園では、今を盛りとブーゲンビリアが咲いています。デイリアさんは、南国の花が好きなんです。

花園の向こうでアンナさんが箒を左手に握り、右手で腰をとんと叩いていました。

「腰、痛いんですか？」

長年リーデンベルク家に仕えるアンナさんはきらきら光る銀髪を持ち主で、小柄で厳めしい顔つきですが、68歳という実年齢より若く見えます。

「お掃除、僕がやりますよ」

「お嬢様にお掃除までさせられませんよ。それに長生きの秘訣は、元気に働くことなんですよ」

と朗らかに笑ったので、僕もほっとした気分で笑いました。

「……レオン様がこの家に来られたのは、確か9歳の時だったと思います。最初の頃は、トーニオ様と殴り合いが絶えなかったんですよ」

庭掃除を手伝いながら色んな話をしていた時、兄弟の話が出たんです。

「男の子ってそういうものですよ。上下関係をはっきりさせないと気が済まないっていうんでしょうかねえ」

「でも、トーニオさんがお兄さんなんでしょう？」

「1ヶ月早く生まれたというだけでね。便宜上そうなったんですけど、当人達は納得していらっしゃらなかったみたいですね。デイリ

ア奥様が心配されて、でもまあ殴り合いは徐々に収まって。そうすると今度は競争が始まりましてねえ。あの二人ときたら」

アンナさんは、昔を思い出したようにくすくす笑いしました。

「何かにつけ競争して。学校の成績やら女の子から貰ったラブレターの数やら、何でも競争の対象になってましたねえ」

アンナさんの顔は、とても懐かしそうでした。

「6年生ぐらいまではそんな風でしたけれど、7年生辺り

去年ぐらいからは、ぱったりそういう事もなくなつて。まあ、それもお二人が成長なさったせいでしょうね。レオン様は悪いお仲間とのお付き合いが忙しくなつて、トーニオ様は悪い女性とのお付き合いに忙しくて、同じ土俵で争うことが無くなつたみたいですよ。ホホホ」

明るく笑うアンナさんの顔を、僕は信じられない気持ちで眺めました。

悪いお仲間、悪い女性。どちらも、ホホホでは済まない気がするんだけど。

夕食の時間になつても、二人は帰つて来ませんでした。

トーニオさんは悪い女性と、レオンさんは悪いお仲間と一緒にいるんでしょうか。

夜10時を過ぎた頃、僕はあきらめて自室に戻りました。

眠る時間が近づくにつれ呼吸が苦しくなり、冷たい汗をかきながら両手で顔を覆ってしまいます。

ベッドに入るのが怖い。

この部屋で眠ると想像するだけで、心臓が破裂しそうなくらいに拍動します。

枕とガーゼケットを抱え、逃げるように部屋を出ました。蚊に刺された跡が首に二カ所もあって、外で眠るのはやめた方がいいかもしれない。

3階にはパパとデイリアさんの部屋が6室と、僕の部屋と、客室が8室、階段の横にオープンスペースの小さなサロンがあります。トーニオさんとレオンさんの部屋は2階、アンナさんの部屋は1階にあるから、今夜3階にいるのは僕だけです。

3階のサロンにあるソファの向きを変え、背もたれの陰に身をひそめるように横たわり、ガーゼケットに埋もれました。

何だか眠れそうな気がする。  
そう思ったのは眠気が襲ってきた時だけで、僕は夢の中でも聞いていました。

廊下で光るガス灯。真っ暗な部屋。パパと三人目のママと僕が暮らしていたアパートの一室。

灯りに照らし出された男の顔が髭面になり、トーニオさんの顔になり、また髭面になり、煙のように歪みながら僕に近づいて来ます。

手が僕の体に触れ、怖くて吐き気がして苦しくて、僕は叫びました。

触れた手が激しく僕を揺さぶり、起こそうとしています。声が聞こえる。「起きろ、起きろ」

「いやだ、いや！ 触らないで、あっち行って！ いやだあ っ」  
僕は狂ったように暴れ、叩いている相手がレオンさんだということ

とに気づいて飛び起きて、ソファの上を後ずさりしました。

ソファの端っこで固く小さくなり、ガーゼケットで顔を覆い、ぼろぼろ泣くばかり。

「今夜は馬房で眠った形跡はないし、一応様子を見に上がって来たらこういうことか。どうした？ なぜ部屋で寝ない？」

レオンさんの口調は静かで、困惑しているみたいだったけれど、僕はただ首を横に振ることしか出来ませんでした。

「どうしたの。叫び声が聞こえたんだけど」

トーニオさんの声がして、立ち上がるレオンさん。

「見ての通りだ。部屋で眠れないらしい」

トーニオさんの息を呑む音が、僕をますますみじめな気持ちにします。こんな姿、見られなくなかった。一番恥ずかしい部分を見られたみたいで、涙が止まりません。

「わかったよ、俺が悪かった。メイドくん、ごめん。そんなに気にするとは思わなかったんだ。だけど一言、近寄るなって言ってくれたら　ああ、言いにくいよね。そうだよな」

「話せよ、何もかも」

ソファが沈み、レオンさんが僕の縮こまった足のそばに座りました。

「トーニオが原因か？ トーニオがした事だけで部屋で眠れなくなるといのは、妙な気がするよ。別の理由があるんじゃないのか？」

レオンさんはそう言ってガーゼケットを引き剥がし、僕の顔をのぞき込みます。

「俺を見る、綿帽子」

わ、綿帽子　？　顔を上げると、心配そうなレオンさんの顔。

涙でばやけてるからきつと見間違いだと思ったけれど、何度瞬きしても心配してくれているレオンさんの顔が見えます。

「思いきって話してみる。何があった？」

「な、何も……ただ、悪い夢を……見た……だけで、何でもない……んです……大丈夫です、もう……」

二人に安心して部屋に戻ってもらいたい一心で、僕はしゃくり上げながら答えました。

「大丈夫じゃないだろう」

レオンさんはソファの背もたれに片手を置き、トーニオさんは床に座って僕を見上げています。

「ねえ、メイドくん。答えたくないなら、無理に答えなくてもいいんだけど。もしかして、もしかしてだけど、昔の辛い記憶なんかがある？ タチの悪い男関係の」

レオンさんがトーニオさんを睨みつけ、僕は唇を噛みました。

どうしよう。嘘をついた方がいいでしょうか。

でも、この二人に嘘が通じるとは思えない。

悪いお仲間と悪い女性のおかげで人生経験が豊富そうで、僕のちっぽけな嘘なんか見抜いてしまいそうです。

ちらつと二人に目をやるとトーニオさんは頬杖をついて指の爪を興味深そうに見ているし、レオンさんは真摯に僕の答を待ってるみたい。

レオンさんは、どうして僕なんかを心配してくれるんでしょうか。僕には、レオンさんの気持ちかわからない。

僕が黙っていると辺りはしーんと静まり返り、二人とも部屋に戻ってくれそうにないし、ほんの頭の部分だけ話してみようと思ったんです。

「あの……パパと三人目のママが喧嘩して……結婚して半年しか経ってないのに……パパが浮気したから……」

「ひゃあ、親父さん、やるねー」

ちやちやを入れるトーニオさんをレオンさんが睨み、トーニオさんは降参するように両手を上げました。

「ママはベネルチアの貿易会社に勤めてて……仕返しに会社の上司や知人やらを恋人にして……時々僕を友達の家泊まらせて……家に恋人を呼んだり……」

「ママもやるじゃん」

「黙ってるよ」

レオンさんの声は、心から怒っているようでした。

でもトーニオさんのちやちやに僕は勇気づけられたような気がして、気がつくとな本当のことを全部話していたんです。

「友達の家泊まる予定が駄目になって、夜一人で寝てたら……玄関がかちゃっと開いて、部屋のドアもかちゃっと開いて……でも、ママやパパじゃないって……煙草の臭いがしたから。パパもママも煙草は吸わないのに。……ママの友達でした。一度だけ、会ったことが……学校から帰ってきたら、その人とママが話してた。その人が僕に触ってきて……僕は怖くてすごく嫌で……」

言葉は続かず、わっと泣き伏してしまいました。

拭っても拭っても涙がこぼれ、こみ上げる恥ずかしさと屈辱。

「最後までいったの？」

トーニオさんの質問にレオンさんの鋭く息を吸う音が聞こえ、僕はぎよっとして慌てて首を横に振りました。

「そんな……いいえ。ちょうどママが帰ってきたから。……僕が家

にいることに驚いて……すぐにその男の人と一緒に出て行きました……」

「そいつの居所、わかるか？」

レオンさんの口調がとても冷たくて、僕はぎくりとしました。

「……ど、どうして？」

「殺すんじゃないかな」

と、トーニオさん。

「妹を傷つけられたら、もう殺すしかないよねえ。しかし触っただけって言うなら、半殺しで川に放り込むだけで済ませてやってもいいかな」。もちろん、誠心誠意詫びるという条件付きでね。メイドくんは何ひとつ悪くないんだから、当然だよ」

「お前は どうしたい？」

レオンさんが、僕に尋ねます。

「そいつを探し出すことはできるぞ」

「何もしてほしくありません。僕はもう、忘れない」

正直な僕の気持ちです。

レオンさんは、静かに立ち上がりました。

「とりあえず部屋に戻ろう。立てよ」

僕は目を丸め、ガーゼケットを首まで引き上げて首を振りました。部屋に戻るなんて、出来ない。

部屋に戻ってベッドで眠ることを想像しただけで、息苦しくなります。

「……僕、ここでいいです。お二人は戻ってください」

「誰かが部屋に入って来そうで怖いのか？」

レオンさんは微笑みましたがそれはそれは怖ろしい皮肉めいた微

笑で、いつの間にかレオンさんの顔がいつもの怖い表情に戻っていて、僕の体はこわばりました。

「そういうわけじゃ……。その、少し落ち着いたら……。戻ります」

「お前を苦しめた奴は、ここにはいない。それとも俺やトーニオがその腐った野郎と同じことをしそうで怖いのか？　俺たちの目の届かない場所なら、安心して眠れるというわけか」

「違います！　そんな……。全然違いますっ」

レオンさんの端整な顔に浮かんだ薄寒い微笑が消えたと思ったら両腕が僕に向かって伸び、僕はあっと思う間もなくガーゼケットでぐるぐる巻きにされ、レオンさんの肩に抱え上げられていました。

「わ、降ろしてください。お願いだから。僕、ここで寝ます」

じたばたする僕には全く頓着せず、レオンさんは痩せつぽちの僕を軽々と部屋まで運び、まるで荷物を置くみたいにベッドにどさりと放り投げました。

「迷惑なんだよ、腐った野郎と同じにされちゃ」

「してません、全然してませんっ」

「じゃあ、何で部屋で眠れないんだ」

そんなこと聞かれても……。ドアがかちゃつと音を立てて開きそうで怖い　そんなことを言ったら、レオンさんはますます怒るでしょう。

夜中にドアを開けて入って来そうな人は、レオンさんかトーニオさんぐらいしかいないんですから。

僕にもどうして怖いのか分からない。どうしたらいいのか分からない。

「メイドくんのその男の子の格好は、お父上の差し金？ 娘に手を出すなってメッセージが、あからさまだよね。その上メイドくんにまでケダモノ扱いされたんじゃ、俺たち立つ瀬ないよ」

「そんな……僕、そんなつもりは……。それにパパの差し金というのは、違います」

男の子を演じているのは、外界のすべてから自分を守るため。

泣きたくなるくらい情けない自分を守るには、戦闘服を着ているつもりで別の自分を演じるしかないんです。

「俺たち？」

レオンさんは片方の口角を上げて、トーニオさんを見ました。

「罪状持ちのおまえと、一緒にされたくないな」

「仲間割れはよそうよ、レオンちゃん。いま大事なのは、メイドくんをどうするかだろう」

「ふん。……いい方法がある」

レオンさんは、視線を僕に転じました。

「今夜から、俺とトーニオはこの部屋で寝る。見える所に俺たちがいるんだから、お前はいつ俺たちが部屋に入ってくるか、びくびくしなくて済むというわけだ」

「そんな！」

どうしてそうなるんですか。僕にはレオンさんの考え方が理解できない。

「同じ部屋にいても何も起こらない。そうお前が確信できるまで、俺たちは同じ部屋で寝る」

「俺、自信ないけど」

トーニオさんが呟き、レオンさんに見咎められました。

「すぐ戻るから、待ってる」

レオンさんは僕にそういい残し、トーニオさんには「話がある」と言い、二人で部屋を出て行きました。

どうしてこんなことになったのか。僕は自分の弱さが情けなくて恥ずかしい。本当なら、自分で解決しなければいけない問題なのに、あれが起きたのは、僕が十一歳の時です。ずっと忘れていたのに、今頃になって甦るなんてひど過ぎる。

遠くで物音がして、僕はびくつとして耳を澄ませました。

何かの倒れる音。割れる音。鈍い音。

喧嘩の多かったパパのそばにいたせいで、僕が聞き慣れた音  
殴り合う音。

レオンさんとトーニオさんが殴り合ってる？ まさか。

長い時間が経った気がした頃、トーニオさんとレオンさんが戻って来て、部屋にマットレスを運び入れました。

二人共、顔にすり傷や黒っぽい痣ができています。

「あの……」

僕はレオンさんに話しかけ、きつと答えてもらえないと思ったから、トーニオさんに視線を向けました。

「その顔、どうしたんですか？」

「ああ、これ。ちょっと、寝る前の運動。大したことないよ」

トーニオさんが答えます。やっぱり殴り合っただけでしょうか。…  
…どうして？

野宿の準備をするかのように手際よく、トーニオさんはドア脇にレオンさんは窓の下に即席のベッドを作り、二人共さっさともぐり

込んでしまいました。

僕は、眠れない。

落ち葉にくるまった虫のようにガーゼケットにくるまって、いつまでもゴソゴソ。

やっぱりドアが気になり、でもそこにはトーニオさんが寝ていて、目が合うんじゃないかとびくびくしながらそつと何度もドアを伺いました。

静かな足音が聞こえ、ガーゼケットから顔を出すと、レオンさんが僕の横に立っています。

「ドアが気になるのか」

どう答えようかと考えたけれど、レオンさんは僕の答を待たなかった。

さつとトーニオさんに近づき、「交代だ」と言っただけです。

「あのなあ、お前さー、なに兄上に命令してんだよ」

「交代してください」

「ふふん。最初っからそう願えばいいんだよ」

トーニオさんは機嫌を直し、不機嫌そうなレオンさんの横を通り、窓の下の寢床にもぐり込みました。

「あ、あの……」

僕はもう耐えられなくなって起き上がり、勇気を振り絞ってこの茶番の主催者たるレオンさんに訴えたんです。

「本当に、もう、大丈夫ですから。僕一人で、ここで眠れそうですから」

レオンさんは考え込むような表情で、僕を見ました。

「お前、男はみんな、親父さんや腐った野郎と同じだと思ってるだ

ろ」

「そんな……そんなこと思ってますん」

「いや、心の奥底で思ってるよ。だからドアを開けて悪い男が入って来ると思い込んでしまっただよ。善良な男が入って来るかもしれないだろ？ たとえ悪い男が入って来たとしても、お前を助ける者がいる。俺やトーニオが助ける。トーニオはああいう奴だが、卑劣なことはしない」

「そうそう。俺はこう見えても女性の味方で、礼儀正しい紳士だよ」

トーニオさんはマットレスの上で肘枕をして、こっちを見ています。

「お前が俺たちを信じるまで、俺たちはここにいます。わかったか？」

僕がうなずくとレオンさんはドアの前の寝床にもぐり込み、すぐに寝入ってしまった。

レオンさんは怪物のような人だと、僕は思いました。トーニオさんが美しい悪魔なら、レオンさんは美しい怪物です。

怪物がドアを守ってる。

そんなイメージが頭の中に浮かび、僕はほっとした気分になりました。

火を吹くレオンさんのイメージは可笑しかったけれど、とても強そうで僕一人くらい守ってくれそうです。

ドアの前に立つ美しい怪物のレオンさんを思い浮かべながら、僕は静かに眠りにつきました。

夜中に目が覚めた時、誰かがそばに立っている気配がありました。

眠った振りをしていると、その人はそつとガーゼケットをかけ直し、寝ぐせがついているらしい僕の髪を撫でてくれました。

そうしてレオンさんは、ドアの前の寢床に戻って行ったんです。レオンさんの黒い瞳は冷たくて険しくて厳しくて怖いけれど、その奥に優しさや思いやりがたくさんあるんだと僕は気づき、胸がいつぱいになりました。

#### 4 闇と秘密 ?

僕は、ふわふわと空を飛んでいました。

眼下には王都クラレストの街並みが広がっています。

街の中心にあるのは茶色い煉瓦造りのクラレスト城、もしくはトライゼン国民が親しみを込めて「我らが王宮」と呼ぶコの字型の建物です。

国王陛下や王族の方々がごく普通の家族のように住まわれる王宮を庭園や噴水や広大な緑の敷地が囲み、高い煉瓦塀が街と王宮を隔てています。

王宮を中心として五つの大通りが外に向かって放射状に、七つの通りが同心円状に広がっていて、僕たちが住むリーデンベルク邸やその他の貴族邸は最も内側の同心円内にあります。

街の外側を昔の環濠の名残りである用水路が流れ、その外は地平線まで続く牧草地です。

羊や牛が草を食み、豚や鶏や山羊が放し飼いにされている田園に僕が降り立つや、鶏が襲ってきました。

鶏の奴が大きな羽を伸ばして僕の鼻を撫でるから、鼻がむずがゆくてたまりません。

「おのれ、鶏。成敗してくれる」

甲冑を着込んだ勇者、すなわち僕は言い放ちました。何故か鍋ぶたを盾にしていたけれど、気にしませんでした。

腰に吊るした焼串をすらりと抜き、僕は鶏めをグサリと突き刺した。

「見たか、僕の力を。ハハハハ」

焼串に貫かれた美味しそうなローストチキンを掲げ、高らかに笑う僕。

何処からかクスクス笑う声が聞こえ、今度は耳がむずがゆくなつて来ます。

ぱつちり開いた僕の目の前に透き通るような青い目が二つ、可笑しそうに瞬いていました。

僕の隣にトーニオさんが肘枕をして長々と横たわり、手にした孔雀の羽で僕の顔を撫でています。

「ひっ、ひっ」

トーニオさんは目で舌なめずりしていて、僕はローストチキンの気持ちがよく分かりました。

勇者の座から転げ落ちた僕は、首だけでもたげてずり上がり、ヘッドボードに頭を打ちつけて飛び起きたんです。

「おはよう、メイドくん。鶏との決闘は終わったかい？」

「ここで何してるんですかつ」

僕はガーゼケットを抱きしめ、孔雀の羽とくすくす笑っているトーニオさんの顔を交互に見ました。

「君に愛の羽の実物を見せてあげようと思ってね。ほら、これ」

「孔雀の羽でしょう、それ？」

「見た目はそうだけど、実はこの羽には魔法の力が秘められてるんだよ」

魔法……。剣と魔法は大好きです。さっきまで夢の中で剣豪だったし。

「どんな魔法ですか」

僕は、恐る恐る尋ねました。トーニオさんは孔雀の羽でガーゼケツトをなぞりながら、爽やかに言うんです。

「服を全部脱いでくれたら、実地で教えられるんだけど」

「服を……？」

脱ぐ？ 羽？

トーニオさんの普段の言動とパパの周囲で起きた過去の出来事、酒場や兵士宿舎で聞いた様々な話を総合し、とても口にはできない一つの結論が僕の脳を羞恥の色に染めていきます。

「……無かった事にしてください」

吹き出すトーニオさんを横目で見ながら、僕は魔法話を真に受けた自分を罵っていました。

薄い黄色のワイシャツとサスペンダーの付いたズボンに着替え、ウェストコートと呼ばれるベストを着て階下に降りました。

キッチンに入ると、トーニオさんがベーコンを焼いています。

「すみません。今朝もトーニオさんにおまかせしてしまつて」

いつもなら夜明け前に目が覚めるのに、今朝トーニオさんに起こされた時にはすでに夜が明けていたんです。

「いいよー。あ、レオンは勝手にトースト食べて出てったから。俺とメイドくん、二人っきりの朝食だよ。意味深だねえ」

ぎよっとする僕を見て、トーニオさんは可笑しそうに顔をほころばせました。

「全くからかい甲斐があるよ、君は。途方にくれた人形みたいで、何度見ても飽きないなあ、その顔。あ、心配いらない、今後、君に迫ったりしないってレオンと約束したから」

「レオンさんと？」

僕は、トーニオさんの目の下の紫色になった痣に目をやりました。

「トーニオさん。どうしてレオンさんと殴り合いなんかしたんですか？」

「どうして　？　うーん、忘れちゃったな」

やっぱり殴り合ったんだ。

僕は信じられない思いで、トーニオさんの痣を見ていました。

食事の間中、トーニオさんは饒舌でした。

いつもそうですが、トーニオさんは会話が巧みです。

女の子にモテるだろうなああと、僕は惚れ惚れとトーニオさんを眺めました。

遠くから見ていただけなら、トーニオさんという人はとても魅力的です。

近くに来られると、逃げ出したくなりますけど。

それでもトーニオさんの話があんまり面白くて、僕は自分でもわかるくらい満面の笑顔で笑いました。

「あ、いいねえ、その笑顔。メイドくん、笑ってる方がいいよ。ますます可愛いよ」

そう言われて顔が熱くなったけれど、少しずつトーニオさんという人がわかって来て、この家でびくびくしている僕を力づけてくれているんだと思うようになっていたんです。

「フィアの学生っていつもそんな風に、ささやかな喧嘩をしてるん

ですか？」

「まあね。単なる貴族・王族の学校というだけでなく、王都で最も強い学校という名誉が欲しいんだよ。だから他校に挑戦されると受けて立つんだよねえ」

トーニオさんは魅惑的な微笑を浮かべ、オムレツを一さじすくいました。

フィアはレオンさんとトーニオさんが通っている王立ギムナジウムの通称です。

国王陛下のフィア 四番目の離宮 を改築してギムナジウムを創設したため、今でもフィアと呼ばれているそうです。

トライゼンにはギムナジウムが全部で20校ありますが、王都クラレストにあるのはフィアとロイム・ギムナジウムの2校だけです。

ギムナジウムでは10歳から18歳の男女の学生が通い

ギムナジウムの在校生は生徒ではなく学生と呼ばれています

、あるいは寄宿舎生活を送っていますが、各ギムナジウムで特色が大きく違うんです。

フィアは王族・貴族の子弟のみが入学を許可され、ロイムは私立で授業料が高額なため、必然的に平民の富裕層 大商人あるいは大地主の子弟などが入学します。

僕はどちらでもない平民の子だから、他の平民の子と同じく初等学校と中等学校に通って来たし、出来れば高等学校を18歳で卒業して、きちんとした会社に就職したいと考えています。

「ところでメイドくんさ、レオンのこと怖がつてるよね？」

突然レオンさんの話になり、僕は返事に困りました。

「……優しい人だと、今は思っています」

昨夜ガーゼケットをかけ直してくれたことは、一生忘れません。

「最初の頃の印象は、少し残っているかもしれませんが……」

「最初の頃って、ああ、メイドくんって命名された時のこと？ あいつ、どうしてあんなに不機嫌だったと思う？」

「……わかりません」

僕は思わず小さくなりました。何か自分では気づかないことで、レオンさんの気分を害してしまったのかもしれない。

トーニオさんはサラダをつつきながら、興味深そうに僕を見ているんです。

「理由は三通りほど考えられるよ。精神年齢の低い順にね。一つ目。好きな女の子には意地悪したくなる。この場合、精神年齢は幼児並みだな」

レオンさんの精神年齢が幼児並み      あり得ない、と僕は思いました。

「二つ目。自分の居場所がわからない女の子がいて、やっとその子が見つけた居場所というのが全然その子にふさわしくない場所で、その事を言ってやりたいが声をかけ辛くて、そんな自分のもやもやした心理状態に苛立って不機嫌になってしまった」

居場所がわからない女の子って、もしかして、僕      ？

「あの……もやもやした心理状態って？」

「へえ。メイドくん、男の心理に興味あるんだ」

「えっ。そんな……」

トーニオさんはやりとし、僕は眠っている狼を起こしてしまっ

たような気分になりました。

「言ってくれば、いつでも心を込めて教えてあげるよ。この場合の精神年齢は10歳ってところかな。……三つ目。その女の子に、かつての自分の姿を見てしまった」

「かつて……？」

トーニオさんはつついていたサラダを押しつけ、僕の顔をのぞき込みました。

「レオンの父親と俺の母親はギムナジウム時代、恋人同士だったんだ。その頃レオンの父親は金持ちの息子だったんだけど、事業の失敗が原因で一家は没落してしまった。レオンの父親は、ロイムを退学して職に就いた。二人は結婚するつもりだったらしいけど、周りに反対されてね。結局母上は最低のろくでなしと政略結婚したんだ」

最低のろくでなしって      トーニオさんのお父さんのこと？

トーニオさんは、優雅に頬杖をつきました。

「何年か我慢して、めでたく離婚。そうしてやっと、かつての恋人と再婚したんだ。ところが父親は金持ちの息子だったけど、レオンは貧乏暮らししか知らない。初めてここに来た時のあいつときたら……」

笑いを含んだ目を遠くに馳せて、

「妙にびくびくして、何か失敗をやらかすんじゃないか、でも変にプライドの高い奴だから、失敗なんかしたくないってコチコチでさ。あいつを見るとこっちも苛立って来て殴りつけてやったら、あいつ、思いっきり殴り返してきやがった。いまだに俺とレオンのそう

いう関係って、変わらないんだけどね」

ふっと笑い、再び僕を覗き込みます。

「あの頃の自分を見てるみたいで嫌だったのかもしれない。そういう感情を、不機嫌さや冷たい表情で隠そうとしたのかもね　って　とこかな。この場合の精神年齢、13歳程度」

僕はレオンさんに嫌な思いをさせてしまったんだと悲しくなったけれど、それ以上にトーニオさんの心の奥をのぞいてしまったような気持ちになりました。

トーニオさんは、どんな幼少時代を送ったのでしょうか。

実の父親を最低のろくでなしと呼ぶトーニオさん。……何があったのか。

ディリアさんがレオンさんのお父さんと再婚した時、トーニオさんはどう思ったでしょう。

僕から見たディリアさんはおおらかで、愛情表現の豊かな人です。レオンさんのお父さんに対するディリアさんの愛情は、トーニオさんにも伝わったでしょう。

自分の父親以外の男性を愛する母親　　そばで見ていること  
しかできない自分。

トーニオさんの複雑な気持ち、僕には分かるような気がします。でも、再婚相手の子供を殴りつけるって……。

華やかで優美で冗談好きで明るいトーニオさん。その心の中に別のトーニオさんがいる。

「君は健気でいじらしくて、ついついからかいたくなる。その一方で、守ってあげたい気持ちにもなるよ」

トーニオさんの顔が真剣で、僕はどきりとなりました。青い瞳が妖しく心に沁み通ってきます。

「……僕、健気とはほど遠いです。このお屋敷が落ち着かなくて……。お嬢様ってアンナさんは呼んでくれるけど、お嬢様って何をすればいいんでしょうか。何もしないのはやっぱり落ち着かないし、毎日何をしたらいいのかわからないんです」

「君のそういう所が魅力だね。俺はメイドくんにとっても心惹かれてるよ。この気持ちをどうすればいいかなあ。とりあえず、伝えておく。俺は、君に惹かれてる」

トーニオさんはそう言つて、高貴な人のように微笑みました。君に惹かれてる。そんな大切なことを、さらりと言つてのけることができるものなんだろうか。

トーニオさんの心の奥には暗い闇があり、でも普段のトーニオさんは輝くばかりに魅力的で、やっぱりこの人は美しい悪魔なんだと思います。

朝食の後片づけをすませ、僕はアンナさんを手伝って邸内のゴミ箱のゴミを集めて回りました。

野菜くずや残飯などは毎日回収されて、家畜の餌や肥料にされます。

裏口にあるゴミ置き場で仕分けをしている時、捨てられた物の中に血のついたブルーのワイシャツを見つけ、僕ははっとしました。

夕べ、レオンさんが着ていたシャツです。

そろそろ持ち上げると肩の辺りが破けていて、腕の部分に血がべつとりと付いています。

レオンさんが夜中に現れた時、シャツの肩が破けていたことを僕は思い出しました。

どうしたんだろうと一瞬思ったけれど、自分のことで頭が一杯になって、すっかり忘れてしまっていたんです。

腕の血は          僕を部屋まで運ぶために持ち上げた時、一昨日の夜の傷口が開いたに違いありません。

僕ときたら自分の事ばかりにかまけて、レオンさんを思いやる余裕もなかったんです。

レオンさんは泣き言一つ言わず、僕に付き添ってくれたのに。自分が情けなくなつて涙ぐみそうになり、そんな事をしている場合じゃないと叱りつけました。

怪我といい破れたシャツといい、レオンさんは二日続けて誰かと喧嘩をしたのでしょうか。

相手の女性の元恋人がしつこく復縁を迫っていて、レオンさんが怒ったとか？

昔、パパにそういう出来事がありました。

昨夜レオンさんが屋敷に戻ったのは、夜中だっただろうと思います。

そんな遅い時間まで、レオンさんは何処にいたんでしょうか。

トーニオさんなら何か知っているかもしれないと大急ぎで邸内に戻り、2階にあるトーニオさんの部屋の扉をノックしました。

「どうぞ」

トーニオさんは出かける直前だったようで、鏡を見ながら器用な手つきで首元のクラバットを結んでいます。

僕はトーニオさんに、自分の疑念を残さず話しました。

「レオンさんはきっと、危険な状況にいると思うんです。レオンさんとトーニオさんに助けてもらったから、今度は僕がお二人を助きたい。まずは、レオンさんを」

「気持ちはわかるけどねえ。レオンが三角関係って、ちょっと想像できないなあ」

トーニオさんが珍しく真面目な顔つきで言い、僕ははっと気づきました。

レオンさんの喧嘩の相手は男性じゃない。

レオンさんに怪我をさせたのもシャツを破いたのも、女性なんです。

レオンさんの大切な恋人は、暴力的で危険な女性なんです。

僕の推理を聞いたトーニオさんは、口の端に笑みを浮かべました。

「危険な女性ねえ……。危険は合ってるけど、レオンの相手はごつい男だよ」

「えっ」

「ごつい男……。僕は、言葉を失いました。相手は男性……。つまりレオンさんはつまり……」

重い衝撃が、僕の心に食い込んできます。僕は息を大きく吸い、心を立て直しました。

「どう危険なんですか？」

「そうだねえ……」

トーニオさんは複雑に結ばれたクラバットをダイヤのピンで留め

ながら、思案している様子です。

「俺が話すより、君自身の目で確かめた方がいいかもしれないね。メイドくんが男の子になりきれぬなら、連れて行ってあげるよ。レオンの行き先へ。レディは入れない場所だからね」

女性が入れない場所      ごつい男だけの場所。どんな所なのか想像もつかなくて、想像もできない場所へ行くのは怖い。

でも、レオンさんは困ってるに違いないんです。僕なんかには話してくれないけれど。

傷口から出血しているのに痛そうな素振りも見せないように、困っていても口にはしない人なんじゃないかと思えます。

「行きます。でも僕、男の子になりきれぬでしょうか」

「俺の子供の頃の服を貸すよ。母上は儉約家で古着を捨てたがらないから、まだあるはずだ。あとはメイドくんのやる気かな」

「はい」

僕が拳を握って見せると、トーニオさんは柔らかに笑いました。

日中を落ち着かなく過ごし、夕刻になって屋敷に戻ったトーニオさんに手招きされて、僕は最上階にある屋根裏部屋に入りました。誰かが定期的に掃除をしているらしく、想像していたより綺麗に整頓されていて、トーニオさんの子供の頃の衣装は簡単に見つかりました。

上着、ズボン、ウエストコートは黒一色で、白いクラバットをトーニオさんが華やかに結んでくれ、準備は万端。

僕の気持ちをのぞいては      。

今になって、僕はもしかして余計なことをしてるんじゃないかと鬱々と考えてしまいます。

レオンさんは、怒るかもしれない。

僕なんかがレオンさんのする事に口を出したり、顔を突っ込んでいいわけがないんです。

でも。僕はレオンさんの腕の怪我を思い出し、自分を奮い立たせました。

レオンさんが、あんな怪我をしていいわけがない。

レオンさんが血を流さなくてすむなら、その一助ができるなら、僕は嫌われたって構わない。

たとえレオンさんに嫌われても、何もしないで黙って見ているより、自分が好きになれそうな気がします。

トーニオさんが辻馬車呼び、僕たちは出発しました。

馬車の窓のカーテンをほんの少し開き外を眺めると、オレンジの空が暗紫の宵闇に吞まれていきます。

馬車は貴族邸が立ち並ぶ一画から大通りを進み、明かりの消えた商店街を抜け、夜だというのに人通りが多く賑やかな裏通りに入りました。

古びた煉瓦造りの建物の前で馬車は止まり、僕たちは降りました。見上げると建物は二階建てで、入り口の両側に松明が赤々と燃え盛っています。

アーチ型の入り口の上部に掲げられた看板を見て、僕は茫然としました。

## 4 闇と秘密 ?

『拳闘倶楽部』 。 拳闘 。

昔からある格闘技です。素手での殴り合いや蹴り技や締め技などを駆使し、どちらかが降参するまで闘うんです。

パパが傭兵だった頃、賞金目当てに出場したことが何度かあります。賞金は高額だけどパパが大怪我をして帰って来たから、やめてくれるよう泣いて頼んだんです。

レオンさんと拳闘が、どうつながっているんでしょうか。まさか……。

「行くよ」

トーニオさんはいつもの優雅な足取りで先に立ってアーチ門をくぐり、僕は小走りで後を追いました。

拳闘の興行はトライゼンだけでなく各国で行われていますが、パパが出場したのは隣国マイセルンのテント小屋です。

今目の前にそびえている建物は古風な煉瓦造りで格式がありそうです。他国でよく見かける露天やテントの会場とは趣が違います。

「トライゼンの国立拳闘倶楽部だ」

トーニオさんが言い、僕は目を丸くしました。賞金は観客たちの賭け金で賄われるので、賭博の要素もあるんです。なのに……国立？

「危険な競技だから、一時は禁止されていたんだけどね。それで拳闘好きな人々と賞金目当ての男たちが、消えていなくなるわけじゃ

ない。人目につかない場所でこっそり試合をするようになって、ますます危険になった。いつそ国家の監視の下で行った方が安全だろうと、トライゼンの拳闘場はすべて国立になっているんだよ。収益を国庫に納めようという意図もある」

「そうなんですか……。それで、レオンさんは……」

「もちろん、出場する。あいつはこの倶楽部の若き英雄だ」

「ええっ……」

出場する……。レオンさんが。僕はパパの大怪我を思い出し、泣きそうになりました。

正面に黒ずんだ扉があり、頭を剃りあげた怖ろしげな顔つきの大男が立っています。

大男はトーニオさんを「ベルトラム男爵」と呼び、軽く頭を下げて扉を開けてくれました。

建物の中は労働者風の人々が詰めかけ、熱気と興奮と人いきれで息苦しいほです。

「こっちだよ」

トーニオさんに促されて入った部屋は雰囲気<sup>バツ</sup>ががらりと変わり、静かで落ち着いた酒場<sup>バツ</sup>といった風情です。

重厚なオーク材のカウンターやテーブル席で、上等そうなスーツに身を包んだ紳士たちがお酒を飲みながら談笑しています。

黒光りして歴史を感じさせる木材の床を歩き、入って来たのとは別の扉を開けると、ガス灯に煌々と照らされたすり鉢型のコロシムがありました。

すり鉢の底の部分に土が敷きつめられ、円形のロープが張られて

います。

他国でよく見かける露天会場やテント小屋では、ロープを持った観客が輪になって出場者を囲みますが、ここでは杭が打たれています。

ロープの内側は、リングと呼ばれる闘いの場です。

僕は実際の試合を見たことはありませんが、目つぶしと噛みつき以外は何でも許される怖ろしい競技だと聞いています。

最低限のルールさえ守られなくて、パパは何か所も噛みつかれていたけれど……。

リングの周囲は観客席で、上に向かってリングから遠ざかるにつれ、金銀銅と座席の色が変わっていきます。

トーニオさんと僕が座つたのは金色の座席で、身なりのいい紳士たちに混じって女性の姿がちらほらと見えます。

「女性はいれないんでしょう？」

僕が尋ねると、トーニオさんは困ったように苦笑しました。

「レディは、だよ。入れないというより、こういう場にレディをエスコートする紳士はいないということかな。変装して見にくる強者レディもいるけどね。でも殆どの女性は、淑女とは違う立場の女性だよ」

淑女とは違う立場の女性。きついコルセットで締め上げた彼女たちの妖艶で派手な衣裳を見て、僕ははっと気付きました。……娼婦？振り返って見上げると、銀の席にも銅の席にも淑女とは違う雰囲気。女性の姿があります。

男性たちの雰囲気も、座席によって違うように感じました。

銀の席と金の席はさほど変わらないように思うけれど、銅の席に座

っているのは明らかに平民の労働者です。  
本来なら僕は銅の席に座るはずなのに、と思うと複雑な心境になります。

ゴングの音が鳴り響き、観客席から歓声があがりました。  
出場者がリング　　丸いロープの中に入ったけれど、レオンさんじゃない。

肩から胸にかけて刺青を入れた男と、ずんぐりとした大男です。  
二人の男が殴り合いを始め、蹴り合い、取っ組み合い、僕は怖く  
なって両手で顔を覆いました。

「大丈夫？」

トーニオさんの心配そうな声が、興奮した観客の叫びにかき消されていきます。僕はトーニオさんを見上げ、うなずきました。

リングに視線を戻すと、大男が刺青を入れた男の首に太い腕を巻きつけ、満身の力を込めています。

首の骨を折ろうとしてるんだと僕は思い、思わず目を閉じました。  
耳の奥でバキッと鈍い音が聞こえたような気がして、きつく目を  
つぶり両手を握り締める。

「終わったよ。本当に大丈夫か？　気分が悪いなら、外に出よう」  
「大丈夫です。慣れてないだけです。すぐに慣れますから」

リングを見ると敗者の大男が片腕をぶらぶらさせながら、苦悶の  
表情で立ち上がろうとしています。……腕の骨が折れたんだ。  
さっきの鈍い音は、聞き間違いじゃなかったかもしれない。

「どうして……レオンさん」

僕は、震えながら口走りました。

どうしてレオンさんは、こんな野蛮な競技に参加するんでしょう。パパの場合は急にお金が必要になったからだけれど、初めての試合に出場して帰って来た時のパパは興奮状態で楽しそうで、「拳闘には男を夢中にさせる何かがある」と言っていました。

「最初は、フレデリクに頼まれたのがきっかけだった。フレデリクはペテルグ公爵家の長男で、俺やレオンより一級上で、クラレストの学生の中で最も強いと言われた男だ」

トーニオさんが言い、僕は考え事から我に返りました。

「クラレストにはギムナジウムが2校と、平民の高等学校が3校ある。ロイムは軟弱だから論外として、高等学校の荒くれぶりと言ったらひどいものだった。ファイアの学生を脅したり金を巻き上げたりで、業を煮やしたフレデリクが3校のリーダー格の男に拳闘で決着をつけようと持ちかけたんだ。喧嘩は校則で禁止されているけど、拳闘は禁止されていないのでね」

「禁止されていない……？　こんなに危険なのに」

「喧嘩と違って、一応ルールがあるからね。それにトライゼンでは、拳闘は社会的に認知されてる。昔から軍事訓練の一環として奨励されて来だし、禁止された時期があつたにせよ、今でも軍人のたしなみだ。だからと言ってレオンがやっていいとは思ってないよ。フレデリクが外国に留学することになって、後のことをレオンに頼んだけど、フレデリクは拳闘をやれとは言わなかった。レオンが勝手に拡大解釈して、挑戦して来た高等学校生を拳闘で叩きのめして以来、のめり込んでしまったんだよ」

痛い思いをして相手に痛い思いをさせて、そんな競技にどうして

のめり込むことが出来るんでしょうか。

僕には理解できない。

再びゴングが鳴り、リングにレオンさんが現れて、僕は本当に泣き出しそうになりました。

レオンさんは他の出場者同様上半身裸で、身につけているのは粗い麻でできたブリーチと呼ばれる膝丈の短ズボンだけです。

全身にオイルを塗り、引き締まった細身の体躯がガス灯の光を受けて煌めいています。

殺気だった冷たい目で対戦相手を見るレオンさんは、初めて会った頃の怖いレオンさんとも、昨夜の美しく優しい怪物とも違います。

僕の知らないレオンさん。

視線だけで相手を殺す、無慈悲なレオンさん。

観客の歓声は最高潮に達し、耳を覆いたいほどです。

僕は奥歯を噛みしめ、必死の思いでレオンさんを見つめました。

どうか無傷で済みますようにと祈りながら。

闘いが始まり、相手が手を伸ばした瞬間、目にも留まらぬ早さで男の首筋にめり込んだレオンさんの裸足の足。

よるめいた男が体制を整える前にレオンさんの右手が男のみぞおちに食い込み、左手が顎を突き上げ、男は吹っ飛びました。

後頭部を強打したらしく、男は何度も上半身を持ち上げようとしたり、力尽きてしまった。

ほんの瞬きする間に闘いは終わり、歓声が轟音となって会場に轟きます。

勝者となったレオンさんは観客に顔を向けることなく、会場を後にしました。

「いつもの調子で安心したよ」

ほっとした様子のトー二才さんに、僕は顔を近づけて尋ねました。  
「いつもこんな感じなんですか？」

「まあね」

トー二才さんも僕に顔を近づけ、微笑します。

「レオンが拳闘をやっていることは、母上には内緒なんだ。知られたらあの母上のことだから、何をするか分からない。目立つ場所に傷を作らないよう、あいつもその点だけは気を使ってる」

僕はレオンさんの腕の傷を思い出し、怪我は怪我なのにと思いました。

「でも、噂話や何かでいずれ知られてしまっくんじゃ……」

「そうだよね。この半年、メイドくんのパパのお蔭で母上の注意は他に逸れてたけど、そろそろ危ないよねえ」

「そうまでして、どうして続けるんでしょうか。レオンさんは、闘うことが好きなんでしょうか」

トー二才さんはさらさらの金髪をかき上げ、首をかしげながら横目で僕を見えています。

「好きなのかな。あるいは何かの埋め合わせかな」

「恋人はいないんですか？ ごつい男っていうのは？」

トー二才さんの顔に、薄い笑みが浮かびました。

「ごつい男は、拳闘の相手だよ。レオンに恋人らしい恋人はいない。一日で飽きるような奴だから。一度デートしただけで、それっきり。かなり女性達の怒りを買ってるよ、あいつ」

パパが拳闘をやめたのは、僕が泣いて頼んだのも理由の一つだけれど、怪我をすると女の人に会いに行けなくなるからです。

レオンさんは、パパとは違うみたい。

トーニオさんと僕のそばに不意に美しい女性が立ち、トーニオさんが振り返りました。

「お邪魔してごめんなさい。通りすがりにお見かけしたものだから、ご挨拶をと思ったの」

あでやかに微笑する女性は薔薇の花のように華やかで、僕は食い入るようにつめてしまい、失礼だと気がついて慌てて視線を落としました。

「少しの間だけ席をはずすけど、ここから動くんじゃないよ。いいね」

そう言って立ち上がり、美女の耳元で何事かを囁くトーニオさん。

なまめかしく笑う美女とトーニオさんが腕を組んで立ち去った後、知った人はいないかと僕は周囲を見回しました。

いるはずがありません。僕の知り合いといったら、ランツにある兵士宿舎の人達だけだもの。

クラレストにはリーデンベルグ家の人達以外に知り合いがいないんだと思うと、たちまち心細くなりました。

再びゴングが鳴り新たな出場者が登場して、僕は慌てました。

もうこれ以上、残酷な場面は見たくない。

辺りを見渡してもトーニオさんの姿はなく、僕は仕方なく立ち上がりました。

どこかで試合が終わるまで待つて、また戻ればいい。

会場を出たものの酒場風の部屋<sup>クラブ</sup>でお酒を飲むわけにもいかず、そこは通り抜けて建物のロビーに出ると、数人の紳士が待ち合わせをしているように周りを伺いながら立っています。

僕も仲間入りして立っていると、紳士の一人が僕に歩み寄って微笑みかけました。

若い紳士で、レオンさんやトーニオさんと変わらない年齢に見えます。

ゆるいウェーブのかかった暗茶色の髪を後ろに流し、秀麗な顔立ちが知的に見えるけれど、切れ長の灰色の目が何処となく不気味です。

目をぱちくりさせている僕に、紳士は滑らかな口調で話しかけました。

「誰を待ってるの？」

「え、あの……ベルトラム男爵です」

「ああ、トーニオね。ふうん、そうか。彼なら、こっちにいるよ」  
言うなり僕の手を引き、強引に引っ張るんです。

「あの、僕、あの……」

彼の手を振りほどこうとしたけれど、がっちりつかまれて動きません。

ロビーから通路を抜け奥まった暗い廊下でようやく離してもらえたけれど、トーニオさんの姿はどこにもなく、紳士は僕の前に立ちはだかつて逃がさないようにしているかのようです。

「ここ、どこ……？ トーニオさんは？」

「見かけない顔だけど、何処から来たの？」

紳士が手の甲で僕の頬をなぞったから僕は飛び上がり、彼は声をあげて笑いました。

「うぶな子だな。トーニオとは、どういう知り合い？」

どうって聞かれても……。血のつながらない妹です、なんて言え

るわけがありません。

僕は、懸命に頭を働かせました。どうやって逃げ出そう。この人の目的は何だろう。……物盗り？

紳士の灰色の目が蛇のようで、僕の背筋がぞくりとします。

「ロ、ロビーで話をしませんか？ もっと明るい所で話しませんか？」

しどろもどろの僕の肩を紳士が笑いながらぎゅっとつかみ、叫びそうになった僕の背後から別の手が伸びて、紳士の手を捻り上げました。

「俺のものに手を出すなよ、アーレク」

深くて低い、聞き覚えのある声。闇からぬつと現れた人物を見て、僕は震えながら安堵の息を吐きました。

「レオンさん！！」

レオンさんはシャツと濃紺のズボンに着替えていて、アーレクという名らしい紳士の手を捻り上げたまま立っています。

「おまえのもの？ いつ宗旨変えたんだ、レオン」

「心配するな。おまえには興味がない」

そう言っただけでレオンさんはアーレクさんの手を突き放し、僕の肩を抱いて回れ右をさせ、廊下をロビーに向かって歩き出しました。

「このままでは、すませないぞ」

背後からアーレクさんの声が飛んだけれど、レオンさんは乾いた声で笑っただけです。

ロビーに出ると人の数が増えていて、レオンさんは僕の肩から手を離しました。

「試合が終わって会場を見たら、お前が一人で座っているのが見えた。一人で来たのか？」

レオンさんの目が赤いことが気になったけれど、まずは質問に正直に答えることにしました。

「トーニオさんをお願いして、連れて来てもらっただんです」

「あいつ、何考えてるんだ」

レオンさんが吐き捨てるように言い、僕は慌てました。

「トーニオさんは悪くないです。僕が無理やり……」

数人の若い紳士がやって来てレオンさんを取り囲んだから、僕の言葉は途切れてしまいました。

「レオン、相変わらずの強さだな」

レオンさんと同じぐらいの年齢の紳士たちは、レオンさんの友人のようで、皆とてもお洒落です。

高価そうなツイードのスーツ、シルクのワイシャツとクラブット、ピンやボタンを飾る宝石の数々。

紳士たちは、僕をちらちらと好奇の目で見ました。

「紹介してくれよ。目の覚めるような美少年だな」

「いずれそうするさ」

レオンさんはそう言いながら、視線を周囲に巡らせています。トーニオさんを探しているみたい。

僕は、突然気がつきました。さっきのアーレクさんもレオンさんを囲んでいる紳士たちも、フィアの学生なんだ……。

僕が通っていた中等学校の生徒にはない、言葉では言い表せない洗練された貴族の雰囲気。

平民と貴族とはまよっている空気が異なっていて、僕は当然平民の空気を発散しているに違いないんです。

カフスボタンに付いているダイヤ一つで、王宮兵士だった頃のパ

パの給金一年分が吹っ飛ぶだろうと思うと、生まれながらの身分の差を思い知らされます。

レオンさんの友人たちに白い目で見られているような気がして、頑張って耐えようと思ったけれど、僕の視線は下に落ちていきました。

「賞金を貰って来てやったぞ。どうする？」

別の学生らしい紳士がやって来て、白い紙包みをひらひらさせています。

「好きに使っていい。先に行ってくれ。俺は用がある。……ついて来い」

最後の一言は僕に向けられた言葉で、僕は歩き出したレオンさんについて行くこうとして、見知らぬ紳士に腕をつかまれビクリとしました。

「ねえ、麗しの君。これから一緒にパーティーに行かないか？」

二十代とおぼしき紳士はにっこりして、どうしていきなり招待されるのかと考えあぐねる僕の全身に視線を走らせています。

「何か誤解しておられるようですね」

怒りのこもったレオンさんの声と同時に手が伸びて、僕は再びレオンさんに肩を抱かれ、半ば拉致されるように外に連れ出されたんです。

夏の夜風が涼しく星が瞬いていたけれど、僕はレオンさんの冷やかな気配が怖くて周囲を観察する余裕ありませんでした。

レオンさんは辻馬車に僕を押し込み、レオンさん自身も乗り込んで、音高く扉を閉めました。

怒ってる。

レオンさんが怒ってると思うと、何とかしてレオンさんの役に立ちたいと思ってた僕の意気込みは急激に萎み、唇がわなわなと震えてしまいます。

「トーニオには俺から話しておく。お前は家に帰って大人しくしている。あそこはある種の人間の狩り場でもあるんだ。二度と来るなよ」

レオンさんの声が僕の脳裏を巡り、錐のように切り込んで来ます。

ある種の人間……狩り場？　どういう意味だろうと思ったけれど、それ以上に最後の言葉が僕を傷つけました。

二度と来るな。

「レオンさん、お願いだから僕の話聞いてください」

僕はありつたけの勇気を振り絞り、わなわな震える唇をこじ開け、何とかレオンさんを説得しようとしたんです。

「僕のパパも昔、拳闘の試合に出たことがあります。でも鎖骨を折って、治療に長い時間がかかって、パパは苦しんでました。もつとひどい事だっけ起こるんです。拳闘なんかレオンさんの大事な命を賭けるのはやめてください。今日だって、レオンさんが死ぬかもしれないと思ったら、とても正気で試合を見てなんかいられませんでした。でも頑張って最後まで見ました。レオンさんは、とても強い。強い人だから、やめる事だっけ出来るでしょう？」

「おまえは命の意味が分かってないな。生きる本当の意味も」

「分かってないのはレオンさんじゃないですか。命は一つしかないんですよ。レオンさんに何かあったら、僕は悲しいです」

話しているうちに目からぼろぼろ涙がこぼれ落ち、手で拭っても止まりません。

見上げると、レオンさんは赤く充血した目で僕をじっと見ています。

ふいにレオンさんの手が伸びて、あっと思う間もなく僕はレオンさんに抱きすくめられました。

レオンさんが僕を抱きしめてる。

力一杯抱きしめられて、息ができない。

咳込もうとした時、レオンさんの腕から力が抜けて、レオンさんが僕に倒れ込んで来ました。

「レオンさん……？」

首だけを回して見上げると、レオンさんは僕に腕を回してもたれかかったまま、静かに目を閉じています。

「どうしたんですか、レオンさん」

返事はなく、ただ規則正しい呼吸音が聞こえるばかり。

レオンさんの目が赤かったのは、きっと寝不足だったからだと思いました。

眠ってしまったんだ。

でももしかしたら何処か怪我をしているのかも知れず、僕は全身でレオンさんを支えました。

馬車がかたかた揺れるとレオンさんの体がずり落ちそうになり、両手をレオンさんの背中に回して押さえました。

そうしてやっとリーデンベルク邸の玄関に着くやレオンさんは長い睫毛を震わせて目を開き、黒髪をかき上げて天井を見上げ、ついと僕を見たんです。

「……二度とあの場所には行くな」

そう言って僕を辻馬車から押し出し、まるで心の扉を閉ざすように冷たく、ぱたりと扉を閉めてしまいました。

玄関に立ってレオンさんの乗った辻馬車が去って行くのを見ながら、僕の心は敗北感で一杯でした。

やっぱり…… やっぱり僕なんかがレオンさんの生き方に立ち入っていいわけがなかったんです。

レオンさんにはレオンさんの考えがあって、それは僕とは相容れなくて、レオンさんと僕はずっと平行線のままだという真実を受け入れないといけないんです。

レオンさんが僕の知らない世界へ行ってしまうようで、辻馬車が涙で曇って見えました。

レオンさんの役に立てるなら嫌われても構わないと思ったけれど、そんなの嘘でした。

余計なことをした僕をレオンさんは煩わしく思っているはずで、嫌われるのはやっぱり辛くて悲しい。

部屋に戻りベッドに力なく腰かけていると、ドアをノックする音がして青ざめたトーニオさんが飛び込んで来ました。

「心配したよー、メイドくん。席に戻ったら君はいないし、探しても見つからないし、レオンには嫌みを言われるし。でもまあ、無事で良かった。……あれ？」

トーニオさんが隣に座り、僕の顔をのぞき込みます。

「泣いてるの？ レオンに何か言われた？ 気にすることないよ。メイドくんは優しい良い子で、レオンは只の馬鹿なんだから」

トーニオさんは慰めてくれてるんだと思うとまた涙がこぼれ落ち、優しく抱き寄せてくれたトーニオさんの胸で、僕は声を上げて泣きました。

## 5 公爵令嬢の表と裏 ?

その夜。ベッドでガーゼケットに埋もれながら、拳闘倶楽部で起きたことを何度も思い返しました。

「俺のものに手を出すな」                      レオンさんの声が、頭の中で蘇ります。

俺のもの                      。

「俺のもの」とは「俺の家族」という意味だろうと僕は思いました。

家族になったんだから、家族の一員を自分のものと考えても不思議じゃありません。

レオンさんが僕を家族と認めてくれた。それはとても嬉しくて、僕を幸せな気分にくれました。

アーレクさんも、ロビーで僕をパーティーに誘った紳士も、きっと女性より男性を好む類の人です。

レオンさんが言っていた「ある種の人間」とは、そういう事をさせているのだろうと思います。

レオンさんは、僕を危険な人達から守ってくれた                      。

そう思うと僕の幸福感はますます高まり、雲の上を歩いているようなふわふわした気分になります。

でも僕がレオンさんの生き方に口出しして、レオンさんに嫌な思いをさせたという事実が変わりはなくて、僕の気分は雲の上から地の底の暗い部分に落ちて行きました。

眠る前、僕はレオンさんに謝ろうかどうかと迷いながら、結局何も言い出せませんでした。

レオンさんはほんの少し目が赤かったけれど充血はしていなくて、いつもと変わらない表情でいつもと同じ口調で「おやすみ」と言い、そうしてドアのそばに敷いたマットレスと枕とガーゼケットだけの即席ベッドにもぐり込んでしまったんです。

眠れないまま考えているうちに、レオンさんに謝らなくて良かったんだと思うようになりました。

やっぱりレオンさんには危険な目に合ってほしくないし、怪我もしてほしくない。拳闘をやめてほしい。

どうしてレオンさんが拳闘にのめり込むのか、僕には理解できません。

尋ねる勇気もないし……。

怒ったレオンさんを見ると、弱虫の僕はどうしても傷ついてしまう。これ以上傷ついたら、立ち直れないかもしれない……。

最も忘れられない出来事

たぶん一生忘れられない出来事

は、レオンさんが僕を抱きしめたことです。

あの時のレオンさんは、何を想ったのでしょうか。

きっとレオンさんは体調が悪いんだと思ったから、僕は必死に支えたけれど、ただ眠かっただけなのかもしれない。

でも「眠い」と「抱きしめる」の間にはもの凄く隔たりがあるし、僕の頭の中で少しも結びつきません。

抱きしめるというのは、愛情表現だと思っただけど……。

僕が小さかった頃、パパが僕を抱きしめてくれました。

パパに抱きしめられると安心したけれど、レオンさんに抱きしめられるとドキドキして、心臓が飛び出しそうになりました。

レオンさんは樹の香りがして温かくて、細く見えるのに僕をすっぽり包み込めるほど大きかった。

僕はガーゼケットから顔を出し、ドアの前で眠るレオンさんをそっと見ました。

レオンさんの寝顔はとても綺麗で睫毛が長くて、目を閉じややかに傾けた顔は女性に見えなくもありません。

目を開くとあんなに怖い人になるのに……。

考えてみるとパパ以外の男性の寝顔を見るのは初めてで、見惚れているとレオンさんがぱっちり目を開けて、目と目が合ってしまった。

僕の心臓は脳天を突き抜けそうなくらいに跳ね、慌てて頭からガーゼケットをかぶり、はみ出した足をあたふたとケットに押し込みました。

しばらくしてガーゼケットから顔を出すと、レオンさんは僕に背を向けて眠っています。

本当に眠ってるのかなと、僕は思いました。夕べのレオンさんの充血した目。

あれはもしかすると僕の部屋が寝苦しくて眠れないせいなんじゃないかと気づき、僕の心臓がまた跳ねました。

僕のせいでレオンさんは寝不足になってる……。

そう思うと哀しくなって、どうしたらレオンさんに自室に戻ってもらえるだろうかと考えてもいい知恵が浮かばず、でも何か方法を考えなくてはと堂々巡りを繰り返しているうちに、身勝手な僕は眠ってしまったんです。

夜明けの気配が忍び寄り、長年の習慣から僕の全身が起きる時間だと知らせています。

香り高いそよ風が僕の顔をよぎって行く。

どんな香りかと言うと、オーデコロンに似た香りです。

パパは濃厚で男性的なコロンを使っているけれど、もっと爽やかで柑橘系の混じった中性的な香りがそよ風に乘ってやって来ます。

いい朝……のはずなのに、そよ風の原因が目の前にあって、僕は飛び起きました。

「きゃっ」

トーニオさんが床に膝をついてベッドに肘をつき、身を乗り出して僕の顔に息を吹きかけてるんです。

「な、な、なに……」

「おはよう、メイドくん。まだまだだね。男の子は『きゃっ』なんて言わないものだよ」

「僕の質問に……」

僕は寝ている間にガーゼケットを蹴飛ばしてしまったことに気づき、慌ててケットに手を伸ばしました。

「君に贈り物を持って来たんだ。早く渡したくて起こしたってわけ」  
贈り物は嬉しいしありがたいけれど、もっと普通に起こせないものなのだろうか。

ガーゼケットを抱きしめた僕の前で、トーニオさんは青い目を瞬かせています。

トーニオさんが床から白いネグリジェを持ち上げ、僕はますます目を見開きました。

「屋根裏部屋を探索したら、ご先祖の貴婦人が着ていたらしい夜

着を見つけたんだ。きつとこういう物を着て、夫を喜ばせたんだろ  
うねえ。俺たちは夫婦同然に夜を共にしているわけだから、メイド  
くんがこういうのを着てくれると嬉しいなあ」

「着る……僕が？」

衣服とは名ばかり。見事に完璧に透けています。こんな全裸同然  
の物を、貴婦人が着ていたなんて信じられない。

「む、無理。夫婦同然というの……違うと思います。あの、くわ  
しく説明した方がいいでしょうか」

トーニオさんは吹き出し、悪魔めいた表情で僕を見ました。

「もちろん。今度時間をとって、夫婦の夜の過ごし方をくわしく説  
明してもらおうとしよう。楽しみだなあ」

「ええっ」

どうしてそうなるんですかつ。そんな説明するなんて、僕は一言  
も言っていない。

トーニオさんはくすくす笑いながら、床から網のような物を持ち  
上げました。

「これを探そうと屋根裏部屋に行っただけど、どう？」

差し出されたのは、頭にかぶるヘア・ネットです。髪形が崩れ  
ないよう、紳士たちが夜かぶって寝るための物です。

髪を切った後、僕も欲しいと思ったけれど、手に入れる機会が無  
かったんです。

「これ、欲しかったんです。貰っていいんですか？ どなたの持ち  
物なんですか？」

「ご先祖の誰かが使ってたんだろっけど、随分古い物だよ。君が使  
ってくれたら、ご先祖も喜ぶだろう」

「使わせて頂きます。ありがとう、トーニオさん」

トーニオさんにはっこりして、立ち上がりました。

トーニオさんは何をするか予測できなくて、僕には強烈過ぎる冗談を言うけれど、本当に優しい人なんだなあと思いました。

夜明けの曙光が窓から差し込んで、レオンさんが使っていたマトレスを白く照らしています。

「トーニオさんもレオンさんも、早起きなんですね」

僕が言うと、トーニオさんは苦笑を浮かべました。

「いつもというわけじゃないけどね。レオンは夜明け前に俺を叩き起こした後、厩舎に行ったよ。ひどいよねえ。俺とメイドくんを二人つきりにしないつもりなんだよ。全然信用してないんだよねえ」

「厩舎……？」

「あいつ、馬が好きだから。厩舎の二階は干し草置き場になっていて、昔っからあいつの逃げ場だったしね。それじゃ、俺は朝食作りに励んで来るよ。メイドくん、ゆっくりしていいよ」

部屋から優雅な足取りで出て行くトーニオさんの背中を眺めながら、僕は暗い気分になりました。

やっぱりレオンさんにとって僕の部屋は居心地が悪くて、居心地のいい場所に移ったんでしょうか。

僕のせいで、トーニオさんの睡眠まで妨げられてる。

このままではいけないと思い、僕は決心しました。

馬房を一つ一つ見て回ったけれどレオンさんの姿はどこにもなく、梯子をのぼって二階に上がりました。

干し草の山に囲まれるようにして、レオンさんが横たわっています。

起きてすぐに着替えたらしく、上着だけを脱いだスーツ姿です。眠っているようなので、僕の決心はしおれてしまいました。

「用があつて来たんだろ？」

梯子に戻ろうとした僕の背中に、レオンさんの声が響きました。振り返ると、干し草から上体を起こしたレオンさんが僕を見ています。

「はい。あの……」

僕はレオンさんに駆け寄って足元に正座し、勇気が萎まないうちに一気に必要な言葉を並べました。

「僕、今夜から一人で寝ます」

「駄目だ」

レオンさんの冷やかな声が木霊して、僕の胸に突き刺さります。

「どうしてですか。僕、もう大丈夫です」

「そんな保証がどこにある？ たった1日で、俺やトーニオが信じられるのか？」

「えっと……お二人が優しい人だということは分かりました。僕を家族と認めてくださってることも。他には……」

レオンさんの口元に微笑が浮かび、僕の心臓がわけも分からずどくんと跳ねました。

「言い分はよく分かった。おまえが一人でも大丈夫だと、俺かトーニオが確信したら引き揚げるよ。ただ俺は、おまえが家族なのか他の何かなのか、よく分からない」

レオンさんの言葉が、またもや僕の胸を貫いていきました。僕は家族じゃない……？ 他の何かって何？ ……他人？

レオンさんは子犬を撫でるように僕の頭を撫で、立ち上がりました。

そばに置いた上着を手に取り、梯子を降りながら、僕を振り返って言うんです。

「おまえを、どうしたらいいんだろうな」

そう言ってレオンさんの姿は見えなくなり、僕は泣きたくありませんでした。

トーニオさんと二人っきりの朝食の後、トーニオさんはお洒落して何処かに出掛けてしまい、僕はモップを持って掃除を始めました。でも気がつくとはばんやりしていて、同じ箇所を何十回も磨いてしまい、一向に進みません。

掃除はあきらめて、他にできることはないかと考えていると、表の呼び鈴が鳴りました。

緊張しながら玄関の重い櫛の扉を開けると、立っていたのは赤毛を上品に結い上げ、ロイヤルブルーの華やかなドレスを着た令嬢です。

「マチルダ・フォン・バーミアンと申します」

と品よく淑女風の礼をするので、僕は男の子の格好をしていることを思い出し、慌てて紳士風の礼を返しました。

「実は今、カミィラ・フォン・ペテルグ嬢の馬車に同乗させて頂いているのですが、車輪が壊れてしまって困っておりますの。丁度こちら様の玄関で立ち往生してしまったものですから、ご迷惑とは存じながらこうして伺った次第ですの」

「それはお困りでしょう」

大通りに軽二輪馬車が止まっていて、金髪のはっとするような美しい令嬢が手綱を握っています。

「どうぞ中へお入りください。修理については、中で相談しましょう」

僕が言うと、マチルダ嬢はにっこりうなずきました。

カミーラ・フォン・ペテルグ嬢は、本当に美しい人です。

蜂蜜のような巻き毛を淡いピンクのリボンで結び、瞳は明るい碧リボンとお揃いのピンクのアフタヌンドレスをお洒落に着こなし、肉感的な体は大人びているのに、顔立ちが可愛らしくてまるで妖精のようです。

二人の令嬢を最も広いサロンに案内したものの、僕はどうしてもいのか困ってしまい、アンナさんのもとへ走りました。

「カミーラ様はペテルグ公爵の令嬢ですよ」

アンナさんに言われ、僕は硬直してしまいました。公爵令嬢！  
どうしよう……僕にきちんとした応対ができるでしょうか。

「おいしい方でしょうか？ 余りに美しいので、ラインハルト王子が求婚されたそうですよ。もともと王子は、毎日誰かに求婚なさってるようですけれど」

ラインハルト王子は王家の次男で名うての放蕩者という噂ですが、この時の僕には噂話を楽しむ余裕もなく、馬車についてはアンナさんにお願ひし、薔薇の花びらを浮かべた紅茶をお盆に乗せて、急いでサロンに戻ったんです。

「ちょっと小耳に挟んだのですけれど、こちらにわたくしと同年の令嬢がいらっしゃるのでしょうか？」

カミーラ嬢が、可愛らしく小首をかしげて尋ねました。同い年って……僕？

「あの……カミーラさんは、お幾つですか？」

「14ですわ。フィアの6年生です」

「……じゃあ、きつと、僕のことです。あの……自分を僕と呼ぶことについては……その、事情が……」

沈黙が漂い、カミーラさんとマチルダさんは顔を見合わせました。

「……あなたが、クレヴィング卿の新しい妹さん？」

クレヴィング卿とは、クレヴィングに領地を持つレオンさんの公称です。

トーニオさんは既に爵位を継いでいるので、広大な領地であるベルトラムの領主としてベルトラム男爵を名乗っています。

ちなみにパパは、リーデンベルク卿と呼ばれることになります。

「でも、その男の子のような格好は……？」

「あの……これにつきましても、色々と事情が……」

僕の顔が、熱くなつて来ました。

同年とは言え、カミーラさんと僕とでは違いがあり過ぎます。

「まあ。女の子なのに

ご苦労がおありですね。それで、

お屋敷には慣れまして？ レオン卿とは、仲良くしてらっしゃるの

？」

レオン卿 親しみを込めて、名前のあとに『卿』という敬称を使用することもあります。

「はい。優しくしてくださいます」

一瞬カミーラさんの目がちかっと光ったような気がしたけれど、すぐに笑顔に戻り、

「わたくしの兄とレオン卿が懇意にしておりますの。その関係でわたくしも、レオン卿やトーニオ卿のことはよく存じあげておりますのよ」

と上品に紅茶を飲まれるのです。

ベテルグ公爵という聞き覚えのある名前について、僕はようやく思い出しました。

フレデリクさんというレオンさんの先輩が、カミーラ嬢の兄に当たる方なんです。

パパとディリアさんの結婚式の話をしていた時マチルダさんが化粧室に立たれ、ご案内を申し出たのですが、以前舞踏会でこちらに来られたことがあるので無用とのことでした。

舞踏会に王妃様がお忍びで来られた話や、晩餐会には高位のお歴々が出席される話などをカーミラさんから聞くうちに、僕は又もや硬直してしまいました。

そんな場に、もしかして僕も出るのでしょうか。

トライゼンでは通常、社交界デビューは男性は16歳、女性は14歳以上とされていて、14歳で結婚する女性もいます。

今すぐ社交界デビューだの結婚だのって言われたら  
。想像するだけで冷や汗が流れます。

マチルダさんがなかなか戻って来ないので心配していると、アナさんが馬車の修理が終わったと伝えに来て、その後すぐにマチルダさんが姿を現しました。

二人の令嬢がご機嫌麗しく帰って行かれたので、ほっとしながら紅茶セットを片付けようとキッチンに入って見ると、勝手口が開いています。

キッチンの勝手口は、収納庫を通り屋敷の裏口につながっているのですが、毎朝の食材の配達が終わると鍵を掛けることになっているんです。

変だなと思っているうちに勝手口の向こうから見たことのない青年が二人現れて、僕に飛びかかって来ました。

「わっ。何」

叫ぶ暇もありませんでした。

一人が僕に猿ぐつわを噛ませ、必死に暴れる僕の腕をもう一人が

ねじ上げ、僕はそのまま抱えあげられて運ばれたんです。

裏口から裏門　どちらも門がかかっている外からは開けられないはずなのに、どうして開いているのか不思議です　を抜けると、大通りに通じる小道に黒い天蓋付き馬車が止まっています。

青年たちの手を振りほどこうと暴れていた僕は乱暴に中に放り込まれ、頭を上げるとそばかすの散った角ばった顔が笑っていました。  
「マチルダさん……？」

猿ぐつわに阻まれて、その名は声になりませんでした。

僕が連れ込まれたのは、とある立派なお屋敷でした。

裏口から馬車ごと邸内に入り、そこで僕は引きずり出されました。マチルダさんと二人の青年に囲まれ、使用人用と思われる階段で5階まで上り、着いた先が屋根裏部屋。

扉を開けると、シックなピンクの壁紙と大胆な花柄のソファが印象的な、女性的なサロンになっています。

ソファには男女一人ずつが座っていて、女性は濃い茶色の髪をゆったりと結い上げ、どこかの令嬢に見えます。

男性の顔を見て、僕はあっと思いました。　　アーレクさん！

「ようこそ」

聞き覚えのある声に僕は振り向き、目を見張りました。

窓辺にカミィラさんが立って微笑んでいるんです。

その微笑は薄気味悪く、僕を蔑んでいるかのようで、目には強い怒りがこもっているような　　。

でも、どうして　　？　猿ぐつわをはずされるやいなや、僕

は真っ先に尋ねました。

「どうしてなんですか、カミィラさん」

長身のカミィラさんはゆっくりと歩み寄り、僕を見下ろしました。

## 5 公爵令嬢の表と裏

？

「黙れ、チビ」

カミーラさんは言い放ち、呆氣にとられた僕を尻目に

「ゲルタ、アイステイー！ こう暑いと喉が渴いてしょうがないわ」とピンクのドレスを翻し、どさりとソファに座りました。

ゲルタと呼ばれた濃い茶色の髪の令嬢がふくれっ面でソファから立ち上がり、部屋の隅にあるオーク材の家具の扉を開くと中は金属で覆われていて、飲み物やグラスが収納されています。

冷蔵庫だと、ぴんときました。上の扉の中に氷が入っているはずです。高価な物なので、噂では聞いていたけれど見るのは初めてです。

「また会えて嬉しいよ、エメルくん」

カミーラさんと入れ替わるようにアーレクさんが立ち上がり、僕のまわりをぐるりと回りました。

クラバットを豪華に結び上着の袖口からレースをのぞかせて、女性的な美しい顔ではあるものの陰湿な蛇のような眼つきです。

「君が女の子だったのは残念だけど、君には僕の芸術家魂に訴えるものがあるよ。真っ白なキャンバスに、クリーム色の裸体。縄で縛られた柔肌には真紅の血が滲み、地獄の苦痛に喘ぐ少女のような少年のような顔

いい絵が描けそうだ」

アーレクさんは僕の喉を白く細い指ですつと撫で、その冷たい感触にぞつとして僕は飛び退きました。この人は、頭がおかしいらしい。

「アーレク、男専門のくせに。そいつ、一応、女だよ」とカミールさん。とても公爵令嬢とは思えない言葉遣いです。

「今日から守備範囲を広げよう。美少年のような美少女もいいものだ。逃げようとしても無駄だよ。君はもうすぐ、僕のものになる」後ずさる僕を見て、アーレクさんは喉の奥で笑いました。

「で、その子のせいでレオンは俺達と手を切ることにしたのか、アーレク？」

僕をさらった青年の片割れが、ソファの後ろで立ったまま腕組みをしています。

「他に考えられないだろう。昨夜のレオンときたら、まるで宝物を抱えるようにその子を抱いて逃げて行ったよ。レオンの気持ちも分からないわけじゃない。汗くさい野郎どもと街をほつき歩くより、可愛い子とベッドにいる方が楽しいだろうしね」

アーレクさんの言葉にカミールさんの目がチカツと光り、僕を見る目つきときたら、まるで親の仇を見るようです。

「抜きたい奴は抜ければいいさ。レオンが抜けたって、アーレクが入ってくれるって言うし」

「勝手に抜けられたんじゃ、しめしがつかないだろ。第一、喧嘩もできないような奴が愚連隊に入って何の役に立つんだよ」

ソファの後ろに立つ青年が、アーレクさんの隣に座っている僕をさらった片割れに、きつい視線を向けました。

「愚連隊はひどいよ、カール。俺達は生意気な高等学校生が街でのさばらないよう、警備してるだけさ」

「綺麗ごとを言うなよ。実態は……ああ、そうか。フランツの家は借金まみれだからな。頭の固いレオンよりアーレクの方が、金が入るってわけか」

「何だと……」

フランツさんは顔色を変えてカールさんを見上げ、二人の間に陰悪な空気が漂いました。

愚連隊、喧嘩、お金。そこにレオンさんが関わってる。

衝撃が、さざ波のように僕の胸に押し寄せて来ます。

アンナさんが言っていたレオンさんの「悪いお仲間」とは、フランツさんやカールさん達のことなのでしょう。

そしてレオンさんは、「悪いお仲間」から抜けようとしているのでしょうか。……どうして急に？

「他人の借金なんて、どうでもいいわ」

カミールさんがゲルタさんからアイステイーを受け取り、一口飲んで僕を指さしました。

「そのチビの事情聴取、わたしにやらせてくれる約束だったわよね。出入り業者からチビの情報を手に入れて、わざわざ家までさらいに行っただから、当然権利はあるわよね」

さらいに行った。

僕と楽しそうにお喋りしてくれたのは、さうだった。

僕ときたら、もしかすると友達になれるかもしれないって、うきうき期待してしまっていたんです。

「事情聴取をするまでもないだろう。レオンはおまえを捨てて、エメルに乗り換えた。それが真実だ」

「えっ……」

僕が思わず声を出したから、全員の注目が僕に集まってしまいま

した。

「あの、カミーラさんは……レオンさんの恋人なんですか？」

でも……でもトーニオさんは確か、レオンさんに恋人らしい恋人はいないって……。

1回デートしたらそれっきりだって……。

「捨てられた恋人だよ」

アーレクさんが重ねて言い、カミーラさんの殺気立った視線をさりと流しています。

「言葉に気をつけてよね。わたしが捨てられるわけじゃない」

「そうだよ。カミーラよりこんな子を選ぶ男がいるわけない。カミーラにはフィア中の男がひざまずくんだから」

マチルダさんの口調まで変わっていて、リーデンベルク邸にいた時とは別人のようです。

「で、お前さ、何でわたしとレオンの邪魔するの？ そんなにわたしの後釜に座りたいわけ？」

カミーラさんが、きつい目で僕をねめつけました。

「そんな……何のことですか。そんなこと思っていないし、僕は何もしていません」

「レオンは言ってたわ。お前のこと、財産狙いだって。あいつの母親、息子二人に何の相談もなく結婚を決めたんだって？ お前もお前の父親も男爵家の財産を狙ってるんじゃないかって、あいつ、心配してたわ。財産だけじゃなくて、レオンまで狙ってるわけ？」

僕は、言葉を失いました。僕が                      財産狙い                      。そんな風に思われてたの？

とても言葉では言い表せない衝撃が、胸の中を駆け抜けました。

でも目の前にいるきつい性格の令嬢が、あの心優しいレオンさんの恋人かもしれないという事実は、さらに衝撃的です。

恋人なら、自分のことより先に相手のことを心配するはずなのに……。レオンさんに寄り添って、レオンさんの苦しい胸の内を聞くことの方が先なのに……。この女性の心の中には、怒りしかないような気がしたんです。

「……財産狙いじゃありません。ずっとママが欲しいと思って、ママだけでなく兄までできて喜んでいます。レオンさんに家族と認めてもらえたら嬉しいし……」

レオンさんが僕を家族じゃないかもしれないと言ったことを思い出し、言葉が途切れそうになりました。

「……レオンさんの妹になれば、すごく嬉しいです」

「健気だねえ。こういう妹を持った兄は、幸せだろうねえ」

アーレクさんがカミーラさんを横目でみて、含み笑いをしました。「口も性格も最悪で、そのせいで男に捨てられたのに認めようという妹を持つと、不幸だよね」

「エロ絵ばかり描いてる兄の妹よりは、幸せでしょうよ」

真顔で吐き捨てるカミーラさんを、アーレクさんは鼻で笑っています。

「一般論を話したつもりだったんだが。僕のことを言ってるなら、そろそろ画家として独り立ちしようかと考えているよ」

「あら、そう。息子に泣きつかれた母親が、お金をばらまいて売り出すわけね。さすが娼婦、裏の世界をよく知ってるじゃない」

「その娼婦に妻の座を追われた女の娘が、他の女に恋人の座を奪われたってわけだ。血は争えないな」

「娼婦とどこの誰かもわからない男の息子に、言われたくないわね」

アーレクさんとカミーラさんが兄妹

らない兄妹。とても仲がいいようには見えません。

二人の言い争いに他の人達はうんざりしたようで、ひたすらアイステイーを飲んでいます。

カミーラさんは僕がレオンさんとカミーラさんの邪魔をしていると信じ込んでいて、カールさんとフランツさんは僕のせいでレオンさんが「悪いお仲間」から抜けることになったと思い込んでいるみたいで、そしてアーレクさんはきつと昨夜のことを根に持っていてレオンさんに仕返ししようとしているんです。

アーレクさん、カミーラさん、カールさんとフランツさん。三者三様の思惑が入り乱れているみたいだけれど、僕にはどうしたらいいのかわかりません。

兄妹が言い争っている間、幸運なことに僕は立たされたままで、何とか隙をみて逃げ出せないかと少しだけ後ずさりしてみました。

部屋を素早く見回し、カーテンの陰にモップを見つけて小躍りしたくなりました。

自分の身を守るために僕にできることと言ったら、棒術だけです。振り回すことしかできないけれど、何もしないよりはましです。いよいよ危なくなったらあれを振り回そうと、僕は決めました。

「二人とも落ち着けよ。どこかでカミーラとレオンが付き合ってるって、俺、知らなかったよ。どの程度の付き合いなの。寝たの？」  
兄妹の言い争いの切れ目にフランツさんが言葉を挟み、カミーラさんはきつい目つきでフランツさんを睨みました。

「何立ち入ってるのよ。そんな質問、答える義理ないわ」

「二人で遊びに出かけてるのよ。ピクニックとかカフェとか。お熱いノロケ話、さんざん聞かされたわよ」

マチルダさんが言い、アーレクさんは声を上げて笑いました。

「何てくだらない。ピクニック？ カフェ？ お子様だな」

「あんたみたいな色ボケと一緒にしないでくれる？ 息子にそっくりな色ボケ母親が公爵を別宅に連れ込んだお陰で、あんたときたらこの屋敷でやりたい放題。とつかえひつかえ男を引きずり込んで、いい迷惑だわ」

カミーラさんの痛烈な言葉にもアーレクさんは優雅な姿勢を崩さず、笑っています。

「僕が友人を屋敷に招くのは、純粹に絵を描くため、芸術のためさ」  
「よく言うわ」

二人の言い争いは、果てしなく続くようです。カミーラさんの話を聞きながら、僕は胸が痛くなってしまいました。

パパと女の人との問題で、一人ぼっちになってしまった自分

。カミーラさんの境遇がそんな風に思えて、何だか僕のことみたいで哀しくなります。

それでも僕の場合ですが、パパを嫌いにはなれませんでした。それはひとえにパパの性格のせいです。

パパときたら女の人のところに行ってしまった後も、数日に一度は家に帰って来て、僕に一輪の花をくれるんです。

済まなそうな顔をして、情けない声で、

「申し訳ない、エメル。本当に申し訳ない」

と何度も繰り返すものだから、僕の方も仕方ないなと思えて来て、グラスに一輪の花を生けて眺めながら、パパの帰りを待っていたんです。

カミーラさんのパパも、せめて心の欠片ぐらいカミーラさんに贈ればいいのに。

突然アーレクさんが立ち上がり、僕はびっくりしました。

「事情聴取とやらは、こっちの用が済んでからにしておらおう。」

「……やってくれるな？」

アーレクさんがカールさんとフランツさんに目配せし、二人は怖い顔で僕を見ました。

フランツさんが立ち上がり、にやにやしながら僕に近づいて来ます。

「さて、お嬢ちゃん。お楽しみの時間だよー」

僕は飛び上がり、脱兎の如く走ってカーテンをめくり、モップをつかみました。

「ちょっとー！ まだわたしの用は終わってないわ。やめてよっ！」

カミーラさんが叫んでも、青年たちは聞く耳を持つ気はなさそうです。

僕は、素早くモップを顔の前に構えました。パパから教わった基本の構えです。モップのグリップを右手でつかみ、ハンドルの先をやや下げる。

「悪く思わないでくれよ」

カールさんが、どんよりと暗い表情で歩み寄って来ます。

フランツさんとカールさんが同時につかみかかろうとしたから、モップを素早く回転させてカールさんの手を叩き、フランツさんの首筋に打ち込みました。

フランツさんは痛かったらしくもんどり打って尻餅をつき、カールさんが怒りの形相で向かって来ます。

前に体重をかけ、勢いよくモップの柄をカールさんの咽喉に突き入れました。

ぐうえっ。カールさんは変な声を出してよろめきながら後ろに下がり、僕はモップを抱えたまま、出口目指して一目散に走りました。

「逃げたぞっ」

アーレクさんが壁際の紐を引っ張るのが視界の隅に見え、遠くでベルの音が聞こえます。

ドアの鍵を開けている間に追いつかれそうになって　　ひやりと冷たくなる僕の体、一気に増える心拍数。

がくがく震えながらモップの柄をフランツさんのみぞおちに叩き込み、素早く切り返してグリップの部分でカールさんの耳を渾身の力を込めて叩きました。

「ぎゃあっ」

勢いよく倒れたカールさんが後ろにいたフランツさんを突き倒し、転んだ男たちがもつれ合っている間に大慌てで廊下に出てみると、筋骨隆々とした召使いが一人階段を上がって来ます。

「ヨハン、その子を捕まえる！」

アーレクさんの声と同時に召使いが追って来たから、僕は廊下を猛烈な勢いで走り抜け、別の階段を駆け下りました。

走るのは得意だけど、男たちの方が速いに決まっっていて、階段を下る僕に数人分の足音が迫って来ます。

召使いがそばまで来たから、狭い階段では振り回すより突く方がいいだろうと思い、向う脛に狙いをつけて思いっきり突き出しました。

「くそっ！ ガキがつ！」

召使いのヨハンが向う脛を押さえながら反対側の手を僕に伸ばし、

カールさんとフランツさんも迫って来ます。

流れ落ちる汗にも構わず、頭の中が爆発しそうになりながら、僕は無我夢中でモップを突き出しました。

僕の視界にあるのは、向う脛だけでした。

ひたすら向う脛を素早く力を込めて突くことだけを考え、突いては逃げ突いては逃げるを繰り返してる間に、少しだけ距離を開けることが出来たんです。

「こつち！」

三階まで下りると、ゲルタさんが手招きしていました。

一瞬迷いましたが、意を決してゲルタさんが指し示す部屋に駆け込んだんです。

複数の足音が僕に気付かないまま遠くに去った頃、ゲルタさんが静かに部屋のドアを開け、僕の腕を引っ張りました。

「別の階段があるから」

信じていいんでしょうか。でも男たちよりゲルタさんの方がましな気がして、彼女の後について行き、一階に下りると馬車置き場があつて、隅に男たちが固まっています。

彼らを取り囲んでいたのは。

「レオンさん！」

僕が叫びながら駆け出すと、レオンさんの険しい顔がほつとした表情に変わり、一瞬でしたが笑みが見えました。

でも男たちの間をすり抜けようとして、僕はカールさんに捕まってしまった。

すかさずレオンさんがカールさんを殴りつけ、僕はカールさんの腕が離れた瞬間に飛び退きました。

「おまえが仲間から抜けるって言うから、こんな事になったんだろ

っ

カールさんが言いましたが、レオンさんは冷たい無表情のままです。

アーレクさんに命じられたらしい召使い達に取り囲まれ、レオンさんが次々と殴り倒し、僕はつかみかかろうとした召使いの手をモップの先で叩き、ハンドルをくるりと返して首筋を思いっきり打ちつけました。

「やめて！！ やめてったら！！ こんな所で暴れないで！」

カミーラさんが走って来て叫びましたが、男たちの乱闘は止みません。

突然耳をつんざくような銃声が響き、僕は飛び上がりました。

凍りついたように全員が静止し、銃口を空に向けたアーレクさんに目が行っている間に、僕はレオンさんのそばに駆け寄りました。

レオンさんは僕を背後に押しやり、レオンさんに銃口を向けるアーレクさんを見据えています。

「どうして？ どうしてレオンがいるの？ ここにはもう来ないって言っただじゃない」

カミーラさんは傍目にもわかるほど狼狽していて、銃を握ったアーレクさんにきつい視線を向けました。

「俺の妹を迎えに来たんだ」

レオンさんはそう言って皆を見回し、僕の意識の片隅でぴんと立つ耳。

アーレクさんが撃ちそうになったら僕が前に出よう。……今、俺の妹って言った？

「誘拐の理由を聞かせてもらおうか。カール、俺が抜けるからか？」

「そうだ。妹のせいだと聞いたんでな。真相が知りたくて、アーレクの話に乗ったんだ」

レオンさんは奥歯を噛みしめた顔つきでアーレクさんを睨みつけ、すぐに視線をカールさんに戻しました。

「今すぐとは言ってない。後のことをきちんと決めてから抜ける。必要な時には顔を出す。フレデリクにまかされた以上、無責任なこととはしない」

「抜けるというのは本当なのか。理由は？」

「話す必要はない」

レオンさんとカールさんが睨み合い、アーレクさんは銃口をレオンさんに向けたままで、僕は気が気ではありません。

「ちょっと待てよ」

フランツさんが、レオンさんとカールさんの間に割って入りました。

「フレデリクの跡目は、アーレクが引き受けるべきだろう。アーレクはフレデリクの義弟なんだから。それにレオンには道義上、資格がない」

目を細め、レオンさんに厳しい目を向けます。

「フレデリクの妹を捨てたらしいから」

フランツさんの言葉にレオンさんの顔がさっと変わり、凍りついたように見えました。

## 5 公爵令嬢の表と裏 ?

「捨てた……？ 俺が、いつ」

レオンさんの怜悯な視線がカミールさんに向けられ、カミールさんは凍りついています。

「説明しろよ、カミール。何でそうなったんだ」

「何でって……別に……」

しどろもどろになったカミールさんの声をかき消すように、ゲルタさんの声が響き渡ります。

「嘘だったのよ」

カミールさんに集まっていた視線が、僕の後ろに立つゲルタさんに一瞬のうちに移っていきました。

「カミールがレオンと付き合ってるっていう話、嘘だったの」

「はっあ ?」

アーレクさんの口から洩れる嘲笑。

「何言ってるの。口を慎みなさいよ、ゲルタ。……あなた達は邸内に戻りなさい」

周囲に立つ召使いに命じ、カミールさんは怒りのこもった顔をゲルタさんに向けましたが、ゲルタさんはやめません。

皆の注目を浴びたゲルタさんは頬を紅潮させ、召使いたちが屋敷に戻るのを待たず、舞台に立つ役者のように朗々と話し始めました。

「最初はカミールの小さな嘘だったの。レオンとランチに出掛けた後、わたしやマチルダが興味深々だったから、付き合うことになったって嘘をついたのよ。次のデートの約束すらないなんて、恥ずかしくて言えなかったんでしょう。自分が振られるわけがないなんて、

妙な自信もあったんでしょね。でもレオンはフレデリクへの義理立てのつもりでカミーラとランチに出掛けただけだったから、カミーラと付き合うつもりなんて最初から全く無かったし、その後カミーラがしつこく言い寄っても見向きもしなかったでしょ？」  
ゲルタさんはレオンさんに向かって言ったけれど、レオンさんは無言でした。

「ほんとなの、カミーラ？ あたしたちに嘘ついてたの？」

マチルダさんが、目を剥きました。

「嘘ってほどじゃないわよ」

カミーラさんは怒りで顔を赤らめ、そっぱを向いています。

「ピクニックに行っただっていうのは？ カフェは？」

「全部、カミーラの作り話よ。レオンに相手にしてもらえなくて、でもその時にはもう引っ込みがなくなってる、嘘に嘘を重ねたの」

そう言うゲルタさんの顔は、不思議な歓びで輝いています。友達の不幸を話してるはずなのに……。僕は、不思議な気持ちでゲルタさんの幸せそうな笑顔を見つめました。

「そういうことか。まあ、そうだろうな。カミーラ、おまえ、最低だな」

「よしなさいよ！」

マチルダさんが声を張り上げてアレクさんを睨み、カミーラさんの腕をつかみました。

「どうしてよ、カミーラ。信じてたのに。あたしにまで嘘つくなんて」

マチルダさんの声は悲痛です。

「女どもの話は終わりだ。カミーラ、邸内に戻れ。フレデリクの跡

目の話は、この次の機会にしよう。レオンに次があればだが。今はまず……」

アーレクさんが僕を一瞥し、唇を舌でぺろりと舐めました。

「エメル・フォン・リーデンベルク                      君は、こっちにおいで」

「……嫌です」

僕の隣で、レオンさんが低く笑いました。

「嫌われたな、無理もないが。銃をしまえ。俺たちを傷つけたら、放校だけでは済まないぞ」

「黙れ。普段から素行の悪いお前が、公爵邸に押し入ろうとした。それを僕が止めた。発砲は止むを得ないことだったと、ここにいる者たちが証言する。心配するな、殺しはしない。片足が不自由になるだけだ」

「わたし、証言しないから」

カミーラさんの声に、アーレクさんの口元が皮肉めいた形に歪みます。

「レオンを傷つけたら、王立裁判所に訴えてやるわ。わたしに戻れですって？    なに命令してんのよ。あんたの話に乗ったわたしが馬鹿だったわ。さっさと銃をしまつて、とっとと消えて。わたしはレオンと大事な話があるの」

「お前は本物の馬鹿だ。いまさらレオンがお前になびくとも思っているのか」

「関係ないでしょ！    今すぐ消えないと、あんたの所業のすべてをお父様の耳に入れるわよ。お父様があんたを勘当する気になるまで、何から何まで全部喋ってやるから！」

涙に濡れた睫毛をしばたかせ、凄じ剣幕でまくし立てるカミーラさんに気圧され、アーレクさんは僕とカミーラさんを交互に見、僕にじっと粘り着くような視線を注ぎました。

レオンさんが僕の前に立ちただかり、

「妹に指一本触れてみる。ただでは済まないぞ」

と僕なら心底震え上がるような顔つきで、アーレクさんに対峙します。

「銃をしまえよ、アーレク。カミーラを敵に回したのはまずかった。公爵の耳に入ったら、さすがにヤバイだろう」

カールさんが言い、アーレクさんは音が聞こえそうなほど歯をぎりぎりとし食いしばり、カミーラさんに刺すような視線を向けました。「やれるものなら、やってみる。おまえが喋るなら、こつちも洗わざらい喋ってやる」

捨て台詞を残し、アーレクさんは引きあげて行きました。

カールさんもフ란ツさんも、足を引きずりながらアーレクさんの後を追って行きます。

カミーラさんは誇り高く顎を持ち上げ、レオンさんを見据えました。

「他の男たちは、わたしに言い寄って来るのに。今なら許してあげる。わたしに付き合ってくれて言いなさいよ」

「やめておく」

レオンさんの口調は、氷のように冷ややかです。

「レオン、頭がおかしいと思えないわ」

「その通りだよ」

肩をすくめるレオンさんの前で、カミーラさんは顎を突き上げたまま、目をぱちぱちさせて涙を堪えています。

僕ときたらレオンさんの前でいつもびくびくしているというのに、臆することなく逃げ出すことなく堂々と自分を主張できるカミーラさん。

僕の中に、カミーラさんを尊敬してしまう僕がいます。

「カミール、おまえに相応しい相手を探せよ。……エメル、帰ろう」

そう言うとレオンさんは、裏門に向かって歩き始めました

僕は何度も振り返りながら                      大股で去って行くカミールさ

んをマチルダさんが追って行きます                      後ろ髪引かれる思いを

抱えつつ、レオンさんの後を追いました。

すぐに追いついた僕を振り返り、レオンさんが深いため息をつきます。  
「無事でよかった……。ここに来るまでの間、気が気ではなかったよ」

黒い瞳で僕の全身に視線を走らせ、

「怪我はないか。すべては俺のせいだ。それから……」

レオンさんは魅力的な微笑を浮かべ、僕の右手を指さしました。

「あ……」

まだ握ってた                      モップ。

それを名残惜しく地面に置いた時、僕の胸は棒術を教えてくれた  
パパと頑丈なモップへの感謝の気持ち、そして何とも言えない誇らしさで一杯になったんです。

僕は闘った                      ！ 下手くそだけど、棒術で！                      レオンさんは喧嘩がとても強い。でも、僕もそこそこやれる。

「棒術か。いい腕をしてるよ」

レオンさんに褒められて、僕の心の中がぱあっと明るくなりました。

誇らしく胸を張る僕の頭を、レオンさんが肩に抱き寄せてくれました。  
まるで兄が弟の肩を抱くみたいに。

俺の妹と言ってくれて、男兄弟のような親しさを見せてくれて、  
レオンさんは僕を家族だと思っていて認めてくれていると信

じられる一瞬でした。

「あの……」

声をかけられ振り向くと、ゲルタさんが立っています。レオンさんは僕から手を離し、ゲルタさんを見やりました。

「ありがとうございます」

レオンさんに言われ、ゲルタさんは恥ずかしそうな笑みを浮かべています。

「おまえがここにいる事を知らせてくれたのは、彼女だ」

「そうだったんですか。僕を助けてくれましたね。ありがとうございます」

僕がぺこりと頭を下げるとゲルタさんは笑みを引つ込め、レオンさんを見つめながら、逡巡するように切り出しました。

「実は……助けて頂きたいの。もうカミーラの所へは戻れないわ。力を貸して頂けませんか」

「助けとは？」

レオンさんの声が冷ややかで、僕ははっとしました。

「例えば、少しの間だけ助言を貰えるとか……。出来ることなら、守ってほしいの……」

ゲルタさんの声が、消え入るように小さくなっていきます。

僕は、カミーラさんに召使いのように飲み物の用意を命じられたゲルタさんの姿を思い出しました。

そういう事が日常的に行われているとしたら、逃げ出したくなる気持ちもわかります。

ゲルタさんだって貴族の令嬢で、ゲルタさんとカミーラさんは友だちのはずなんです。

カミーラさんはきつい性格の人で、もしかすると意地悪かもしれ

ない。

「ゲルタさん、辛かったでしょうね。ずっと我慢してたんですか？ カミーラさんと仲が良かった頃もあったんですか？」

僕が尋ねると、ゲルタさんは薄く微笑みました。

「最初は……そう、仲が良かったと思うわ。わたしって個性的だから、フィアに入学した頃クラスで浮いてたの。話が合うのはカミーラだけだったわ。その後マチルダがべったりくっついて来て、仲良し三人組になったの。そのうちマチルダがわたしを邪魔扱いし始めて……カミーラもそれに乗っちゃって……本当にあの二人から離れたって思ったけど、一人でいると周りから友達のいない子って思われるでしょう？」

ゲルタさんがにつこり笑うから、僕はまた不思議な気分になりました。悲しい話なのに、どうして笑顔で話せるんでしょうか。

「女子同士の問題は、俺の手にはおえない」

レオンさんが応えると、ゲルタさんは熱のこもった視線をレオンさんに向けました。

「あなたが背後にいると知ったら、誰もわたしに手を出さないわ。守ってくださいるなら、感謝します」

レオンさんは視線を公爵邸に向け、下に向け、長い睫毛をゆつくりと上げて、驚くほど冷淡な顔つきでゲルタさんを見ました。

「わかった。方法を考えよう。エメル、馬に乗れ」

裏門そばの木につないだ愛馬に向かうレオンさんの背中を、ゲルタさんがじつと見つめています。

熱いようなせつないような、その視線。  
僕は、ぴんとききました。ゲルタさんは、レオンさんが好きなんだ。

「わたしは？ 送ってくだらないの？」

ゲルタさんが声を震わせながら言い、このままではいけないと、僕は懸命に頭を働かせました。

レオンさんの愛馬は「ネフィリム」という名で大きくて強い牡馬だけれど、人間3人を乗せるには無理があります。

僕が乗ってしまったら、ゲルタさんは置いてきぼりになるんです。

「あの、レオンさん」

僕はネフィリムに何事かを囁き首筋をぼんぼんと叩くレオンさんに駆け寄り、言いました。

「僕、用事があるんです。えっと、そのう、街を見て歩きたいんです。そうなんです、まだ一度もクラレストの街を散策してないので街を眺めながら、歩いて帰ります」

レオンさんは何も言わずネフィリムにまたがり、ゲルタさんに手を差し出しました。

花が開くように薔薇色に染まるゲルタさんの顔。二人に背を向け、裏門に向かって歩き出す僕。

何となく悲しい気持ちになったけれど、これで良かったんだと思う。

だって兄にはいつか恋人ができるんだし、残されるのは妹の宿命です。

妹。弟。二つの言葉が、僕の頭を巡りました。

奇妙なことに、妹より弟という言葉の響きに魅力を感じます。

リーデンベルク三兄弟 末っ子の僕。

クラレストの街を肩で風切って歩く三兄弟の姿が、僕の脳裏にありありと浮かびました。

誰もが恐れをなす、リーデンベルク三兄弟。トーニオさんとレオ

ンさんに挟まれ、堂々と胸を張って歩く、見るからに強そうな僕。  
だって僕は、鬪える。武器はモップだけ。僕は、強い。  
そう思うと口元の締めりがなくなつて、ニマニマ笑いながら歩いていると、馬が近づいて来ました。

「何を笑つてるんだ？」

可笑しそうな声が飛ぶや腕が僕の腰に回されて、僕は軽々と抱き上げられ、馬の首にすんと落ちました。

見上げると僕の後ろにレオンさん、その後ろにレオンさんに両手を回して横座りをしたゲルタさんがいます。

片手で僕をがっちり支え、片手で手綱を操り、レオンさんはネフイリムをゆつくりと進ませました。

レオンさんに抱き寄せられて、僕の心臓がどくと跳ねます。

無言のまま馬は進み、公爵邸にほど近いやや小ぶりの邸宅前に着きました。

レオンさんの手につかまり、優雅な仕草で馬から降りたゲルタさんは、レオンさんを見上げて微笑んでいます。

「お茶にご招待しますわ 中に入ってくださいな。……妹さんも一緒に」

「やめておくよ。君の護衛については考えるが、俺にできるのはそこまでだ。今日のことは感謝してる」

レオンさんの冷たい口調に、ゲルタさんの顔色がみるみる変わっていきます。

レオンさんはゲルタさんに深々と礼をし、ブーツに付いた拍車を使つて、鹿毛の牡馬に進めの合図をしました。

歩き出した馬の上で、僕はゲルタさんに挨拶をしようとレオンさんの腕の中から顔を出し、凍りついてしまった。

僕を見るゲルタさんの目

憎悪のこもった目。

どうしてそんな目で僕を見るの

？

僕はゲルタさんに嫌われてしまったのかもしれない。でも、どうして？

うなだれた僕の頭上から、レオンさんの声が聞こえました。

「どうした？」

「え、あの……何でもないです」

ゲルタさんとの数少ない会話の中で、僕が彼女の気に障るようなことを言ってしまったに違いないと思いました。

言葉つてむずかしい。ほんのちよつとした言葉の選び方の差で、相手を怒らせてしまったり和ませることが出来たり。

ゲルタさんに何を言ってしまったんだろうと考えているうちに、大切な事を思い出しました。大切なパパに関わる事です。

上半身をひねりレオンさんに顔を向けたけれど、僕を見下ろすレオンさんの底知れない深淵のような黒い瞳を見たたん、勇気が萎んでいきます。

個人的なことを尋ねたら、レオンさんは怒るかもしれない。

ゲルタさんに嫌われた上レオンさんにまで嫌われたら、立ち直れない。

その時思い出したのが、カミィラさんの雄々しい姿でした。自分を主張して砕け散り、それでもなお主張するあの果敢な姿。あの勇氣。

僕はレオンさんを見上げながら、大きく息を吸い込みました。

「何をやってるんだ？」

「勇気を吸い込んでるんです」

レオンさんは、面白そうに僕を見ています。

「レオンさんは、僕のパパをどう思いますか？　パパも僕も平民だ

し、パパがデイリアさんと結婚するのは財産目当てかなって思いました？」

言い終わって緊張のあまり僕は咽喉をぐくりと鳴らし、レオンさんは形のいい唇の端に微かな笑みを浮かべています。

「誰に吹き込まれたのやら。財産目当てと考えたことは、一度もないな。何故ならリーデンベルク家の財産はすべて、トーニオのものだからだ。デイリア母上は領地から上がる収益の10%と寡婦手当を受け取っているが、男爵家の財産を動かせる立場にはない」

「そうだったんですか」

財産を狙うなんて不可能だったんです。僕はほっとして、次のレオンさんの言葉に再び緊張してしまいました。

「……正直に言うが、お父上の素行について調べさせてもらったよ」

レオンさんは僕の顔をのぞき込み、すぐに視線を前に戻しました。「申し訳ないと思うが、息子として母親を心配するのは当然だと思う。軍の知り合いを通じて調べたが、お父上の評判はすこぶる良かった。仕事熱心で腕が立ち、人望もあって上司や部下の信頼を得ている。だがトーニオが王宮の女官から聞いた話は、最悪だった」

僕は、がっくり肩を落としました。当然と言えば当然です。浮気者ですから……パパは。

「しかし母上は俺やトーニオが何を言っても聞くような人じゃないし、何年ぶりかで見る母上の幸せそうな笑顔を見ていると結婚に反対する気持ちは薄れていったよ。大事なのは、母上が幸せになってくれることだ。新しい父上と二人で幸せになってくれたら申し分ない。その点では今のところ、文句のつけようがないと思ってるよ」

「すみません……」

僕は両手で膝をつかみ、小さくなりました。

「どうして謝るんだ」

レオンさんが、苦笑しました。

「新しい父上が母上を幸せにしてくれる。俺やトーニオがおまえを幸せにする。おまえの存在が、俺たちを幸せにしてくれる。家族ってそういうものだろ？」

見上げるとレオンさんの深みのある黒い瞳が優しく、僕は天にも昇る気分になりました。

「レオンさん、僕を家族と認めてくれるんですね」

僕が言うと、レオンさんはうなずきました。

「ああ。……そう決めた」

決めた……？

深い意味は分かりませんが、レオンさんの温かい気持ちが伝わってきます。

家族。その言葉とレオンさんから伝わるものが僕の中に深く沁み入り、心を温めてくれました。

この時僕は、リーデンベルク家の一員として恥ずかしくないような人間になろうと、心に決めたんです。

リーデンベルク邸に戻ると、青ざめたアンナさんが飛んでやって来ました。

「心配しましたよ！ 突然エメル様のお姿が見えなくなって、トーニオ坊ちゃまとゲイルが街中を探したんですよ」

「その通りだよ」

奥からトーニオさんが出て来て、両腕を広げて僕に歩み寄ります。

「レオンが血相変えてペテルグ公爵家に行ったって聞いて行ってみ

たら、来てないって使用人は言うし。あいつ、嘘ついたんだな。もしかして戻ってるかなと帰って来たら、二人ともまだ戻ってないし。これからもう一度公爵邸に行くつもりだったんだよ。心配なんてもんじゃない、不安と恐怖で頭の中が爆発しそうだったよー」

トーニオさんはそう言って、僕を力いっぱい抱きしめてくれました。トーニオさんの温もりが伝わって来て、僕はこんなに幸せでいいのかなと怖いくらいでした。

その日の夕食、僕は張り切ってスズキのポワレを作り、トマトのガスパチョとマツシユルムのマリネサラダを添えてワゴンに乗せ、胸を張って食卓に向かったんです。

「新学期が始まる前に、一度フィアに挨拶に行っておかないといけないな」

美味しいと褒めてくれた後レオンさんが言ったけれど、僕は何のことかなと思いました。

「入学するんだろ、フィアに？ それとも家庭教師を雇うのか？」

「えっと……僕、近くの中等学校に行くつもりです」

僕の答を聞くなり、レオンさんとトーニオさんは顔を見合わせました。

「あのね、メイドくん。リーデンベルク家の人間は全員、フィアに通うことになってるんだよ。今日みたいなのがあったから、怖がつてるのかな。大丈夫、俺達がいるから。安心してフィアに通うといいよ」

「あの、パパが……僕はラテン語を知らないし、数学が不得手だから、フィアは無理だって……」

僕は、青くなりました。リーデンベルク家の人間はフィアに通う

。

「そんな……でも、僕の成績ではとても……。もしも授業について行けなかったら、どうなるんですか？」

「落第するんだ」

レオンさんの一言で、リーデンベルク家の一員として恥ずかしくない人間になる僕の決意は無残に碎かれ、すっかり食欲が失せてしまいました。

「今から勉強すればいい。まだ間に合う」

レオンさんは慰めてくれたけれど、僕はがつくり肩を落としたままで、

「じゃ、明日から勉強開始だね。時間割は俺たちにまかせてもらうよ」

と言うトーニオさんの言葉も、上の空でした。

夜になり、僕は部屋にモップを持ち込んで、レオンさんとトーニオさんの前で披露しました。

「二晩続けて、悪い夢も見ずぐっすり眠れました。これからは、これがあるから大丈夫。何かあっても闘えます。お二人は安心して部屋で休んでください」

モップを握って突き出す僕を見て、二人の顔が引きつっています。とうとう我慢しきれなくなったみたいに、二人同時に笑い出しました。

「メイドくん……。世界中探しても、君ほどモップの似合う子はいないと思うよ」

「モップ裁きが見事だったよ」

僕は、困惑しました。褒められてるんでしょうか。

レオンさんとトーニオさんはマットレスを片付け、レオンさんは僕に、

「大丈夫か？ 怖くなったらいつでも言えよ」  
と言ってくれました。

トーニオさんはやりと笑って僕に近づき、嫌な予感の僕にはおかまいなく両腕を広げます。

「メイドくんとの新婚生活が終わるなんて、せつないよー。最後にお別れのキスをするのって駄目？ もちろん唇に」

「やめとけよ」

レオンさんの鋭い声に、トーニオさんは情けない表情を浮かべました。

「残念だなあ。うるさい奴がいるから、今日のところはやめておくよ」

レオンさんとトーニオさんは、仲がいいのか悪いのかよく分かりません。

今日は息が合ってるみたいだけど、時々睨み合うし……。

それでも二人は僕の憧れで、たった三歳しか年が離れていないとは思えないほど大人で、いつかはレオンさんやトーニオさんのようになりたいと思うのでした。

レオンさんとトーニオさんが、何故あれほど大人びているんだろうかと考えてみました。

僕が自分を守ろうと小さく固くなってうずくまっている間に、堂々と闘って歩き続けて来たからでしょうか。

ベッドに入るとやっぱり視線はドアに向いたけれど、僕の心は平穏でした。

何かあれば、レオンさんとトーニオさんが助けに来てくれる。

その思いは確信に近く、僕は幸せな気持ちで眠りにつきました。

## 6 一人じゃないから ？

「この紋どころが目に入らぬか つ！！」

僕はそう言いながら、まな板を高々と掲げました。まな板には僕の紋章、包丁十字が描かれています。

居並ぶウシたちが、モウモウ言いながら平伏します。モウモウ言っている、彼らの言葉が分かるんです。

「エメル王、万歳！」

そう言ってるんです。

僕は、王様になりました。僕の民衆がウシだということについては、気にしませんでした。

僕は胸を張り、僕がどれほど強いかをウシ達に語って聞かせたんです。

「見よ、この名刀を！」

僕の手によって、高々と持ち上げられたモップ。

「その名も……えっと……モップ！」

そのまんまです。名前については、後で考えようと思いました。

山裾から、黄金の太陽が昇ってきます。

僕は足を広げて大地にしっかりと立ち、両腕を大きく広げて陽光を浴び、高らかに歓喜の声を上げました。ハハハハハ！

「ハハハ……ハ？」

目を開くと、目の前に突き出された唇。愉快そうに瞬く青い瞳。

僕は何度も目をぱちくりさせてトーニオさんの顔を確かめ、飛び起きて絶叫しました。

「ああああああああ　　つつ!」

「何もそんなに叫ばなくなつて」

トーニオさんは、お腹を抱えて笑っています。どうしてどうしてもいつも、この人は僕を起こしに来るんでしょうか。

僕の方にも問題があつて、夜明け前に起きる習慣がこの屋敷に来たからというものの鳴りをひそめ、もうすでに窓の外は白々と明るくなりかけているんです。

僕は顔を引きつらせ、身を守る物を探しました。僕の鎧とも言ふべきガーゼケットが、どこにも見当たりません。

「もしかして……ケットとモップを探してるのかい？」

トーニオさんは、ひいひい笑っています。

「下に落ちてるよ」

トーニオさんの言う通りです。

モップとくしゃくしゃになったガーゼケットが一緒くたになつて、まるで僕に蹴り落とされたみたいにベッドの足もとに落ちています。

「メイドくんが……大の字になつて大笑いしながら寝てるものだから……ついつい君の柔らかかい部分を指先でちゃんちよんとつつきたくなつて……むずむずする指を止めるのに苦労したよ。せめてキスだけでもしようと思つたのに」

「ここに来なければそんな苦労なくて……。……つつく？」

柔らかい部分を　　ちゃんちよん？　僕の脳裏に想像するの  
も恥ずかしい映像が浮かび、またもや叫びたくなりました。

「ねえ、メイドくん」

トーニオさんが涙目になった僕の横に座り、肩を抱きました。

「決して男の前で大の字になるんじゃないよ」

「好きでなったんじゃない……夢を見てただけです。それに……」

ここが僕の部屋だということを、トーニオさんに覚えてもらう方が先決だと思うんです。これじゃ鍵をしめた意味がない……。そう考え、僕ははつとしました。

「あつ……鍵！」

寝る前にドアはもちろん窓の鍵もしめたはず。きよろきよろとドアと窓に目をやる僕を見ながら、トーニオさんは典雅に微笑んでいます。

「どの部屋の鍵にも、緊急の場合に備えて合鍵があるんだよ。それに君は、俺を悪者にし過ぎるよ。人間は目覚める直前に夢を見るものだからね。俺がここに来るのはメイドくんが悪夢にうなされてやしないか確かめるため、うなされていたら起こすため、すべてはメイドくんのためだよ」

そう言っただけでトーニオさんは、僕の肩を優しくぽんと叩きました。本当にそうだとしたら、トーニオさんは親切でいい人です。

僕の隣でにつこりするトーニオさんは美しい天使に見え、そしてやっぱり悪魔に見えます。

「使ってるんだね、ヘアネット」

トーニオさんは僕の頭から先祖様のヘアネットをはずし、僕の髪を撫で始めました。

「……はい。愛用しています」

僕の髪の設定に夢中になっている様子のトーニオさんを、涙目で見上げていた時のこと。

「約束が違うんじゃないか、トーニオ」

レオンさんが腕を組み、戸口にもたれかかっていたんです。表情は涼しげだけれど、横目でトーニオさんを見る目つきが鋭い。

「来ると思ったよ」

トーニオさんは笑いながら立ち上がり、

「今日の朝食、メイドくんに頼もうと思ってさ。メイドくんの勉強スケジュール立てなきゃならないから」

レオンさんの前を通り過ぎて、廊下に消えて行きました。

レオンさんも僕をちらつて見て、トーニオさんの後を追うように消えてしまったんです。

約束……。レオンさんの言葉が耳もとでうなります。約束が違うって、どういう意味なんでしょうか。

刻んだブルーベリーをパンケーキに混ぜて薪のオーブンで焼き、新鮮な牛乳とサラダを添えて、僕は張り切って食卓に向かいました。三人で朝食を食べている時、トーニオさんから一枚の紙切れを渡されて、見ると勉強のスケジュール表です。朝から晩までぎっしりと。

「ラテン語と歴史は俺が見るから。数学と科学はレオンが教える。都合の悪い時は、臨機応変に変更できるからね」

「でも……でも……いいんですか。お二人の負担になりませんか。お二人にも、色々と予定があるんじゃないやありませんか」

一日中勉強するなんて僕に出来るとは思えず、想像するだけで脳が反乱を起こしそうです。

「どのみち母上が帰って来たら、お前の勉強を見てやれと言うだろう。遅いか早いかの違いだけだ」

「メイドくんが落第したら、俺たちのせいだと罵られる。俺たちも必死なわけ」

「はあ……」

あの朗らかで陽気なデイリアさんが罵る場面は想像できないけれど、僕はさっそく勉強する事になったんです。

朝食の後、僕はトーニオさんからラテン語を教わりました。

僕の脳が破裂しそうになった時、トーニオさんが笑いながら、昨日のペテルグ公爵邸での出来事について尋ねたんです。

「レオンは俺と違って、女性に優しくないからね」

僕の話聞いた後、トーニオさんは言いました。

「ゲルタさんは……どうしてるでしょうね。カミーラさんは、まさか仕返ししたりしませんよね？」

「ゲルタちゃん、夏休み中はご両親と避暑地に行くらしいよ。新学期になったら、ユリアスのクラスに移る」

「ユリアス……？」

「本名をユリアーネというんだけどね。ユリアスと呼ばれてる。6年生の女子は2クラスあって、言い方は悪いけど、それぞれのクラスにボスがいるんだ。<sup>アイン</sup>1組にカミーラ、<sup>ツヴァイ</sup>2組にユリアスという具合にね。ユリアスは変わった子だけど、彼女にゲルタちゃんのことを頼んでおいたってレオンが言ってたよ」

「そうなんですか……」

僕の瞼の裏に、せつなそうな視線をレオンさんに向けるゲルタさ

んの姿が浮かびました。

フィアに入学したら、ゲルタさんに話しかけてみようと思います。もしかしたら友達になれるかもしれない。かなりの高確率で、返事もして貰えないだろうけど……。

ゲルタさんに嫌われてると思うとまた僕の弱気の虫が騒ぎだし、小さくうずくまってしまいそうです。

レオンさんやトーニオさんみたいに、闘って生きて行こうと決めたのに……。

「レオンさんは、どうして急に悪いお仲間と手を切ることにしたんでしょう？ 何かあったんでしょうか」

不思議なことにトーニオさんには、緊張することなく話しかけることが出来るんです。

トーニオさんは優雅に頬杖をつき、僕の顔をのぞき込みました。

「あったと思う？」

「はあ……何となく」

トーニオさんの意味ありげな微笑に、僕はどきりしました。

「メイドくんの部屋に、俺達が泊まり込むってレオンが言い出した時のことなだけだね。あの時マツトレスを運びながら、もっと手っ取り早い方法があるってレオンに持ちかけたんだ。つまりさ、二人で君の部屋に泊まり込むより、君が俺のベッドで眠ることにしたら、もっと簡単だって」

「は……？」

「朝まで俺がそばにいるんだから悪夢にうなされてもすぐに対処できるし、優しく慰められるし、君が毎朝苦勞してセットしてるその髪を一晚中撫で撫でして、はねないようにしてあげられるし。そう言ったら、あいつ」

トーニオさんは、くくつと笑いました。

「いきなり殴りつけて来たんだよねえ。気が短いと言うか、分かりやすいと言うか」

「何言ってるんですか。僕がトーニオさんのベッドで眠るわけないでしょう」

「そこを突くのか。大事な部分をすつ飛ばして」

トーニオさんは片手で顔半分を覆うようにして笑い、僕には何がどう可笑しいのかさっぱり分かりません。

「あの、それで、そのことと悪いお仲間はどうつながるんですか？」

「君を俺のベッドに連れ込まない代わりに、後で君に迫らないって条件も付け加えさせられたけど、悪いお仲間とやら全員と手を切つて、真面目な学校生活を送る約束をさせたってわけ。それでも俺は立派な兄貴だからねえ、弟を更正させようとしたんだよ」

立派な兄貴が関わっている悪い女性はどうなるのか、という質問はしませんでした。

レオンさんが突然カールさんやフランツさんのグループから抜けることになった理由が、よく分かりました。

僕のせいだった。

正義感の強いレオンさんは、トーニオさんから僕を守るために、グループと手を切る約束をしてしまったんです。

今朝トーニオさんに「約束が違う」と言っただのは、そういう意味だった。

でも結果として、レオンさんは愚連隊と手を切ることになったのだから良かったのかもしれないと、僕は自分に言い聞かせました。

「それからね、レオンはぬいぐるみが好きなんだよ。カミィラちゃんもゲルタちゃんも、ぬいぐるみには似てないからねえ」

「は……？」

レオンさんと……ぬいぐるみ？　ライオンがウサギを可愛がる以上に想像できないんだけど……。

「あいつがここに来た時、荷物の中にクマのぬいぐるみがあつたんだ。お母さんの形見らしいんだけど、あいつ、毎晩それを抱いて寝てたんだよね。男らしくないなと思ってさ、俺はぬいぐるみの首を引きちぎった」

「ええっ……？！」

「子供の頃の話だよ。あいつは黙ってちぎれた首を縫い合わせて、俺は謝った。生まれて初めてだったよ、人に頭を下げたのは。今でもあいつ、そのぬいぐるみを大事に持つてるよ。女の子の好みも、ぬいぐるみなんだよねえ。小さくて可愛くて柔らかい子が好きなんだよ。カミーラちゃんは長身だし、ゲルタちゃんは……裏切り者だし」

「裏切り……？」

トーニオさんは頼杖をついたまま、長い指でこめかみを叩きました。

「そうなるだろ？　カミーラから離れたいなら、他にいくらでも方法があつたはずだよ。なのにカミーラを陥れて積年の恨みを晴らしつつ、レオンに恩を売って親しくなれる一石三鳥の方法を選んだ。怖ろしくてさすがの俺も御免こうむりたいよ」

そんな……。僕は呆氣にとられ、ぼかんと口を開けました。  
ゲルタさんが……そんな人？

「信じられない……」

「何が？　ゲルタの人間性が？　それとも俺の話が？」

「あの……」

僕は、うつむきました。

とてもついて行けない。話の行方にも、トーニオさんの考え方にも。それに

レオンさんとぬいぐるみがどうしても結びつかなくて、僕は首をひねりました。

レオンさんが可愛くて柔らかい女の子が好きなら、僕は範疇外です。

痩せつぼちの力カシですから、僕は。髪がボワツと広がるから、マツチ棒とも呼ばれてました。

自分がレオンさんの好みからはずれていると思うとなぜか悲しくなったけれど、どうしたって肉付きの悪い体やぺちゃんこの胸が変わるわけでもなく、諦めるしかないのかなと思いました。

## 2時間目。

僕はレオンさんから数学を教わりながら、何とかして逃避しようとする自分自身と格闘していました。

数学の不得手な僕にレオンさんの教え方は丁寧で親切で、僕は必死に問題に取り組みました。

でも勉強を嫌う僕の視線はいつの間にかすぐそばにいるレオンさんに向けられて、驚くほど長い睫毛や綺麗な黒い瞳や高い鼻筋を眺めては目が合って、慌てて視線をノートに落とすのでした。

触れそうで触れない距離にレオンさんと二人並んで座っていると心臓が音高く飛び跳ねて、気持ちふわふわ空を漂い、馬車の中で

レオンさんが僕を抱きしめたことに向かつてしまいます。

あの時レオンさんは眠くてぼんやりしていて、僕を枕と勘違いしたに違いないと僕は思っています。

僕も枕を抱きしめて寝ることがあるから、レオンさんが同じことをしてもおかしくないと思うんです。

それに、僕を妹だとレオンさんは言ってくれた。妹だと思うからこそ、安心して勘違いしたんだと思います。

僕はリーデンベルク邸に着くまで一生懸命レオンさんを支えたから、枕の役目は果たせたのかな……。

そうは思いながら

思い出すと顔が熱くなる僕。

「何か聞きたいことがあるのか？」

レオンさんが言ってくれたから、今の僕にとって最も大切なことを思い切って尋ねてみようと思い、大きく息を吸い込みました。

「また勇気を吸っているのか？」

レオンさんは笑っています。

「そんなに俺が怖いのか。俺はべつにお前を取って食おうとは思ってないんだが」

「あの……レオンさん。とっても踏み込んだ質問をしてもいいですか？」

「どうぞ」

「カルさんやフランツさんのグループから抜けるということは……拳闘もやめるんですか？」

「……どうかな」

レオンさんは、考え込むような表情をしました。

「今すぐは無理だろうが……。潮時かもしれないな」

レオンさんの言葉に、僕の中で期待の芽がぴよこんと顔を出しま

す。

レオンさんは拳闘をやめることを考えてる。そう思うと、安堵が広がっていきます。

昨夜だってレオンさんが倶楽部に出掛けるんじゃないかと思うと不安で、出掛けそうにないと分かるとほっとして、落ち着かなかったんです。

「これ以上敵を作ると、お前を守りきれなくなりそうだからな」  
レオンさんはさらりと言い、僕は目をぱちくりさせました。

「敵……多いんですか？」

「まあね。今度は俺が踏み込んだ質問をさせてもらっ。どうしてそんなに家事をやるんだ？」

「家事？ えっと……習慣です」

レオンさんは頬杖をつき、僕を見て微笑しました。

「いつから家事をするようになったんだ？」

「えっと……僕の実の母とパパが離婚した後、必要に迫られたというか……」

「新しいママがいた時は？ 家のことは、ママがやってくれたんだろ？」

「はい……いいえ……その……最初はそうでした」

「最初の後、ママは家事をしてくれなくなったのか？」

僕はノートの上で踊る数字をぼんやり眺めながら、出来ることから話したくないと思いました。恥ずかしく辛い、過去の記憶なんか……。

でもレオンさんの顔は真剣で、何一つ見逃すまい聞き逃すまいとするかのように僕に見入っています。

僕は唇を噛み、うつむきました。

「……二人目のママはバネッサさんと言って、すごく綺麗な人で、パパはぞっこんだったんです」

酒場を経営していた赤毛の美女。八歳だった僕でさえ、うつとり見惚れてしまうほど美しい人でした。

パパとバネッサさんは愛情あふれる目で見つめ合っていたけれど、僕はその中に入れませんでした。

バネッサさんの僕に向ける目はとても冷たくて、「お前さえいなければダニエルと二人きりの甘い暮らしが楽しめるのに」と何度も言われました。

ある晩、僕を施設に入れるようにとパパに懇願するバネッサさんの声が聞こえたんです。

パパは「うーん、そうだなあ」と迷っている様子で、僕は施設に送られるんだと思って凍りついてしまいました。

パパと話をしようと思いましたが、もしもパパが僕よりバネッサさんを選んだら 実のママが僕を置いて行ってその上パパにまで見捨てられたら パパの口から施設に行けという言葉が出たら そう思うと怖くて足が竦んで、何も聞けませんでした。

「バネッサさんの役に立ちたくて、それで……」

役に立つ子なら、施設に送られなくて済むと思ったんです。

バネッサさんに必死にお願いして、家事はそれまでも少し経験があったけれど、掃除や洗濯の仕方を教えてもらって、何とか家に置いてもらおうとしたんです。

「最初は下手だったけど、少しずつ慣れて……」  
何度も失敗して、バネッサさんに引っぱたかれました。

それでも施設に送られるよりはましで 施設がどれほどひどい所か聞いていましたから 朝起きてすぐパパの朝食の用意をし、学校に行つて昼前に走つて歸つて来て、起きて来たバネッサさんの食事を作つて午後は掃除をして、週に二度は洗濯をして、僕なりに懸命に頑張つたんです。

「そんなに上手には出来なかったけれど、何とか役に立てるようになって……」

そのうちバネッサさんは僕を施設に送ろうとは言わなくなり、冷たい目で見える代わりに無視するようになりました。

「九歳になる頃には、簡単な料理なら作れるようになっていました。……でもパパの浮気が原因で……」

「離婚することになった」

「はい」

実際には、怒り狂つたバネッサさんが家を出て行つてしまったんですけど。

「三人目のママの時は？ その人も家事をしなかったのか？」

「しなかったというより、出来なかったんです。ママはジュリエッタさんと言つて……あの、パパと結婚した時、ジュリエッタさんのおなかの中には赤ちゃんがいたんです。それで……」

裕福な海運国であるベネルチアでも指折りの大きな貿易会社で、商才を発揮していたジュリエッタさんはパパより五歳年上で、決して美人ではなかったけれど有能そうな女性でした。

妊娠して結婚した後とても体調が悪そうで、僕は家事はもちろんパパがシェフだという学校の友だちに頼んで、栄養のつく料理を教わつては作っていたんです。

「でも、赤ちゃんが駄目になって……そのせいでジュリエッタさんは精神的に不安定になって……」

うつん、本当は違う。赤ちゃんが出来たから結婚したんだと、後でパパから聞かされました。ジュリエッタさんに仕組まれたとも。

結婚したくなかったのに結婚することになって、パパは家に帰って来なくなりました。ひどいパパです。

ジュリエッタさんはおかしくなって、流産してしまって、その後も家の中で暴れたり僕を叩いたり。

その頃の僕は事情を知らなかったからママに嫌われたくなくて、出来ることなら好きになってもらいたくて　小さくなって嵐が過ぎるのを、ジュリエッタさんが落ち着くのを待ちながらママに気に入ってもらえるよう必死に家事にいそしんでいたんです。

「結婚して半年経たない頃、パパが他の女性と一緒に暮らしてるっていう噂がジュリエッタさんの耳に入って……それで……」

「離婚することになった、と」

僕は、うなずきました。その頃すでに仕事に復帰していたジュリエッタさんは家を出て、僕は一人取り残されました。

「話したくないことが、たくさんありそうだな」

レオンさんの黒い瞳が、僕が話さなかった部分を読み取ろうとするかのようにじっと僕に注がれて、僕は魂の底まで見透かされているような落ち着かない気分になりました。

「いつか、話す気になったら話してくれ。ひとつ気になるんだが……。お前、必死に頑張らないと家族の一員になれないと思ってるだ

る」

「えっ、そんな……」

「今もそう思ってるんじゃないのか？　だから、せつせと掃除や料理に励むんだろ？」

「えっと……えっと……その……」

どう説明すればいいんでしょう。自分でも分かっていないことを、人に説明するのは難しいことです。

「俺もここに来た時、そう思ってたんだよ。八年ほど前のことだ。俺の母親は俺を産むとすぐに亡くなったから、母親というのがどういふ人種なのか分からなくて、とにかくいつも父親に言われていたように、勉強にもスポーツにもその他のことにも努力しようと思っていたんだ。そしたらある日、ディリア母上が俺のところに来て

」

レオンさんは、可笑しそうに微笑みました。

「あの人は言ったよ。自分は人間としても母親としても、ろくな生き方をして来なかった。そのことをこの先色んな人から聞くだろうけれど、何を聞かされても母親として認めてほしい。その代わり俺がどんな人間だろうと何をしようと、息子として認める。そういう取引をしないかと、持ちかけられたんだ。お互い、ありのままを認め合おうということなんだろうな。お陰で俺は、肩の力が抜けた」  
そうして、僕の目を覗き込みます。

「母上はお前にも、同じことを言うだろう。俺も、同じことを言う」

「でも僕の場合、いえパパと僕の場合ですけど、追い出されるかもしれない……」

パパの浮気の虫が騒いだら、ディリアさんに追い出されるでしょう。

「ああ、なるほど」

レオンさんは僕の思いを察したように、にっこりしました。

「パパには出て行ってもらおう、もしも母上を傷つけたなら。だが、お前はここに残るんだ」

「そういうわけには……」

「お前のパパは、一人でも生きていける。お前はここで暮らすんだ。学校で学び、レディとしての教育を受ける」

「もしもパパが追い出されることになったら、僕がここに置いてもらえるとは思えないんです。ディリアさんだって、そこまで寛大ではないでしょう……」

「どんな問題にも、解決方法はあるものだよ。方法は俺が考える。心配しなくていい」

レオンさんの表情は穏やかだけれど真摯で、目は真剣で、全身から力強さが発散されていて、僕はレオンさんなら信じられると思いました。

「どうしてなんですか？　　どうして、そこまでしてくださるんですか？　僕は、あなたの役に立つようなことは何もしてないのに」  
「役に立つからじゃないんだ。俺は、お前が好きだ。好きな人間のためなら、何とかしようという気になるだろ？」

僕が好き　　。

その言葉は深く深く僕の心の底に沈んでいき、ゆっくり弾けて僕の世界を薔薇色に染めました。

僕は言葉を失い、表現できない感動で咽喉の奥が熱くなり、目の奥も熱くなって、ぱちぱち瞬きしながらレオンさんを見つめました。

「一人じゃないからな、エメル」

レオンさんの言葉が、僕の心を震わせます。僕はしゃくり上げながら手で涙をぬぐいながら、何度もうなずきました。

## 6 一人じゃないから ？

「来たぞ つつ」

人々の恐怖の聲が響き渡ります。全身に刺青を入れた男がそこそと街灯の陰に隠れ、頭を剃りあげた大男が慌てふためいて逃げ出します。

そうなんです。

クラレストの街を肩で風切って歩く僕たちは、リーデンベルク三兄弟。

人々の尊敬と憧憬を一身に受ける、強くて格好いい三兄弟なんです。

僕の右には長兄のトーニオさん。右手に透け透けのネグリジェ、左手に孔雀の羽を持ち、背中に大きく『愛』と書かれた看板を背負っています。

左に次兄のレオンさん。クマのぬいぐるみを抱いて、ふわふわもふもふの柔らかそうな、ウサギの耳のついた白い帽子をかぶっています。

何か、変。そう思ったけど、僕は気にしませんでした。

モップを掲げ、兄たちに高らかに宣言したんです。

「殴り込みだあっ！」

ぱつちり目を開くと、朝の光が窓辺に差し込んでいます。

夢だった……。よかった、殴り込みに行かなくて。僕はホッと胸を撫で下ろし、起き上がって部屋を見回しました。

今朝は不思議なことに、トーニオさんの姿がありません。

ベージュ色の家具や薔薇模様のソファがあつて、どこから見ても僕の部屋ですが、何となく変な気分です。

僕の部屋って、こんなにガランとしてたっけ……。

毎朝トーニオさんの攻撃があつて、ついこの間までレオンさんのマットレスがドアの前にあつて、その時は事態の対応に追われるばかりだったけれど、すべてが無くなると寂しい……。

ふっと息を吐き出し、顔を上げるとドアの下に白い物が挟まっています。僕は起き上がって白い封筒を手に取り、中の便箋に目を走らせました。

「おはよう。俺の裸体が恋しくて、さぞ寂しい思いをしていることでしょう」

思わず四つ折りの便箋を閉じました。裸体って何、裸体って。こんなことを書く人は、一人しか思い当たりません。

恐る恐る便箋を開いたけれど、

「俺は、今日も君の裸体を想像しています」

すぐに閉じました。確定です。トーニオさんは、本物の変態なんだ……。

「想像だけでは満たされないので、君と愛し合える日を楽しみに待っています。トーニオ」

ないです。永遠にないです。

そうは思ふものの、トーニオさんは僕が寂しい思いをしてるんじゃないかと気遣ってくれたんだと思い、心の中がほんのり温かくなりました。

僕は便箋を丁寧に折り畳んで机の引き出しに入れ、ふと思ったんです。トーニオさんは僕を気遣うことで、昔のレオンさんを気遣っているのかも知れない。

もしかしたらトーニオさんもひどい境遇にあったのかもしれないけれど、レオンさんにしたひどい事の数々を後悔していて、僕を気遣うことで償いをしているのかも知れません。

レオンさんが僕に優しくしてくれるのも、僕を好きだと言ってくれたのも、僕があ頃の自分に似ているからなのかも……。

それでも僕の喜びが消えるわけはなく、昨日レオンさんが僕を好きだと言ってくれたことを思い出してふわふわ天国にいるような幸せな気分になりながら、僕はいつものシャツとズボンに着替えキッチンに向かったんです。

朝食の後片付けをしていると、アンナさんと臨時雇いのランドリー・メイドが洗濯物を抱えて庭に出て行くところに出くわしました。ランドリー・メイドはお洗濯専門のメイドで、週に2度、3人来ることになっているのですが、夏場は人手不足で今日は1人しか来ていません。

濡れて重くなった洗濯物を干すのは重労働で、僕は腰を痛めているアンナさんのお手伝いをするにしました。

「デイリア様も結婚前は、よくこうしてお洗濯物を干してらっしゃいましたよ」

僕とアンナさんは洗濯物を干し終わり、木陰で一息つきながら、青空にひらひら翻るシーツを眺めていたんです。

アンナさんの言葉に、僕は驚きました。男爵令嬢が洗濯物を干す？

「あの頃は、借財を抱えてましてね。ディリア様のお父様はとってもいい方だったんですけれど、領地経営の才覚には欠けた方で……。リーデンベルク家は称号こそ男爵ですけれど、ご先祖様のお陰で公爵並みの広大な領地を持っていたんです。それが……まあ、その借財のためにロレンツオ様と結婚されたようなものなんですよ。ロレンツオ様はトーニオ様のお父様で、ベネルチアの富豪の三男でいらつしゃいましてね。ロレンツオ様ご自身やり手の実業家でしたから、あつと言う間にリーデンベルク家は裕福になつたんですけれど……」

アンナさんは、ふうつとため息を洩らしました。

「相性が悪かつたんでしょね、ディリア様とロレンツオ様は。ディリア様は男爵家の一人娘でお姫様育ちで、何と申しますか……誇り高いと申しますか……。平民のロレンツオ様を見下すようなところがおありだったのですよ。ロレンツオ様にはそれが我慢ならなかったのでしょうね、次第にディリア様を憎むようになられて……。ディリア様は大らかで物事にこだわらない性格で、ロレンツオ様は細かくて神経質でいらつしゃいましたし、ロレンツオ様は……何と申しますか、命令するのが好きな方で、ディリア様は命令されるのが大嫌いで……。何をするにも意見が全く合わないのにご夫婦だなんて、不幸なことですよ。もっともそういう貴族のご夫妻は多数いらつしゃいますけれど、ディリア様はご自分に正直だったのでしょうね。仮面夫婦にはなりきれなかったんです。当時ディリア様ご一家はこちらのお屋敷ではなく、別宅に住んでおられましたけれど、ロレンツオ様は外に愛人を作ってしまったわれるし、顔を合わせればお互いに罵り合つて、陰湿な報復をし合つて。でもそのうち、ディリア様の方がぼつきり折れてしまわれたんです。心を病んでしまわれましてね……」

アンナさんは、目頭を押さえました。

僕の知ってるディリアさんは陽気で天真爛漫で、大輪の薔薇のよ  
うな女性です。こんな辛い過去があつたなんて  
。

「ディリア様は離婚を望まれたんですが、お父様に反対されて  
ね。仕方なくアーデンに住まいを移されたんです、ロレンツオ様と  
は別居されて」

アーデンは、温泉が湧き出る有名な保養地です。

「トーニオさんも一緒に？」

アンナさんは、首を横に振りました。

「ディリア様から見れば、トーニオ様はロレンツオ様に似ておられ  
るんですよ。トーニオ様には何の罪もないけれど、トーニオ様を見  
るたびにロレンツオ様を思い出すような事は、避けたかったのでし  
ょうね」

「ロレンツオ様は、トーニオさんを可愛がっておられたんでしょう  
？ 跡継ぎですものね」

「どうでしょうね。……ディリア様が屋敷を出られたのはトーニ  
オ様が2歳ぐらいの時で、その頃はごく普通のやんちゃな坊ちゃま  
だったんですよ。ところが戻って来た時、トーニオ様は7歳で、無  
口で表情が暗くおなりで……。私はディリア様のお供をしてアーデ  
ンにおりましたから、5年の間に何があつたのかは存じ上げないの  
ですが……」

そう言いながら、アンナさんはまた目頭を拭きます。あのトーニ  
オさんが、無口で暗かった……。どんな生活だったのでしょうか。

「確か、ディリアさんは離婚されたんですよね？」

僕の言葉に、アンナさんは小さくうなずきました。

「ええ。……トライゼンでコレラが大流行して、ディリア様のご両

親がお亡くなりになったんです。トーニオ様は軽症で済みましたし、ロレンツオ様は一時は危篤だったものの、奇跡的に回復されて……。死にかけたことで、何か思うところがあったのかもしれないね、回復するなり離婚を申し出られて……。潔い方でしたよ、ロレンツオ様は。男爵の称号とトライゼンにあるすべての財産をトーニオ様に譲られて……。もっとも故郷のベネルチアにもその他の国々にも、多額の財産をお持ちでしたけれど。そうしてロレンツオ様は、ベネルチアに帰って行かれたんです」

「それからこのお屋敷で、ディリアさんとトーニオさんが仲良く暮らし始めたんですね？」

「仲良く……。ええ、そうなのですが……。ディリア様はお忙しくて……。領地経営は簡単なことではありませんし、二度と借財は御免だと思つてらっしゃったようです。ディリア様は領地を回られて、トーニオ様は家庭教師とお屋敷に残られて……。ひどい、と僕は思いました。僕には7歳までの仲良し家族の思い出があるけれど、トーニオさんにはそれすら無い……。」

「それをやめさせたのが、クリスト様だったんです。クリスト様はレオン様のお父様で、長らくフェルキアで暮らしておられたんですが、コレラ後のトライゼンを立て直すために戻って来られたんです。お医者様でしたから、クリスト様は。そうしてディリア様とご結婚されて……。ご結婚後、明るくなられましたよ。ディリア様だけでなく、トーニオ様も。クリスト様はトーニオ様にとっても、良いお父様でした。本当にいい方でしたのに……。」

アンナさんはそう言って、涙ぐみました。

フェルキアはマイセルンを挟んだ隣国で、大国です。フェルキアでの暮らしを捨て、故郷を救うために戻ったレオンさんとお父様。

そのお父様が亡くなり、血のつながらない人たちの間で暮らさざるを得なくなつたレオンさん……。

トーニオさんはデイリアさんの実の息子で、僕はパパの実の娘で、レオンさんだけが誰とも血のつながりが無いんです。

レオンさんは、どんな気持ちでこの屋敷で暮らしているんでしょうか。

「ダニエル様は笑わせてくださると、デイリア様はおっしゃってましたよ。クリスト様が事故でお亡くなりになってからというもの、お屋敷にこもりつきりで泣いてばかりでしたから。トーニオ様やレオン様も心配しておられましたけれど、ダニエル様と知り合つてからのデイリア様は、それはもう娘時代のデイリア様に戻られたように明るくなられて」

ずっと仲がいいままでいて欲しいと、僕は心から思いました。僕は、ずっとここにいたい。こんな気持ちは初めてです。今までは何処でもいいからパパと一緒にいたいと思つていたけれど、今はこの屋敷にずっといたい。

望んではいけない事だと、頭では分かつてるんです。何せ浮気者ですから、パパは。でも今度ばかりは、パパの中の虫が騒ぎ出しませんようにと祈らずにはいられませんでした

午前中の勉強が無事に終わり、軽い昼食をすませ、僕はキッチンでアップルケーキを焼きました。

鶏卵に砂糖を加え、泡立てて泡立ててひたすら泡立てて、白くふ

んわりしたクリームになるまで泡立てます。

美味しくなあれと呪文を唱え、食べてくれる人の顔を思い浮かべながら、愛情をこめて。

レオンさんとトーニオさんが幸せになりますようにと祈りながら。

スライスした林檎とシナモンとナッツとバターを加え、型に流し入れて薪のオーブンで焼いていると、突然ホールが騒がしくなりました。

レオンさんとトーニオさんが声高に議論していて、声は徐々に近づいて来ます。

「うーん、いい匂いだ」

トーニオさんが顔を出し、続いてレオンさんが

「新たな罫が仕掛けられたようだ」

と、何かの招待状をぴらぴらと顔の前で振りました。

「メイドくん、王宮で社交界デビューだよ。自宅でのデビュー前に王宮から招待されるなんて、薔薇色のデビューだね」

「社交界……デビュー……」

僕は、青ざめました。最も怖れていた瞬間です。

「その、僕、まだ……14歳だし、ダンスは下手だし、話術はもつと下手だし……」

「心配ないって。話術はすぐに慣れる。ダンスはレオンが教えてくれる」

「俺がダンス？」

レオンさんが、ぎょつとしたように見えました。

「当然。分担しようよね。俺はメイドくんを連れて、ドレスやら何やら買いに行かなきゃならないんだから。それともレオンちゃん、婦人服店に行く気ある？」

「ない。……わかった。ダンスだな」

珍しく動揺するレオンさんの様子が可笑しくて、僕は笑っていました。

「あの、それで、畏って何ですか？」

「ああ、正式に社交界デビューしていないお前を、誰がどんな手段を使って何のために王宮に招待させたかってことだ」

レオンさんは腕を組んで壁にもたれかかり、トーニオさんはふんと鼻で笑っています。

「恐らく公爵令嬢あたりが王宮の女官あたりにねじ込んで、何か良からぬことを企んでるんだろうね。でも、心配いらない。メイドくんには俺たちがついてるよ」

「でも、そういうことなら、断った方がいいんじゃないでしょうか？」

カミィラさんの怒り狂った顔が浮かび、僕は怖気を奮いました。

「そうはいかないんだよ」

レオンさんが、苦い顔で首を振りました。

「王宮からの招待状は、よほどの事情がない限り断れないんだ」

「昔、面倒だからって断った臣下が反逆罪に問われたことがあってね。そいつ、地下牢に放り込まれてる間に国王が亡くなって、それっきり忘れられてしまったんだよ。ようやく出て来た時には、3年経ってた。そういう目に会いたい？」

僕は、ぶんぶん首を振りました。

王宮舞踏会まで、3日しかありません。

僕はすぐにトーニオさんに連れられて、クラレストで最も人気が高いと言われる婦人服店へ行きました。

マダム・ポワティエが愛想のいい笑顔で迎えてくれ、僕たちは上得意客のみが入れるという奥の部屋に案内されました。

「この度は男爵夫人のご結婚、おめでとうございます。こちらが新しくみえられた令嬢ですのね。ほろびかけた薔薇の蕾のような方ですね。お色は、パステルカラーのような淡いものがよろしいかしら。お嬢様ぐらいの年齢の方には、ピンクやレモンイエローが人気ですよ」

と奥からサテンやシフォンの布地を取り出し、立ったままの僕の肩に掛けます。

「そのライトブルーのシルクタフタがいいな。チュールレースを袖や胸元に使つて。余り肌を露出しない方が、本人の精神衛生上いいだろう」

「そうですね。それではこういうデザインで……」

「いい機会だから、訪問着や乗馬服も数着頼んでおこう」

「それでしたら、こちらのデザインなど……」

マダムが開いたデザイン画をのぞき込み、僕を立たせたまま二人でああでもないこうでもないかと相談し、結局ドレスを着る本人の意向などそっちのけで決まてしまいました。

トーニオさんが席を立っている間に採寸し、戻って来たトーニオさんの隣には両手一杯に装飾品　手袋やストッキングやハンカチや扇　を抱えた店子が立っています。

男性のトーニオさんにストッキングまで選んで貰うというのは……何となく恥ずかしい。

「トーニオさんはどうして、こういうことに詳しいんですか？」

「慣れてるからだよ」

僕の質問にさらりと答えるトー二才さんの涼しげな顔を見上げ、僕はぴんとききました。きつと、悪い女性のお陰なんです。

大量の買い物にマダム・ポワティエは終始上機嫌で、  
「舞踏会用のドレスは、3日後の夜に必要なんだ。お願いできるかな」

というトー二才さんの頼みにもにっこりとして、

「明日のこの時間に、仮縫いにお越しください」  
と優雅にお辞儀しながら、僕たちを見送ってくれたのでした。

「君は自分で思ってるより、はるかに綺麗で魅力的な女の子だよ」  
馬車の中で、トー二才さんが僕の顔をのぞき込み、誘惑するような目つきで言いました。

「どんなに美しいドレスも、君本来の美しさには及ばない。装飾品も宝石も、君の引き立て役に過ぎない。だからね……」

僕の耳元で囁くんです。

「裸が一番いいよ」

生まれて初めて、殴ってやろうかと思いました。そんな僕の顔を見て、トー二才さんはにっこりしています。

「しかめっ面も可愛いよ」

僕は、振り上げた拳を降ろしました。トー二才さんという人は、どこか憎めないんです。

会話が巧みで、おそらく女性扱いも巧みなトー二才さん。優雅で美しい貴公子のトー二才さん。でもふとした瞬間に、暗い陰が見えるトー二才さん。

子供の頃、何があっただんでしょうか。尋ねたら、トー二才さんの気分を害してしまうでしょうか。誰だって、嫌な記憶には触れられたくないものです。でも昨日レオンさんが僕を慰めてくれたように、

僕もトー二才さんを慰められないかと勇気をかき集めました。

「何？ 俺をじつと見つめて。どうしたの？」

「え、あの……実は……」

「そうか。やっと俺の告白に伝えてくれる気になったんだね。うれしいよ」

「告白？」

君に惹かれてると、魂を吸い取る悪魔みたいな美しい微笑を浮かべてトー二才さんが言ったことを、僕は思い出しました。魂を吸い取られたくないから、僕は聞かなかった事にしたんです。

「えっと……そういう話じゃなくて……」

過去の辛い記憶について、どう切り出しどう話して貰おうかと僕は頭をひねりました。

「初めてにふさわしい場所を色々考えてはいたんだけど。構わないよ、馬車の中でも」

「は……？」

「狭いから奔放なことは出来ないけど、それは次の機会まで取っておこう」

そう言ってトー二才さんが僕の肩に手を置いて、綺麗な女の子みたいな魂を吸い取る悪魔みたいな顔を近づけてきたから、僕の唇がわなわな震えました。

「ちが……そういう……ひっ……ひっ……」

僕は馬車の中で後ずさり、壁に背中をはりつけて叫ぶばかり。

「あのねえ……どうしてそう……何でも真剣に……あはははは」

トー二才さんは、お腹を抱えて笑っています。……からかわれたんだ。

何度も同じ手に引つ掛かる自分を、僕は心の中で罵りました。

翌日の朝、僕は夢を見ることなく夜明け前に目覚めました。

ドアの下にトーニオさんからの手紙はなく、何となく寂しい気もしたけれど、この屋敷に来て初めて日常生活らしい日常生活が始まったような気がしました。

午前中は勉強とアンナさんのお手伝いに精を出し、午後は婦人服店に仮縫いに出掛け、そして夕食後。

僕はドキドキしながら、舞踏室に向かったんです。レオンさんとダンスの練習をすることになっていたから。

男の子の格好で踊るのはどうかと悩みましたが、結局いつものシヤツとズボン姿です。レオンさんは気にならない様子で、僕に手を差し出しました。

開け放たれた窓から夜風が入ってきて、レオンさんの黒髪をなびかせています。オルゴールが優しい音色を奏でる中、僕とレオンさんはワルツを踊りました。

トーニオさんとは気軽に話せるのにレオンさんが相手だと言葉が咽喉のあたりで止まって出て来なくて、手も足も震え、どくんどくと心臓の音が耳に響きます。

レオンさんの優しい瞳に僕が映っているのを不思議な気持ちで眺めながら、僕の顔は熱くなり、きつと耳まで赤くなってるに違いがない。

レオンさんは何も言わずじっと僕を見つめながら、踊ってくれました。

僕はやっぱり、レオンさんが怖い。優しい人だと分かっているのに怖い。どうして怖いのか自分の心が見えず、見えない自分の心はもっと怖い。

レオンさんの腕の中は緊張するけれど心地良くて、僕は朝までだっ  
って踊っていたと思うのです。

## 7 誘惑は舞踏会の夜に ?

いよいよやって来た王宮舞踏会の日。

僕の部屋に髪結い師がやって来ました。

「すべて男爵様から承っておりますので、おまかせください」

年配の女性髪結い師はそう言って、慣れた手つきで僕の髪をブラッシングし、白い布でがっちり覆いました。

手早く丁寧に僕の顔にクリームを塗り、刷毛やブラシを駆使して薄い色を重ねていきます。

淡いピンクの口紅を引き、最後に明るい茶色のかつらをのせました。

結い上げられた髪は小さな真珠の宝冠で飾られて、ゆるやかな房が頭頂から流れるように肩に落ちています。

鏡の中の自分を見て、僕は茫然としました。ママ……。

そこには、記憶の片隅にほんやりと残っていたママの顔がありました。

女優として舞台に立つママ。家のキッチンで料理をするママ。パパと見つめ合うママ。

思い出さないよう再び記憶の隅に閉じ込めて、僕は立ち上がりました。

アンナさんに手伝ってもらい、水色のドレスを着て。その優雅な美しいドレスときたら！

金銀の刺繍やフリルやリボンが可愛らしく、花びらのように重な

ったスカートが層が歩くごとに柔らかく揺れるんです。

僕のべったんこの胸の部分には詰め物がほどこされて、女の子らしい体の線が                      偽物ではありませんが                      僕を一人前のレ

ディに見せてくれます。

首回りを縁どる白いレースが華やかで、ふっくらふくらんだ肩の部分から下は白い手袋をはめました。

山羊皮の靴を履いて転ばないよう気をつけながらゆっくりと階段を下り、貴婦人のような優雅な足取りで一階のホールに向かう僕。レオンさんが暖炉にもたれて待っていて、トーニオさんがソファから立ち上がりました。黒い夜会服姿の二人は、煌めく星のようです。

「思った通りだ。よく似合ってるよ、メイドくん」

トーニオさんがにつこりする横で、レオンさんは優しい目で僕を見つめています。

「綺麗だよ」

そう言うレオンさんの声が少しかすれていて、レオンさんはすぐに咳払いをしました。

トーニオさんが、レオンさんを横目で見て笑っています。

「で、メイドくんのダンスはどうか？」

「ああ。合格点」

ダンスを教わりながらレオンさんの足を何度も踏みつけたことを思い出し、僕は感謝の目でレオンさんを見上げました。

王宮に着いたのは、宵の口でした。

早い時間にもかかわらず、ホールの明るいシャンデリアの下には華やかなイブニングドレスや黒の夜会服姿の人たちが詰めかけ、談笑と嬌声が花開いています。

レオンさんとトーニオさんに挟まれ通路を歩いていると、向こうからカミィラさんがやって来ました。

蜂蜜色の髪にエメラルドを散りばめ、薔薇色のドレスが白い肌によく映えて、カミィラさんは本当に綺麗な人です。

悪意に満ちた碧の瞳と、殺気立った微笑を除けば。  
僕はすっかり怖気づいてしまい、きつとレオンさんとトーニオさんが助けてくれると自分を勇気づけるのでした。

カミィラさんの隣にはマチルダさんと三十代ぐらいのレディがいて、レディはレオンさんとトーニオさんに笑いかけ、レオンさんとトーニオさんもレディに軽く会釈して通り過ぎて行きます。

「どなたですか？」

僕が尋ねると、レオンさんが、

「ミューゼ伯爵夫人。カミィラの母親の妹に当たる人だ」

と小声で教えてくれました。トーニオさんが足を止め、

「ちよつと情報収集して来るよ。ついでに俺の女神に挨拶しておくかな。しばらく放っておいたから、ご機嫌を取つとかない」と

と意味ありげに、にやりとします。

「女神様？」

『悪い女性』のことかなと僕は思いました。でも女神様と悪い女性とは、結びつかないような……。

「俺の周りにいる女性たちの中で、最上位の女性だよ」

周りにいる女性たち      恋人が複数いると言われても、やっぱりと納得してしまう点がトーニオさんの凄いところです。

「後はよろしく」

トーニオさんはそう言って、王宮の奥へと消えました。

「参りましょうか、お姫様」

悪戯っぽく微笑むレオンさん。黒髪と黒い瞳に黒い夜会服という今夜のレオンさんは、拳闘をしていたレオンさんとは雰囲気異なつて、優雅で素敵な紳士です。

「はい」

僕は精一杯元気よく返事をして、レオンさんの腕に震える手を添え、華やかな人々の中を進みました。

レオンさんからリーデンベルク家の親戚の方々を紹介してもらい、覚えきれないと思いながら懸命に覚えているうちにファンファールが鳴り、舞踏会の主催者である王妃様の来場を告げる声が響きました。

僕は、王妃様にお目にかかるのは初めてです。

それを言うなら、王家のどなたにもお目にかかったことはありません。

王妃様は豪華なドレスに身を包んだ、四十代の優しいお母さんのような女性でした。

温和な顔立ちでふくよかな体型で。でも僕の視線は、王

妃様の手を取りエスコートする若者に釘付けになりました。

トーニオさん       ！！

「トーニオは、王妃様のお気に入りだね」

僕が目を見開いてトーニオさんを見ていることに気づいたレオンさんが、耳元でささやきました。

「もしかして、女神様って       」

「たぶんな」

レオンさんの声は、笑いを含んでいます。

「あいつ、口が達者だから、貴婦人たちに人気があるんだよ。王妃様にも、王宮の女官たちにも」

王妃様が近づいて来られたから、僕は緊張のあまり固まってしまい、ぎくしゃくと膝を折ってお辞儀をしました。

「まあ、何て可愛らしいのかしら。デイリアは娘を欲しがっていたから、さぞ喜んでいることでしょうね」

王妃様の後ろには女官たちがいて、僕たちの周囲を招待客が取り囲んでいます。

「エメルと申します。お目にかかれて光栄に存じます」

「あらあら、硬い挨拶はやめましょう。トライゼンは小さな国だもの、皆家族だわ。そうよね、トー二オ？」

王妃様は笑みを浮かべながら僕からレオンさん、トー二オさんへと視線を移します。

「もちろんです。国民は皆、王妃様を母と慕っております。私は違います」

「違うの？」

怪訝そうな王妃様にはつとめるような魅惑的な笑みを向け、トー二オさんは答えました。

「私にとってあなたは、地上のすべてを照らす女神ですから」

王妃様の気持ちのいい笑い声が舞踏会場に響き、近くにいた他の招待客たちも一様に笑いました。

「まったく。トー二オは女性の味方なのか女殺しなのか、わからないわね」

トー二オさんの腕をばんばんと叩き、王妃様は次の客人の前へと移られて、僕はほっと胸を撫で下ろしました。

謁見は、無事に終わったようです。

王宮楽士たちの弦楽奏が始まり、王妃様を含む貴族の方々がダンスを始めた頃、カミーラさんがやって来ました。

「また会えて嬉しいわ、エメル。先日はとっても楽しかったわね」と薄気味の悪い満面の笑みを浮かべ、横目でレオンさんをぎろつと睨み、視線を僕に戻してまた笑います。

「ねえ、エメル。平凡な平民の娘が王子様と結婚するという夢のようなお話が世界のいたる国にあるけれど、それについてどうお思いになって？」

「どう？ えっと……別に……」

どうと聞かれても。考えたこともありません。王子様と結婚するとか、僕とは別世界の話だもの。

「先ほど王宮の女官たちとお話していたんですけど……近頃、勘違いした平民の娘が増えたそうなんですのよ。皇太子殿下に恋文を送る娘とか……」

カミーラさんは声を張り上げて、何だか皆に聞かせたがっているかのようです。

「殿下に恋文ですって？」

案の定周囲にいた貴婦人たちが関心を示し、集まって来ました。

「おとぎ話では平民の娘が王子様と結婚すればめでたしめでたしですけど、現実問題として王子様側や貴族から見ればどうなのかしらっていう話を女官たちとしていたんですの」

「言葉は悪いんですけど……」

カミーラさんの隣にいたマチルダさんが、おずおずと口を開きます。

「……成り上がり？」

くすくす笑いがさざ波のように広がり、近くにいた貴婦人たちが豪華な扇で口元を覆って笑っています。ちらちら僕を見る視線もあって、僕は硬直してしまいました。

成り上がりって、僕のこと？

「俺は平民から成り上がった新興貴族だが、それがどうかしたか。当てこすりが見たいなら他所でしてくれないか、カミーラ。ここで低俗な話をされても、御婦人方が退屈されるだけだ」

レオンさんの低く静かな声が、貴婦人たちのくすくす笑いを消しました。レオンさんは口元に皮肉な微笑を浮かべ、僕をかばうように前に立ち、カミーラさんに冷たい目を向けています。

「事実を申し上げておりますのよ」

カミーラさんはレオンさんの険しい視線にも負けず、つんと顎を上げました。

「今夜、皇太子殿下が舞踏会に来られるそうですね。熱烈な恋文を送った平民の娘に会いに」

「本当なの、カミーラ」

「どちらの令嬢が殿下に文を送ったのかしら」

「殿下は、どう思ってたっしやるの？」

「でも……平民ですって？」

貴婦人たちの表情には興味と侮蔑が入り混じり、もしもその娘がこの場にいたら、鮫に食い散らされる小魚のような目に合うんだろ。うなと僕はぞっとしました。

「女官たちに口止めされていますので、詳しく話せないのが残念で

すわ。でもお仕事に忙しい殿下を舞踏会に引つ張り出すなんて、罪ではありませんこと？」

カミーラさんが憤然として言い放ち、僕をちらつと見たから僕は青ざめました。

もしかして、僕が殿下に恋文を出したと思われてる？

僕は決してそんな事はしていません。

皇太子殿下がお忙しい方だというのは、本当です。

今年25歳になれるゲオルグ皇太子殿下は色恋の噂の絶えないラインハルト王子とは違い、謹厳実直で真面目な性格の方だと聞いています。

博識でありながら知識欲旺盛で、農作物や家畜の品種改良に精力的に取り組んでおられるとか。

扇をせわしげに振る貴婦人たちは僕の顔を伺い、舞踏会場を見回しています。数多い招待客の中には貴族でない資産家の令嬢もいて平民の娘は僕だけじゃないんです。

どの平民の娘が恋文を送ったのだろうと、ひそひそ話をしながら探す貴婦人たちは、やっぱり鮫に見えました。

「レオン。妹さんにダンスを申し込んでもいいのかな」

振り返ると、若い紳士が三人立っています。一人は拳闘倶楽部でも見かけた人で、きつと三人ともフィアの学生なんだろうなと僕は思いました。

「絶世の美少年が、稀代の美少女に変身か。いいなあ。うちにもこういう目の保養になる妹がいたらなあ」

「ダンスは品行方正で礼儀正しい者だけに許可する。お前らは駄目だ」

レオンさんの笑い混じりの返答に、三人は鼻を鳴らしました。

「ひどいよー」

その後親戚の方々やリーデンベルク家に関係する紳士たちが訪れて、僕のダンスカードは瞬く間に埋まってしまったんです。

どうしよう……。僕に足を踏まれ、外科病院の入り口で列を作る紳士たちの映像が浮かび、僕は泣きそうになりました。

本当にそうだったら、どうしよう……。

「最初のダンスの相手はトーニオ、次は俺だ。心配するな、エメ。きつとうまくいく」

レオンさんがそう言ってくれ、僕は無理して笑おうとしたけれど、やっぱり頭の中は不安で一杯でした。

突然ファンファーレが鳴り、僕の心臓がどくんと一拍しました。カミィラさんの言った通りでした。ゲオルグ皇太子殿下が来られたんです。

颯爽と現れた殿下は王妃様によく似た温和な顔立ちで、さほど長身ではありませんが、がっしりとした体格の方です。

とは言っても　　。

僕だけでなく、その場にいた全員が目を丸めました。

殿下は夜会服ではなく、農夫が着るような作業着を着て、腕に子豚を抱いています。

白くて小さな子豚は殿下に鼻をすり寄せて、時折「ぶひーっ」と鳴く声がしんと静まり返った舞踏会場に響きます。

子豚、可愛い……。でも……。

「ゲオルグ！　んまあ、何て格好なの！　来るなら来るで、着替え  
てからになさい」

王妃様が殿下に歩み寄ったけれど、あんまり近づきたくないよう  
で、途中で立ち止まってしまいました。

「いや、母上。まだ仕事中的ですよ。小麦の生育実験に立ち会わ  
なければならぬんですが、嬉しい贈り物が届いたものですから。」

ああ、みんな、聞いてくれ」

王太子殿下は、豊かで音量のある声を張り上げました。

「バークシャー種の豚が二十匹、手に入った。新種の豚でなかなか  
手に入らなくて困っていたのだが、さるご婦人が贈ってくれたのだ」  
と抱いていた子豚を高々と持ち上げます。

「これを従来豚と掛け合わせれば、さらに質の良い肉が手に入る  
はずだ。わが国の塩漬豚肉は高値で輸出され、さらなる外貨獲得  
が見込めるだろう」

歓声があがり、招待客たちは顔を引きつらせながら拍手しました。  
大型で強健で多産で肉質の良い豚の飼育は、畜産国であるトライ  
ゼンには必要不可欠なことなんです。

「豚には手紙がついていた。王宮舞踏会でぜひとも殿下にお目にか  
かり、豚について心ゆくまで語り合いたいという内容だ」  
と紙をひらひらさせます。

カミーラさんが僕をちらっと見て意味ありげに微笑むので、僕は  
又もや青ざめました。

まさか。まさかカミーラさん、偽の手紙を殿下に送った  
んじゃない。

そんなことあり得ないと、僕は心の中で首を振りました。

皇太子殿下まで巻き込むような嘘を、いくらカミーラさんでもつくはありません。

マチルダさんまでにやにや笑っているけれど、反逆罪になりかねないことを、王族に対する不敬につながるようなことを、するわけがない。

でも。

だからこそ、あり得るかも知れないと僕は気がつきました。

誰もカミーラさんがそんな事をするとは思わない。公爵令嬢がそんな事をするとは思わない。

だから、やったんだ……。

「今夜は舞踏会には出席しないつもりだったんだが……」

煌々と輝くシャンデリアの下で、殿下は口角をわずかに上げて笑いました。

「手紙の文面があまりに熱烈なので、ついつい会いに来てしまったよ」

カミーラさん、一体何て書いたんだらう……。

「手紙の最後に署名がある」

署名……。僕の心臓が、ばくんばくんと脈打ちました。まさか、僕の名前が書かれてるんじゃない……。

どうしよう。みんなの前で、手紙は偽物ですなんて言えない。大騒ぎになるに決まってる。

でも僕が書きましたって言ってしまったら。

鮫のような貴婦人たちの反応が、ありありと浮かびます。

「何てあさましい」「これだから平民は」「成り上がるためなら手段を選ばないのね」  
どうしよう……。

僕だけでなく、舞踏会場にいる全員が殿下の次の言葉を固唾をのんで待ちました。

7 誘惑は舞踏会の夜に ?

「カミーラ・フォン・ペテルグ」

殿下がカミーラさんの前に立ち、カミーラさんは口をぽかんと開けました。

「公爵令嬢から恋文を貰うとは思わなかったな。君の望み通りにしよう。さあ、おいで」

「そ、そ……れ……は」

カミーラさんは青くなり、赤くなり、信じられないといった表情で殿下を見、僕とレオンさんを睨み、また殿下を見て、何か言おうと口をぱくぱくさせています。

「あ、あの、これ、なに、まち、どう、こん……ほほほほ」

（あ、あの、これは何かの間違いで、どうしてこんなことになったのかしら、ほほほほ）

ようやく出て来た言葉は意味不明で、カミーラさんは引きつった微笑を浮かべながら殿下から手紙を引つたくりました。

隣にいるマチルダさんも手紙をのぞき込み、二人で顔を見合わせています。

「気の利く女官が知らせてくれてね。ちょうど殿下が王宮に戻っておられたから事情を話したら、分かってくれたよ」

ささやき声がして、いつの間にかトーニオさんが背後に立っています。

「でかしたぞ、トーニィ」

「ふふん。手紙には、殿下の子供を産みたいと書いてあった。殿下もお人が悪い。署名をカミーラ・ペテルグに書き直せと女官に命じてたから、素知らぬ顔してカミーラちゃんに迫る気だよ」

こ、子供……。僕が書きましたと言わずにすんで良かったと、僕は深く深く胸を撫で下ろしました。

「どうしたのだ、カミーラ」

あたふたするカミーラさんに、殿下は唇の端をひくひくと震わせています。笑ってるのかなとも思ったけど、目つきも顔つきも生真面目そのもので、とても笑顔には見えません。

「も、もちろん、光栄に存じますわ、殿下。ですけれど、ほ、本日はお日柄も悪く……。せっかくの舞踏会ですもの。とても残念ですけど、ご一緒させて頂くのは、明日にさせて頂きますわ」

僕の目には、カミーラさんの脳がこの突然の危機にフル回転しているように見えました。

「何を言うか。私は忙しい身だ。手紙に一生豚と暮らしたいと書いてあったぞ。ちょうど今夜は豚の出産がある。一緒に見に行こうではないか」

「行きたいに決まっていますわ。ねえ、カミーラ。この子ったら、恥ずかしかっておりますのよ」

とミューゼ伯爵夫人が口添えします。

カミーラさんは絵に描いたような笑みを顔に貼りつけ、トーニオさんをぎろつと睨み、レオンさんと僕を睨み　その顔の凄みのあることと言ったら！　僕には、笑顔の道化師が牙を剥いているように見えました。

そして口許とこめかみをぴくぴく震わせながら、どこかに救いが転がってないかと辺りを見回しています。

「ま、まあ、豚の出産ですか。そんなどうでもい……いえ、素晴らしいことなら、是非拝見したいですわ」

カミーラさんは、覚悟を決めたようです。

「急がないと生まれてしまう」

殿下が子豚を抱いたままカミーラさんの腰に手を回して抱き寄せたものだから、カミーラさんは泡を吹いたように天井を見上げ、又もや意味不明の言葉を叫んだんです。

「なっ、ぶっ、ちっ、よっ、さっ、あ　　っ。ほーほほっほっほっ  
ほお　　っ」

（何すんのっ、豚を近づけないでっ、寄るな、触るな、あっち行け  
っ。ほーほほっほっほっほお　　っ）

殿下は失神しそうなカミーラさんを抱き寄せたまま、足早に舞踏会場から出て行かれました。

人々はほつと胸を撫で下ろし、

「めでたいと言っべきか。殿下にも、そろそろ身を固めてもらわねばならんのだし」

「お似合いじゃありませんこと？　ペテルグ公爵家は王家につながる家系ですもの」

「仕事熱心な殿下と、豚好きの妃か。トライゼンの未来は明るいな」と口々に祝意を示します。

遠くでカミーラさんの絶叫が聞こえ、すぐに静かになりました。  
「自分でまいた種なんだから、刈り取ってもらわなくては」

トーニオさんは、笑いを堪えています。

人々の肩越しに、げっそり肩を落とされた王妃様の姿が見えます。王妃様がどうお考えなのかは分からないけれど、僕はゲオルグ皇子殿下が好きになりました。

謹厳実直で生真面目な表情の端っこに照れたような笑みを浮かべた殿下は、大人の男性なのに可愛く見えました。

「最初のワルツだよ、メイドくん」

トーニオさんが僕に手を差し出し、頭を出す僕の不安の虫。  
僕が紳士たちを次々と病院送りにする魔の時間が、とうとう始まってしまうんです。

トーニオさんに手を取られ、僕は踊りました。

レオンさんもダンスが上手ですが、トーニオさんは名手と呼べるほどの踊り手です。

トーニオさんにリードされ、ドレスの裾をなびかせながら、ふわふわと踊る僕。

足を踏んづけないかとひやひやしたけれど、トーニオさんのリードが上手だから、そんな心配は無用でした。

「やっと二人つきりになれたね」

足元ばかりを見ていた僕が頭を上げると、すぐ上にトーニオさんの悪魔の微笑があります。

「琥珀のような目をしているね。君の瞳に溺れてしまいそうだ」  
「え……つと」

「君の心臓の音を肌で感じたい。君の柔らかな体を思いつきり抱きしめてみたいよ」

「あの……僕、柔らかくないですよ。固いカカシなんです、僕」  
トーニオさんは、くすりと笑いました。

「どこから見ても、柔らかそうで美味しそうな女の子だけど？」  
「それは、そのう、詰め物をしてるからそう見えるだけで。胸とか、お尻……の……あたり」

話が困った方向に進んでしまいそうで、僕は言葉を途切らせました。

「大人になるなんて、簡単なことだよ。俺にまかせて。一晩で大人にしてあげるよ」

やっぱり、そっちの方向に話が進んでしまうんです。僕は、拳を握りました。振るう勇氣はないけれど。

「……子供のままでいいです」  
僕が言うとトーニオさんは目を伏せ、肩を震わせました。笑いをこらえてるみたい。

「ねえ、メイドくん。俺が君に近づくと、凄い目つきで睨む奴がいるんだよねえ」

トーニオさんの視線をたどり壁際を見ると、レオンさんが不愉快そうにトーニオさんを睨んでいます。

ワルツが終わり僕を連れて戻ったトーニオさんに、レオンさんが言いました。

「自分の妹を口説いてどうするんだ。王妃様を放ったらかしにしていいのか？」

「俺を追い払う気が。ああ、わかったよ。情報収集に励んで来るよ」  
トーニオさんは、笑いながら離れて行きました。

僕は、レオンさんと踊りました。レオンさんが相手だと緊張してしまいます。

そればかりかレオンさんが触れた箇所が熱を帯びたように熱くなつて、顔まで熱くなつてきます。

ぎくしゃくと踊っているうちにレオンさんの足を踏んでしまい、僕はますます熱い顔になつてレオンさんを見上げました。

「ごめんなさい……」

「ずいぶん緊張しているな」

レオンさんは、微笑を浮かべました。

「俺は怪獣でも人食い人種でもないよ」

「はい。兄さん……じゃなくお兄様ですよね」

レオンさんは微笑んだまま、悪戯っぽく眉を上げました。

「様って柄じゃないかもな。音楽教師を見るとこそ隠れるような、気弱な人間だし」

「音楽教師……？」

「声楽のテストを受けなきゃならないんだが、逃げ回ってるんだ。

音痴だから」

僕は、目をぱちくりさせました。レオンさんが、音痴……？

レオンさんはきつと、僕の緊張を解こうとしてるんだと思いました。レオンさんの歌は聞いたことがないけれど、声は低くてよく響いて魅力的で、とても音痴とは思えないもの。

「今度、レオンさんの歌を聞かせてください」

僕が言つと、レオンさんは笑つて

「暗い気分の時に聞くといいよ。笑えるから」

と答え、僕は思わず笑つてしまいました。

その後レオンさんの学友の方々と踊り　レオンさんいわく信頼できる友人たち、トーニオさんに言わせるとレオンさんが怖くて僕にちよっかいを出せない腰抜け達らしいんですけど　息切れがしてきた頃ヴィリーさんと踊りました。

ヴィリーさんは、赤ら顔で大柄な熊を思わせる優しそうな人です。壁にもたれて僕を見ているレオンさんの姿が目の隅に映り

レオンさんはずっとその姿勢で僕を見守ってくれているんです

申し訳ない気持ちでいた時、レオンさんの前を通った女性が足を滑らせて転んだのが見えました。

その女性はプラチナブロンドだけれど、背格好がマチルダさんに似てるような……。

レオンさんが女性に手を貸そうと僕に背を向けてかがんだ時、僕の体がふわりと浮きました。

「わ。何……」

口を大きな手で塞がれ、僕は軽々と持ち上げられたんです。

「大丈夫ですか。気分が悪いんですか。外に行きましょう」  
そう言いながら、走って僕を運ぶヴィリーさん。

僕は暴れたけれどドレスでは動きづらくて、あつと言う間に王宮の庭に連れ出されてしまいました。着いた先は温室です。

月明かりに照らされた中は明るく、真夏の夜にもかかわらず涼しく、色とりどりの花が咲き乱れていたけれど、僕には楽しむ余裕もありませんでした。

「アーレク、いるのか？」

ヴィリーさんが大声で呼びかけましたが、返事がありません。

「どうしてなんですか。ヴィリーさんは、レオンさんの友だちなんでしょう？」

僕が尋ねると、ヴィリーさんは僕を睨みました。

「色々と事情があるんだよ。お前には関係ない」

関係なくなんかないのに。さらわれたのは僕なのに。

隙をみて逃げようとしたけれど、すぐに捕まって大柄なヴィリーさんに抱えられてしまいました。

やがて温室のドアが開き、アーレクさんが仲間五人を連れて入ってきました。

綺麗だけれど、陰湿そうなアーレクさんの顔。

「やあ。また会えたね、エメル君。そんなドレスより、君には男の子の服が似合うよ」

アーレクさんは、薄笑いを浮かべています。

「僕はもう、行くからな。これで貸し借りなしだからな」

ヴィリーさんは赤い顔を青くして、慌てふためいて走り去りました。

「どうしてなんですか。僕なんかには用はないでしょう？」

後ずさる僕にたった二歩で近づき、アーレクさんは僕の首を片手で捕まえました。

片手でくびり殺せるぞと言わんばかりに。

もう一方の手で僕の顔を撫で、顔を右に傾け左に傾け、ためつすがめつ僕を眺めます。

「君にはわからないだろうなあ。美少女が男装した時、どれほどエロティックか。創作意欲をかき立てられるんだよ。君は僕が初めて関心を持った女の子だ。嬉しいだろう？」

微笑を浮かべるアーレクさんは不気味で、触れられた箇所には鳥肌が立ちます。

周囲を見回しましたがモップが温室にあるはずもなく、代わりになりそうな物を探しました。

あつた！ 土堀り用のシャベル。

モップに比べると短いけれど、振り回せるだけの長さはあります。

「さて。美しい花園で、裸になって横たわってもらおうか」

僕は首をつかむアーレクさんの手を右手で思いつきり引っかき、僕の顔を撫でる手を左手でつかんで噛み付き、同時に向う脛を力いっぱい蹴りました。

「くそ！」

同時に三箇所を攻撃されて、アーレクさんが思わず引き下がった瞬間を捕らえ、シャベルに駆け寄ったんです。

「またそんな物を振り回すのか」

僕が棒術の構えをすると、アーレクさんは寒々しい微笑のまま顎をしゃくります。

周りにいた五人の青年たち いずれも貴族の子弟に見えますが同時に僕に襲いかかり、無我夢中でシャベルを振ったけれど、背後からはがい絞めにされ、動けなくなってしまった。

一人がシャベルの先を握ったから、下から突き上げると顎に当たって、その青年は吹き飛ぶように仰向けに倒れました。

すかさず後ろにいた青年の向う脛辺りをかかどで蹴ると当たった

ようで、その青年は片足でぴょんぴょん跳ね、その隙に僕はシャベルをぶるんぶるん振り回しました。

熱帯樹木の陰から新たに青年が現れたから、シャベルで攻撃したけれど簡単に取り上げられてしまい、その上僕は片手で楽々と抱き上げられて、必死になってもがきました。

「いやだ！ 離して！ いやだあ っ」

「静かにしろ！ 温室は静かに楽しむ場所だということを知らないのか、小僧たち」

朗々とした声に、アーレクさんたちは凍りついたように静止しました。

何だか様子が変わります。僕を捕まえた青年は、アーレクさんの仲間だと思っただけだ。

「いらつしゃるとは存じ上げず」

アーレクさんが、困ったように口ごもりました。

「失礼を致しました。ちよつとした行き違いがありましてその子をお返し頂ければ、すぐにでも退散致します」

青年のダークブロンドの髪は柔らかそうだけれど、顔立ちは彫像のように冷たく美しく、触れれば切れそうな氷の刃を思わせる薄青い目が僕をとらえました。

僕はごくりと唾を呑み、

「返さないでください。僕、無理矢理ここに連れて来られたんです」

「僕？」

青年は僕の頭のとっぺんから足先まで、じろじろと無遠慮に眺めます。

「あの、女の子です、本当です。でも事情があつて、当分僕と呼ぶことにしてて……あの……」

レオンさんの目は怖いけれど、まだ温もりがありました。この人の目は温もりの欠片もなく、近寄り難い雰囲気があります。

「今回のことは大目に見てやる。私の気が変わらないうちに、さつさと失せろ」

冷たい青い目の青年が言うところ、アレクさんは唇をかみ、抱え上げられた僕をちらつと見て、渋々といった様子で温室から出て行きました。

「ラインハルト」

熱帯樹木の陰から甘くハスキーな声がして目の覚めるような美女が現れ、美女が呼びかけた名に僕ははっとしました。

まさか、ラインハルト　王子？！

「待ちくたびれたわ」

「ああ、すまない、ミレーヌ」

ミレーヌと呼ばれた美女は、恐らく目をまん丸にしているであろう僕を見て微笑みました。

「新しいペット？」

「うん？」

「あの、降ろしてください。僕、一人で舞踏会に戻れます。助けてくださって、ありがとうございました。あの、シャベルで殴ろうとしたこと、すみませんでした」

早口でそう言って足を地面に着けようとしたけれど、ラインハルト王子の腕が僕の腰に回され、王子の脇腹と僕のおなかで密着した形がっちりと固定されて、僕は宙に浮いたままでした。

僕の顔をじつと見る王子は、微かにお酒の匂いがします。

「そうだな。おもしろそうなペットだ。　　すまない、一人で戻ってくれるか？」

ミレー又さんはそう言われ、美しい眉を上げました。

「埋め合わせはする。　　輝くもので」

「選ばせてくださるの、あたくしの好きなものを？」

「もちろん」

僕には理解できない会話で、二人は了解し合ったようでした。輝くもの　　宝石とか？

ミレー又さんはしなやかな足取りで温室から出て行き、ラインハルト王子は僕の膝に手を入れて、僕を抱え上げました。

「わつ。あの、本当に、降ろしてください」

だんだん必死になってきました。いつまでも密着しているのは落ち着きません。

「子猫は逃げ足が速いからな」

「え？」

王子は笑いながら入り口に背を向け、温室の奥に向かい、不安になった僕はじたばたと暴れました。

王子に対し噛みついたり蹴っ飛ばしたりするわけにはいきませんが、それでも精一杯抵抗したんです。

「どこに行くんですかっ。僕、戻らないと。レオンさんやトーニオさんが心配してるはずです」

「ああ、そうか。君はリーデンベルクの新しい令嬢か。行き先はこの奥だ。ちょうどいい密会場所になっている。ミレー又との逢引の邪魔をした償いに、私の相手をして貰おうか」

密会！ 逢引？ 償い！！ 相手って……。

僕は真っ青になってさらに暴れ、何とか腕を引き剥がそうとしたけれど、無理でした。

7 誘惑は舞踏会の夜に ?

王子の腕は鋼のようで、押しても叩いてもゆるんではくれません。

余裕の表情で、

「そのうち爪を出し、小さな牙で噛みつくんじゃないのか」と笑っています。

彼は放蕩者で毎日遊び暮らしていると聞いていたけれど、違うのではないかという気がして来ました。

腕は岩のように硬く筋肉は労働者並みで、とても遊び暮らしているようには見えません。

端整で厳めしい横顔は、放蕩者というより軍人のようです。

樹々の陰にベンチがあり、王子は腰をおろし、僕を膝の上に抱き上げました。

「本当に女の子なのかな」と僕の頭に触れます。

その時になつて僕は、さっきの乱闘でかつらを落としてしまったことに気がつきました。

王子は僕の頭の白い布を取り去り、飛び跳ねているに違いない髪を撫でつけました。

「男の子に見えるが?」

「女の子ですつ、本当ですつ」

答えながらも僕は両手をつ張り、何とか彼の腕から逃れようとしたんです。

「確かめさせてもらおうかな」

王子が笑いながら僕のドレスの胸元に手を入れようとし、

「き、きや……」

僕は彼の手を両手で必死に押し留め、叫び声を吞み込みました。もしも誰かにこんな場面を見られたら……。叫ぶ前に、王子から離れないと。

彼の手を叩き、足をばたばたさせたけれど、そんなことをすれば裾がめくれることに気づき、慌ててスカートを撫でつけました。

ラインハルト王子は声を上げて笑い、僕はと言えば泣きそうになって来ました。

「助けてください。お願いだから。僕なんかじゃ、ミレーヌさんの代わりにはなりません。お二人のお邪魔をしまして申し訳なかったと思いますけど、僕だって無理矢理連れて来られて……その、色々と事情があったから……」

僕の涙に気づいた王子が、顔を近づけて来ます。

王子の唇が僕の涙を吸い取り、僕は悲鳴を上げました。

「きやああああ　　つつっ！……」

「エメル　　！」

遠くから声がして、はっとしました。レオンさんの声です。

「レオンさん！」

大声を上げると複数の足音がして、樹木の間からレオンさんとトーニオさんがヴィリーさんを引きずるようにして姿を現し、辺りに沈黙が漂いました。

無表情で凍りついたように佇むレオンさん。驚いた顔のトーニオさん。ラインハルト王子の腕にしっかりと抱かれた僕。最悪の事態です。

ヴィリーさんは顔を青紫色に腫らし鼻から血を流していて、レオンさんとトーニオさんに何をされたのか一目瞭然です。

「い、言った通りだろ？ 温室だったろ？ もういいだろ？」  
そう言っレオンさんの手を振りほどき、ヴィリーさんは一目散に逃げ出しました。

「妹を助けてくださって、ありがとうございました」

トーニオさんが会釈をしたけれど、レオンさんもトーニオさんも顔がこわばっています。

ラインハルト王子も無言で、男たちが沈黙の駆け引きをしている間、僕はもがいて王子の腕から逃れようとしたんです。

王子がふつと笑い、僕を横目で見ました。

「もう少し預かせてもらおう」

「そういう訳にはいかない」

レオンさんの声音は低く鋭く不穏当で、僕でさえぎくりとする程です。

「レオン。君は相変わらず血の気が多いのかな」

「確かめたらどうです？ そちらの出方次第ですよ」

「よせ」

トーニオさんがレオンさんを止め、一歩前に出ました。

「ベルトラム男爵として、申し上げます。当家の娘をお返し頂きたい」

王家の権力と貴族の名誉。そんな言葉が頭をかすめました。目の前の三人に漂う危険な空気の理由が思いつかず、僕はひたすら僕の腰に絡みついた王子の腕を引き剥がそうとしていたんです。

突然王子が立ち上がって腕を離れたから、僕はよろけ、足を滑らせて尻餅をついてしまいました。

レオンさんが大股で近づき、僕を抱き上げて、そのまますたと歩き始めます。

後ろでトーニオさんが、ラインハルト王子に頭を下げるのが見えました。

「あの、レオンさん。僕、大丈夫ですから」

僕の言葉にもレオンさんは無言で、顔をこわばらせたまま僕を抱いて歩き続けます。

「本当に……もう……一人で歩けますから」

「頼むから、黙っていてくれ」

言われた通り、僕は黙りました。レオンさんの怖い横顔を見上げながら。

レオンさんは怒ってる。そう思いました。僕が情けない奴だから。

簡単にさらわれて、逃げ出すのにぐずぐずと手間取るような手のかかる奴だから。しかもラインハルト王子のおもちゃみた

いに、彼の腕の中にいたから。

恥ずかしくて情けなくて、目の奥がつんと熱くなりました。最初に逆戻りです。レオンさんが冷たかったあの日々に。

せつかく仲良くなれたのに、僕を好きだって言ってくれたのに、僕が自分でそれを台無しにしてしまったんです。

「すみませんでした」

僕はやっぱり、謝りました。他に出来ることがなかったから。

「お前のせいじゃない」

レオンさんは僕をちらつと見て、奥歯を噛みしめ、僕を抱いたまま無言で歩き続けました。

僕たちは、そのまま屋敷に戻りました。

普段着に着替えキッチンで翌日の朝食の仕込みをしながら、僕は泣いていました。

我慢しようと頭では思っても、涙が止まりません。

朝食はレオンさんの好きな焼きたてスコーンにしようと思い、準備をしました。

三人目のママが怒った時、好物の食べ物があると機嫌を直してくれたことを思い出しながら。

そんな手がレオンさんに通じるのか疑問でしたが、他に名案が浮かびませんでした。

スープ用の野菜を煮込んでいると、

「どうしたの。何泣いてるの」

横から声がして僕は飛び上がり、持っていたレードルを落としてしまいました。

トーニオさんは、足音をたてずに歩くのが得意なんです。

「何でもないです」

トーニオさんは話しやすいけれど、それでも恥ずかしくて話せないこともあります。

「あのねえ、メイドくん」

トーニオさんは壁にゆったりともたれ、僕を見やりました。

「何でも一人で抱え込まない方がいいよ。たまには人に甘えるってことも、してみたら？」

甘える。 。 どうすれば甘えることになるのか、想像もつきません。

「話してごらんよ。いい解決方法が見つかるかもしれないよ」

「……レオンさんを怒らせてしまつて」

僕はレードルを拾いながら、たどたどしく話しました。

「僕が、簡単にさらわれてしまつたから。僕が、弱い奴だから。しかも、あんな場面を」

目を拭つたけれど、涙が止まりません。

「僕のせいです」

「レオンが、メイドくんに対して怒つてると思つてるの？ 違うよ。あいつは、自分自身に対して怒つてるんだよ。君を守りきれなかったから」

僕はレードルを置き、不思議なものを見る心地でトーニオさんを見上げました。

「自分自身　？　でもそんな風には……僕に怒ってましたよ」

「そうだよねえ。そう見えるよねえ、あんなに無愛想じゃ。でもね、男ってプライドが傷つくと不機嫌になるものなんだよ」

トーニオさんは、にやりとしました。

「これから一緒に暮らすんだから、そういう男の心理、理解しないと。俺だってプライドを傷つけられたら不機嫌になって、その辺にある椅子やテーブルに当り散らすんだよ。メイドくんはそういう時、知らん顔してればいいんだよ」

「そうなんですか……………」

僕に対して怒ってるんじゃない　その言葉は、小さな希望のともし火となりました。

でも僕を守れなかったという理由で、なぜレオンさんが自分に対して怒るのでしょうか。

尋ねてみたかったけれど、自分のことで精一杯だった僕がふと冷静になった瞬間、もっと大事なことがあると気がつきました。

僕のせいでレオンさんとトーニオさんが王子様に逆らう事になってしまい、何事もなくて済むんでしょうか。

三人の間には、何かがあるような気もするし……。

「……あの、もう一つ聞いていいですか？　ラインハルト王子のことですけど」

トーニオさんの笑みが、ずっと消えました。

「何かあったんですか、お二人と王子の間で……」

「そう見えた？」

「はあ……まあ……」

トーニオさんは、鼻で笑いました。

「それもまたプライドの話なんだけどね。昔のことだし、君が気にするほどの事じゃないよ。しかし、あそこでラインハルトが出てくるとは……」

僕に横顔を向けて遠くを見るトーニオさんの青い目が、面白そうにきらきら輝いています。

「お陰で沸点に大きく近づいたな。もう一押ししてところだな」  
「何のことですか、もう一押しして」

「ああ、何でもないよ。それよりメイドくん、夜にあんまり泣くと顔が腫れるよ。可愛い顔が台無しになるから、笑顔で寝なさい。いいね？」

「は、はい」

トーニオさんは、何故か上機嫌になりました。

「そら、来た来た」

戸口に目を向けるトーニオさんを見ながら耳を澄ますと、足音が聞こえます。

「夜中に俺が部屋を出ると、レオンの部屋まで聞こえるみたいだね。あいつ、気が気じゃなくなるみたいだよ。ひどいよねえ、品行方正な俺を疑うなんて。本人は道德の番人なんて自称してるけど、本当は別の理由があるんだよ。滑稽だよねえ」

別の理由？ 滑稽？ 僕が首をひねっていると、  
「何してるんだ」

レオンさんが戸口から顔を覗かせて、トーニオさんはやりとしてレオンさんを見、僕に視線を移します。

「じゃ、メイドくん、俺の言いつけ通りにするんだよ。おやすみ」と言って、キッチンから出て行きました。

「言いつけ？」

レオンさんはトーニオさんの背中を見送り、僕に目を向けます。  
「……笑顔で寝るようにって。そうしないと顔が腫れるからって。よく考えると笑顔じゃ眠れませんよね、顔が引きつって」

僕は何とか笑おうとし、失敗しました。

僕の目元に残る涙を、レオンさんがじっと見つめています。

「どうしたんだ。まさかとは思いが……トーニオに何かされたのか？」

「いえ。トーニオさんは、僕を慰めてくれただけです」

「ラインハルトかアーレクか？ お前を泣かせたのは誰だ」

言葉を切ったレオンさんの口元は、不機嫌そうに引き結ばれています。  
「ます。」

僕はレオンさんの真剣な顔を見ながら、僕に対して怒ってるんじゃないというトーニオさんの言葉を思い出し、息を大きく吸い込みました。

「また勇気を吸ってるのか」

レオンさんは困った顔で、僕はさらに勇気を吸い込もうと深呼吸しました。

「……屋敷に帰る時……レオンさんが怖い顔をしていたから、僕に對して怒ってるんだと思ったんです。僕がさらわれるたびにレオンさんやトーニオさんに迷惑がかかるし、助け出す手間もかかるし。僕は自力で逃げ出せないような情けない奴だし、もっと知恵を働か

せればいいのに出来ないし、しかもあんな……あんな場面を……。レオンさんが怒るのも分かるんです。でも、でも、僕にはあれが精一杯で……。言い訳になるけど、一度に5人は多過ぎて……。王子様を蹴ったり叩いたりしていいのかどうかも全然知らなくて……。僕、王子様から逃げようとしたけど、全然歯が立たなかったんです。ごめんなさい。これからは気をつけます。勉強して賢くなるし、体も鍛えて強くなりますから、だから、どうか、怒らないで」

話しながら、僕の目から涙がぼろぼろ流れ落ちていきます。

「そんな風に思っていたのか」

レオンさんの嘆息が聞こえ、僕は肩を落としました。レオンさんが呆れてる。

こんなウジウジした姿を見たら、僕のことをますます嫌いになるに決まってる。そう思って目をぱちぱちさせて涙を止めようとしたけれど、どうしたって止まりません。

僕はどうしてレオンさんが怖いのか、わかったような気がしました。レオンさんには、僕を傷つける力があるんです。

レオンさんが大切な人だから、レオンさんに嫌われたくなくて、だから僕はレオンさんの前では小さくなってしまっ

「すみません……。こんな話……したりして。僕、もう、大丈夫だから、部屋に戻ります」  
「待てよ」

レオンさんが、左手で僕を抱き寄せました。右手はズボンのポケットに入れたまま、兄が弟にするみたいに僕の頭を自分の左肩に軽く押しつけて、僕の髪を優しく撫でてくれた。

「お前は何一つ悪くない。さらわれたのはお前のせいじゃないし、助け出すのは俺の役目だ。俺が目を離れたのがいけなかったんだ。悪いのは俺だ」

頭上から聞こえるレオンさんの声が優しく、僕はレオンさんの胸にもたれ、ひつくひつくとしゃくり上げました。

レオンさんの腕に包まれていると温かくて、長い旅をして自分の家に戻ったような、何とも言えない安堵感がこみ上げます。

「俺はトーニオと違って女の子の扱いに長けているとは言えないし、お前に誤解を与えるような事をするかもしれないが」

両手で僕の肩を優しくつかんで体を離し、レオンさんは僕の顔を覗きこみました。

「俺は、いつだってお前が好きだ。お前を嫌いになったりしない」

僕はひつくひつくと言いながら、うなずきました。

レオンさんは、一度言った言葉を違えるような人じゃない。僕を好きだと言ったら、ずっと好きでいてくれる人なんです。

僕の大きな間違いは簡単にさらわれてしまったことよりも、レオンさんの言葉を疑ったことなんです。

「わっ！」

突然レオンさんが大声で言ったから、僕は飛び上がりました。

「しゃっくり、止まったか？」

「止まった……みたいです」

レオンさんの笑みに誘われて、僕は自分でも分かるくらい満面の

笑顔で応えました。

その日の夜、僕は幸せな気持ちでベッドに入りました。

今度レオンさんが怒っているように見えた時は、僕に怒ってると思うんじゃないくて、どんな事情があるんだろうと考えることにしよう。

そう決めて寝返りを打ちながら、レオンさんが片手で僕を抱きしめてくれた時のことを思い出しました。

馬車の中のように両手で力一杯抱きしめられたんじゃないけれど、それでも嬉しくて温かくて胸が高鳴るひとときでした。

あの時の僕は、女の子だった。

レオンさんやトーニオさんの強い弟になりたいと願ってはいるものの、レオンさんの腕の中できめいていた僕は、真正正銘の女の子でした。

それでも男の子を演じている方が落ち着く気がして、ベッドに立てかけた愛用のモップを眺めながら、やっぱり当分男の子でいようと思うのでした。

そろそろ眠ろうと思って目を閉じ、ふとトーニオさんの言葉を思い出しました。 沸点      もう一押し。

事情は分からないけれど、ラインハルト王子がレオンさんの怒りを駆り立てたようです。

どうしてなのか、トーニオさんはレオンさんを怒らせたがっつい

るんじゃないかという気がしてなりません。

思い返してみると、そういう場面を何度も見たような気がします。二人は仲がいい時が多いのですが、何かの拍子にトーニオさんがレオンさんを怒らせ、でもレオンさんは怒りを抑えているような。

トーニオさんが僕をからかうのも、レオンさんを怒らせたいからなんじゃないかという気がして来ました。

トーニオさんが僕に近づくとレオンさんが怒るというようなことを、トーニオさん自身が言っていたし……。

でも何のためにレオンさんを怒らせるんでしょうか。そんなことをすれば喧嘩になるのに。まさか……喧嘩をするため？

レオンさんに喧嘩を売って、トーニオさんにどんな益があるんでしょうか。

他にも気になることがあります。ラインハルト王子との間に、何があっただんでしょうか。

考えれば考えるほど頭が痛くなったけれど、そのままいつの間にか、僕は眠ってしまったんです。

## 8 強さの本質 ?

暗い森の中に、井戸がありました。  
周囲には、だらりと枝の垂れ下がった木々が生えています。

井戸の中から青白い手が現れ、金髪の頭が現れ、髪を振り乱した  
怖ろしい怖ろしいカミーラさんの顔が現れて、  
井戸から這い出したカミーラさんは地面をずるずる這いながら、  
それはそれは怖ろしい声で呟くんです。

「よくも……よくも……よくも……」

僕は必死に逃げようとしたが、足がすくんで動きません。い  
きなり目の前に、耳まで口の裂けたカミーラさんの顔が飛び出して  
きました。

「よくも      っっ!!」

「ひい      っっ!!」

僕は、飛び起きました。……朝でした。薔薇模様のカーテン。薔  
薇模様のソファ。ベージュ色の机と家具。……僕の部屋です。

心臓が早鐘のようにどくどく打ち、僕は荒い息を整えようとしま  
した。

昨夜、カミーラさんはどうなったんでしょうか。強い人だから、  
上手に立ち回るだろうとは思っけれど。何もかも僕のせいだと、僕  
を恨んでるかもしれない。

や、やっぱり、フィアに通うのはやめようかな……。臆病の虫が

騒ぎ出します。

「エメルはユリアスのクラスに決まったから、カミィラとは口を聞くこともないかもな」

とレオンさんが言ってくれて、ようやく安堵の息をついたのでした。

朝食の焼き立てスコーンをレオンさんは10個も食べてくれ、美味しかったお礼にとお皿洗いを手伝ってくれました。

レオンさんが洗ったお皿をトーニオさんが鼻歌まじりに拭いてくれて、それを僕が食器棚に戻します。

リーデンベルク三兄弟が連携してコトに当たっていた時、トーニオさんが僕の顔をのぞき込んだんです。

トーニオさんは指で僕の顎を持ち上げ、顔を近づけました。硬直する僕にはおかまいなしに僕の唇のすぐ横、唇と頬の間と言ってもいい場所に唇をつけたんです。

「ひっ……」

「スコーンの粒が付いていたよ。甘くて美味しいメイドくんの味がする」

泣きそうになった僕の顔を見ながら、口をもぐもぐさせるトーニオさん。

「この次は唇に付けてね。それが俺たちの、愛が始まる合図だよ」

愛は始まりません。粒を口のまわりに付けるなんて、恥ずかしいことです。こんな事態を招いた自分を心の中で罵っていた時、レオ

ンさんの厳しい声が飛びました。

「トーニオ！」

「これは、俺の宣戦布告だから」

トーニオさんが、レオンさんを振り返って言うんです。

「いい加減、お遊びには飽きた。俺は本気でメイドくんを手に入れる」

「妹に手を出してどうするんだよ」

「俺は男で、エメルは女の子だ。お前だって本心ではそう思ってるんだろ？」

トーニオさんの言葉に、レオンさんの顔色が変わりました。

さっきまで僕と冗談をかわしていた優しい目は影をひそめ、険しい視線をトーニオさんに向けています。

レオンさんとトーニオさんの視線と視線がぶつかり、まるで硬い岩と岩が衝突したように空気が震えました。

「トーニオ、話がある」

レオンさんは顎でドアをさし示し、キッチンから出て行きました。

「また話か。甘いよ、話し合いでカタをつけようなんて」

そう言って、レオンさんまで出て行ってしまったんです。

話し合いなんて甘い                      まさか、喧嘩になるんでしょうか。

僕のせいで二人が争うことになるんでしょうか。

おもちゃの力カシを二人の子供が取り合っているみたいで、力カシなんか手に入ってもちつとも面白くないのにと僕は思いました。

おもちゃの力カシの腕が引つ張られてちぎれる場面が浮かんで、自分の腕がちぎれたかのように気持ちが悪くなりました。

考えてみると、僕のことなのに僕なんかいないみたい二人で話し合うなんて、おかしい。

僕のことなんだから、僕の意見も聞くべきなんです。

レオンさんとトーニオさんが、僕の意見なんか聞くとは思えないけど……。

それでも自分の意見を言おうとキッチンを出て、二人を探しました。

二階に上がると廊下を挟んでレオンさんとトーニオさんの部屋があり、閉じられたドアに耳をつけてみたけれど物音ひとつ聞こえなくて、僕は二階のサロンに向かいました。

そこが幼い頃からの二人の遊び部屋になっていて、昔のおもちやや楽器なんか置いてあり、今でも二人の憩いの場なんです。

暑いせいかドアは開け放たれて、オルゴールの音色が廊下まで聞こえます。

壁に貼り付いて中の気配をうかがっていると、トーニオさんの声が聞こえました。

「婚約?! おまえ、ロザヴェイン姫と結婚する気なのか」

「ああ。だからな……」

レオンさんの声も聞こえ、僕はどきりしました。

レオンさんが婚約する?! いけない事とは思いつながら、聞き耳がぴんと立ってしまいます。

「それで、俺に大人しくしていると?」

「まあ……」

その後レオンさんとトーニオさんは声をひそめ、何を話しているのか僕には聞こえませんでした。

僕は後ずさり、足音を立てないように廊下を走ってキッチンに戻り

ました。

レオンさんはロザヴェイン姫という女性と婚約し、結婚するつもりなんだ。

ロザヴェイン 高貴で美しい名前です。どこの姫君なんでしょうか。公爵家か伯爵家か……。

自分でも理由が分からないまま目の奥がつんと熱くなり、僕は咽喉にこみ上げた塊を呑み下しました。

朝食の後レオンさんから植物学を教わり、僕は何度もレオンさんの彫刻のように美しい顔を見上げました。

伸びた前髪を払うレオンさんの手は大きくて、あの手が僕を抱きしめたんだと思うとドキドキしてしまいます。

レオンさんは僕には婚約した話をしてくれず、もしかすると秘密結婚なのかも知れないと僕は思いました。

トライゼンの法律では男子は十六歳で結婚することが出来るけれど、二十歳までの結婚には色々と制約がつくんです。財産とか経済力とか、犯罪が絡んでいないかとか。

レオンさんは十七歳だけれどクレヴィング卿だから、王立裁判所に書類を提出すれば結婚許可がおりるはずです。

もしかするとお相手の家族が反対していて、秘密裡に結婚しようとしているんでしょうか。

どんな家系の女性なんだろう……。僕は気になって、勉強の後、庭掃除をしていたアンナさんに尋ねてみたんです。

「アンナさん。ロザヴェイン姫ってご存知ですか？」

「姫？」

アンナさんは、小首を傾げました。

「リーデンベルク家の領地に、ロザヴェインという地所がありますけど。人の名前としては……どうでしょう。ディリア様のお母様の大叔母様が確か、ロザヴェイン様かロザヴェイヌ様だったと思いますよ」

「地所のロザヴェインというのは、遠いんですか？」

「馬車で三日ほどかかりますかしらねえ」

僕は、ぴんと来ました。レオンさんのお相手は、ロザヴェインに住む美しい女性なんです。だから、ロザヴェイン姫なんだ……。

サンドイツチで軽い昼食を済ませた後、トーニオさんからトライゼンの歴史を教わりました。

キッチンでの出来事など無かったかのように、トーニオさんはいつも通りのトーニオさんです。

「ダリウス歴七八四年、ゲオルグ一世がブランデン地方を統一してヴァリア王国を建国。七八五年から翌年にかけて、ヴァリア・フェルキア戦争が勃発。勝利したヴァリアはフェルキアより、トイブルクを割譲される。七九二年、ゲオルグ一世はヴァリアをマイセルンとトライゼンの二つに分け、当時王都があつたマイセルンを第一王子に、トライゼンを第二王子に与えた。……トライゼンとマイセルンはもともと兄弟国なんだよね、今はとっても仲が悪いけど」

トーニオさんはそこまで説明して、溜息をつきます。

「フェルキアとは昔頃から仲が悪いし、ラインハルトがあんな場所で油を売ってたことを考え合わせると、トライゼンの前途は多難だ

ねえ」

「ラインハルト王子？　　どうしてです？」

「彼は陸軍情報部の幹部だからさ。暇そうにしてたから、仕事もろくにしていなかったのかなあって」

「軍隊……」

王子の鋼のような腕を思い出し、やはりそうなのかと思いました。でも……情報部？

そのことと、レオンさんやトーニオさんと王子の間にあった険悪な空気は、つながりがあるんでしょうか。

尋ねてみようと思ったけれど、僕の思いは知らず知らずのうちにロザヴェイン姫に向かってしまい、トーニオさんの顔を何度もうかがいました。

「俺が気になるの？　もしかして、俺を好きになりかけてる？」

トーニオさんが意味ありげに微笑するので、僕は慌てて歴史書に視線を落としたのでした。

トーニオさんは時々蕩けるような目で僕を見つめる以外は、これまでのトーニオさんと変りがありません。

今朝の宣戦布告は、レオンさんの婚約によって当面の間、休止することになったのかも知れません。

やはりレオンさんの婚約には何らかの障害があるんだろうと、僕は思いました。

トーニオさんはレオンさんの結婚を応援していて、しばらくの間、騒ぎを起こさないことにしたんだと思います。

口ではどう言っても二人は兄弟で、そして僕には何も話してくれない……。

勉強を終え厨房でおやつの紅茶クッキーを焼いていると、突然玄関が騒がしくなりました。

「やめてください！ 何かの間違いです！」と叫ぶアンナさんの声。

僕は急いで火を止め、玄関に向かいました。玄関の扉が開け放たれてアンナさんが座り込み、横にトーニオさんが難しい顔をして立っています。

「アンナさん！ どうしたんですか」

僕は駆け寄り、アンナさんを抱き起こしました。

「レオン様が……レオン様が……」

気丈なアンナさんが、泣き崩れています。トーニオさんが僕に、一枚の紙切れを渡してくれました。

「これは……？」

「軍からの出頭命令だ。王家への不敬罪の疑いあり。事情聴取のため出頭すべし。……情報部の捺印がある」

「情報部？！ ……ラインハルト王子が？」

「どうかな」

「何かの間違いですよ。あの人たち、由緒正しいリーデンベルク家にずかずかと土足で踏み込んで、レオン様を馬車に押し込むなんて、何様のつもりでしょう！」

アンナさんは、悔しそうに唇を震わせています。

「メイドくん、家から出るんじゃないよ。俺はちょっと情報を仕入れてくるから」

トーニオさんはそう言って急いで着替え、馬に乗って出かけて行きました。

「アンナさん、大丈夫ですか。落ち着くまで横になっていた方がいいですよ」

僕はアンナさんを部屋まで送り、厨房に取って返してハーブティを運びました。

その後一階の広間に座ってトーニオさんとレオンさんが帰って来るのを待っていたけれど、時間が経つのは遅く、不安と恐怖で居ても立ってもいられません。

ランツにある兵士宿舎にいた頃、王宮の怖ろしい話を山ほど聞かされました。

地下にある古い牢獄や拷問部屋。今では使われていないそうだけれど、幽霊が出るとか、実は密かに使われているとか。

軍本部は王宮の近くに建っているけれど、政治犯や王家に関わる犯罪の首謀者は、灯り一つない王宮の地下牢で朽ち果てるとか。

そんな話、聞かなければよかった……。

レオンさんが地下牢に閉じ込められて苦しむ姿が目の前に浮かび、僕は座っていられなくなつてうろつろと歩き回りました。

裏庭に出て厩舎を覗くと、ゲイルお爺さんがお掃除をしています。

「あの……カムタンは……」

僕が話しかけると、ゲイルさんは人のいい笑みを浮かべました。

「ああ、元気ですとも」

「僕、運動させて来ます……」

思わず言ってしまい、すぐにこれだと思いました。カムタンに乗って軍本部まで行き、様子を探ろう。トーニオさんは家にいるようにと言ったけれど、じっと待ってなんかいられない。

「その辺を走らせて、すぐに帰って来ます」

「大丈夫ですかなあ」

心配顔でカムタンに鞍を乗せるゲイルさんに笑顔を向け、僕は久しぶりに馬に乗りました。

夕暮れの街中をカムタンは嬉しそうに駆け出し、でも年寄り馬だからすぐに息を切らせて並足になり、思ったより時間がかかって軍本部に到着しました。

カムタンから降りて、入り口に立つ二人の軍人に「エメル・フォーン・リーデンベルクです」と名乗ったけれど胡散臭そうに見られ、「兄が連行された件で話を伺いに来ました」と言つと「ちよつと待つてろ」と言われました。

奥に引つ込んだ軍人を待っている間、もう一人がじろじろと怪しそくに僕を見ます。

僕ときたら着替えずに来てしまったから、いつものシャツとズボン姿なんです。

使用人に見えるんだろうなあ……と思いながらカムタンの手綱を持って立っていると、引つ込んだ軍人に伴われて若い軍人が現れました。

「一緒に来てください」

彼に連れられて軍本部の中に入り、階段を三階まで上がって突き

当たりの部屋の前で止まります。

彼がドアをノックすると、中から「入れ」と聞き覚えのある声がしました。

「失礼します。リーデンベルク嬢をお連れしました」

若い軍人がさっとドアを開いてそう言い、僕は室内に一步踏み出して、執務室らしい部屋の大きな机の前に座るラインハルト王子に気づいて目を見張りました。

僕の背後でドアは静かに閉まり、案内してくれた若い軍人の足音が遠ざかっていきます。

僕は王子に向き直り、竦みました。だって僕をじっと見る王子の目の、鋭く冷たいことと言ったら！

仕事中の彼は王宮で会った時とは雰囲気異なり、怖いぐらいに威厳があつて、整った顔は冷酷そうです。

「あの……またお目にかかれて光栄です。それで……その……レオンさんはどうになりました？」

「レオンのためにここまで来たのか」

王子は薄く笑いました。

「掛けるといい」

そう言われ、僕は王子の机の前にある三人掛けソファの真ん中に、がちがちに固くなって座りました。

彼は立ち上がり、ゆっくり歩いて一人掛けソファに座ります。

軍服姿の王子は普段なら素敵に見えるのですが、この時はただ怖いばかりでした。

「君は、『メイドくん』と呼ばれているそうだな」

「えっ」

驚く僕に、薄氷のような目が向けられます。

「君が家事を得意としていることや、男の子のように棒を振り回すのが好きらしいことなど、一切を喋ってくれた者がいる」

「どなたなんですか？」

「レオンに反逆の疑いがあると通報した者だ。名前は出せない。通報者は匿名ということになっていてからね」

「通報者がいたから、レオンさんは連行されたんですか？ あなたが……その……」

ラインハルト王子がレオンさんを目のかたきにしていて、反逆の罪をかぶせたんじゃないかなってこと、とても口には出来ません。でも王子は鋭く察したようで、苦笑いを浮かべました。

「通報があれば、どんな小さなことでも調べなければならない。それが我々の仕事でね。レオンの尋問には、新米があたっている。不慣れな尋問者の訓練にレオンが付き合っている、とも言えはいいかな。もつともレオンにはそんなことは、伝えてないがね」

「レオンさんは、どうなるんでしょうか」

彼はゆったりとソファに背をあずけ、足を組みました。

「あいつ次第だな。悪くすれば尋問者の怒りを買って、牢獄に放り込まれるかも知れないが」

「そんな……」

幽霊が出るという牢獄。僕は、思わず体を震わせました。

「ところで、エメル。君のところへは、縁談は来ているのかな」

「……えんだん？」

王子の青い瞳に、きらりと鋭く光が走ったように見えました。

「そう、縁談。結婚の申し込みのことだ。社交界デビューしたということは、結婚出来るということだ。君は、誰かと婚約しているのか？」

「僕はラテン語を知らないし数学は苦手だし、一生懸命に勉強していますけど、フィアに入学したらすぐに落第しそうなんです。縁談どころじゃありません」

彼は、微笑を浮かべました。

「君にふさわしい縁組を、私が用意しよう。君は早々に結婚する。私のために」

「あなたのため……？」

意味が分からなくて、それにレオンさんのことが気になって、僕は話題を戻しました。

「あの、レオンさんのことですけど……大目に見て頂くことは出来るんじゃないか。地下牢に放り込まれるようなことだけは、避けられないでしょうか」

僕は真剣に言ったのに、王子はふっと笑いました。

「話を変えるのか。君の結婚について話し合っているんだぞ。では私も、話の切り口を少し変えよう。私は君が気に入った。君は実に個性的で、面白い。手もとに置いておきたい」

手もとに置く

？

謎めいた微笑を浮かべるラインハルト王子の顔を、僕は見上げました。

## 8 強さの本質 ?

「手もとに置く」という言葉で浮かんだのは、王子の近侍<sup>ゴアレス・ト</sup>として働く僕自身の姿でした。『メイドくん』と呼ばれるより、近侍の方が出世したと言えるでしょう。

「でも僕、紳士の服装のこととか、何も知りません。お役に立てるとは思えないんです」

ラインハルト王子は、怪訝そうな顔をしています。

「近侍<sup>ゴアレス・ト</sup>は、主人の着替えのお世話なんかもするでしょう？」

「近侍……？」

王子は、くつと笑いました。

「私がいつ、君を近侍<sup>ゴアレス・ト</sup>にすると聞いたんだ」

「でも、そばに置くて……つい今しがた……」

「君は実に興味深いから、ペットとして可愛がってみたくなったと言ったんだ」

ペット ? 近侍より格下です。だってペットは人間じゃないもの。僕は、唇を引き結びました。

「僕は犬じゃありません」

「当たり前だ」

王子は僕をまじまじと見てため息をつき、長い足を組み変えています。

そついう姿はとても優雅で、王子に生まれついた人は何をしても

平民とは違っんだなと思いました。

「ひざまずかなければ分らないのかな。宝石のついた指輪を君の指にはめて？」

僕の頭に、ぴんと響くものがありました。宝石  
ミレーヌさん！

あの美しいミレーヌさんはマイセルンの侯爵夫人だと、ゴシップに詳しいアンナさんから聞きました。ラインハルト王子の愛人の一人だそうです。

愛人なんて、嫌です。ささやかではありますが、僕にも夢はあります。

小さな家でいいから家を持ち、優しい夫と可愛い子供たちに囲まれて穏やかに暮らしたい。

王子に対し面と向かって辞退を申し入れたら失礼に当るのではないかとちらつと考えたけれど、その時の僕は必死でした。

決死の覚悟で、冷たい眼をした王子に説明したんです。

「あの……僕、あなたの愛人にはなれません。王子様の愛人ともなれば、それなりの人でなければならぬと思うんです。僕の両親はベネルチア生まれの平民で、僕はいわゆるその辺の馬糞で、特技は値段の安い料理が作れることと掃除が丁寧っていうことぐらいで、とても務まりそうにありません。お願いだから、許してください」

ラインハルト王子は、声を上げて笑いました。

片手で額を覆って笑う彼の表情から冷たさが失せ、心底可笑しそうにしています。

「値段の安い料理と掃除？ 馬糞？ まったく君は 笑わせ

てくれる」

苦しそうに笑う王子に、僕は困惑しました。僕は真剣に話してるのに、何が可笑しいんでしょうか。

あ……馬糞じゃなくて、馬の骨だっけ？ ……恥ずかしい間違いだけど……それにしたって。

ふと、初めてトーニオさんに会った時のことを思い出しました。

真剣な顔で僕を誘惑する素振りを見せた、あの手口。あれが社交界慣れした紳士の常套手段だとしたら……。

（からかわれたんだ……）

ラインハルト王子は僕をからかっているんだと、僕はやっと気づきました。

「……あの……どうか、お気を悪くされずに聞いてください。僕、社交界の雰囲気にも言葉のやり取りにも慣れてないんです。王子様に言葉を掛けられても、他の貴婦人のように上手に返せなくて……ごめんなさい」

「確かに。他の貴婦人なら、さっきの私の話に飛びついただろう。公認の愛妾という立場は、妃などより遥かに権力を持つことができるのだから」

彼はまだ可笑しそうに忍び笑いを洩らし、

「君に頼みがある。私の承諾なく結婚しないように。いいね？」と強い口調で言いました。頼みというより、まるで命令です。

公認の愛妾

僕には永遠に無縁の話です。

僕の結婚にどうして彼の承諾がいるのかなど、腑に落ちない点は

ありましたが、とりあえず僕はうなづく事にしたんです。

王子は立ち上がり、僕の手を取って立たせました。僕の頬を両手で包み、彫刻のように整った顔を傾けて近づけてきます。

僕は驚いて後ずさるうとしたけれど、王子は指先まで鋼のようで、僕の首から上はがっちり押さえ込まれて動きません。

彼の吐息が羽のように僕の唇に触れ、僕はじたばたと暴れ、何とか逃れようとしたんです。

「わ。許してくださいっ。お願いだから。僕、嫌だ。こんなの、嫌だ」

「こんなの　　？」

王子が苦笑を浮かべて手をゆるめた隙に僕は逃げ出し、足がもつれて転んだ時、ドアをノックする音が聞こえました。

王子は「入れ」と応えながら僕の腕をつかんで立たせてくれ、ちようどその時ドアが開いたんです。

「失礼致します」

そう言ったのは年配の軍人で、後ろには驚愕の表情を浮かべたトーニオさんと、剣呑な視線を王子に向けるレオンさんがいました。

ラインハルト王子に、しっかりと抱き寄せられた僕。……………最悪の事態です。

「尋問は終わったのか」

「はっ」

王子の質問に年配の軍人が答え、

「ベルトラム男爵が、これをお持ちになりました……」  
と一枚の紙切れを手渡しました。

ラインハルト王子は目を走らせるなり冷ややかな顔つきに戻り、横目で鋭くトーニオさんを見ます。

「君の交友関係には敬意すら感じるよ、トーニオ」

「恐れ入ります」

トーニオさんは凄味のある視線を王子に向けながら、軽く頭を下げました。

「レオンさん！」

僕は王子の腕から逃れ、レオンさんのそばに走り寄りました。

「無事だったんですね。良かった」

「家にいるようにって言ったのに」

珍しくトーニオさんが怒っています。

「ごめんなさい。でもレオンさんが心配で、家でじっとしてるなんて出来なかったんです」

レオンさんは何も言わず、僕を自分の背後に隠してしまいました。ラインハルト王子を睨む目つきが、ぞっとするほど陰悪です。

「聞かせて頂きたい。あなたが謀った事なのか？」

レオンさんが低い恫喝するような声音で王子に尋ね、  
「少し違う」

とトーニオさんが間に割って入りました。

「通報者はフ란ツ・ビヨルド。アーレクの子分だ。昨夜、王宮の温室に隠れて俺たちのやり取りを聞いていたんだ。レオンの言動を、反逆罪か不敬罪に当るんじゃないかと当局に通報した。裏には当然アーレクがいるだろう。もっとも」

トーニオさんも、陰悪な視線をラインハルト王子に向けます。

「くだらない言いがかりなんだから、通報を無視することも出来た

と思うが」

「国民の通報を無視するなど、あり得ん。我々は真摯に国家を守っている」

ラインハルト王子は冷酷な表情を浮かべ、レオンさんとトーニオさんに威圧するような視線を向けています。

「呼び出されたくなければ、言動に気をつけることだ。今回は大目に見るが、次は手厳しく調べるぞ」

「貴様……」

齒を噛み締めるレオンさん。

ラインハルト王子にも非はあるのに、と僕は思いました。

王宮の温室で王子が僕を早く解放してくれていたなら、こんな事にはならなかったのに……。

一番大きな非は、僕にあるんだけど……。

「もう、よそう。エメルもいるんだ。帰ろう」

トーニオさんがなだめるようにレオンさんの肩に手を置き、レオンさんは奥歯を噛み締めながら、僕の背中をそつと押して部屋から出ました。

振り返るとラインハルト王子の冷めた目が僕に向けられていて、僕はやっぱり竦みました。

レオンさんも怖いけれど、権力を持つ王子は別の意味で怖い。

「あの……レオンさん。さっきの事ですけど、僕、転んでしまって。王子は僕を助け起こしてくれただけなんです。……どうか誤解だけはいらないで」

きちんと釈明しなければと思ったんですが、僕の声はか細くなっていきました。レオンさんの怒った顔を見ると、僕に対して怒って

るんじゃないと分かってはいても、心が萎んでしまいます。

「お前は何一つ悪くない。俺のせいで、また嫌な思いをさせてしまったな。すまない」

レオンさんは左腕を大きく広げて僕の肩にふわりと置き、僕を抱き寄せました。

「僕なら大丈夫ですよ」

レオンさんの暖かい左腕にくるまれて、僕は軍本部の廊下を出口に向かって歩きました。

「ところで、さっきのあの紙きれは何だったんだ？」

レオンさんの質問に、僕の隣を歩いていたトーニオさんがふふんと笑います。

「情報部を統括する陸軍省のお偉方からの、出頭命令書。レオンを何故尋問するのか、陸軍省に出向いて詳しく説明しろって内容。ラインハルトは明日にも出頭して、こう言うんだろ。国民からの通報によりやむなく取り調べましたが、疑うべき点が見つかりませんでしたので釈放しました。さすがの王子も軍の厳しい上下関係の中では、弱冠二十三歳の大尉に過ぎないってことさ」

「お前、軍のお偉方といつ知り合いになっただ」

「全然、知り合いじゃないよ。さるご婦人に仲介の労をとって貰ったんだ。そのご婦人に礼を言いに行かなきゃならないから、俺はここで失礼するよ」

さるご婦人      トーニオさんの『悪い女性』でしょうか。でも今回ばかりは、『悪い』女性とは言えないような気がしました。

「それじゃ行つて来るね、メイドくん。弟のため、ご婦人に体を買った俺を憐れんでくれ。ああ、君が相手だったらどんなに嬉しいか」  
「早く行けよ……」

レオンさんが呆れた口調で言い、トーニオさんは僕に哀しそうな顔を見せ、でも青い目は面白そうに僕の反応を観察していて、そうして軍から借りた馬にひらりとまたがり駆けて行きました。

体を買った……、つまり……？ トーニオさんのあられもない姿が脳裏に浮かんでしまい、両手を振り回してかき消しました。

レオンさんと僕はカムタンに乗り、帰宅の途につきました。  
屋敷に着くと元気を取り戻したアンナさんが支度をしてくれて、  
レオンさんと僕は遅い夕食をとる事になったんです。

僕は、勇気を振り絞って尋ねてみました。

「あの……レオンさん。ラインハルト王子と昔、何かあったんですか？　ずっと以前から仲が良くなかったんじゃないかって思えて……」

レオンさんの顔色がさつと変わり、僕はひどく不味いことを聞いてしまったんだと悟りました。レオンさんが怒ってしまったと思うと、我知らず唇がわなわな震え、僕は目を見開いてレオンさんを見つめました。

ふいにレオンさんが笑い出し、「そんな顔をするな、エメ」と言うんです。

「そんな顔って、どんな顔ですか」

「引っぱたかれた子犬みたいな顔だ」

「は？」

引っぱたかれた子犬を観察したことがないのでよく分からないのですが、可哀相な顔もしくは驚いたような顔でしょうか。

「すみません。……聞いてはいけないことを聞いてしまったんですね」

しょんぼりする僕を見て、レオンさんは首を振りました。

「そんなことはない。お前には知る資格がある。家族なんだから。……仲が悪いというわけじゃないよ。軍と男爵家は仲良しさ」

平静を装っているけれど、口調は皮肉めいています。

「5年前、父にスパイ容疑がかけられたんだ」

「スパイ！」

僕は思わず声を出してしまい、慌てて口を押さえました。

「まさか……どうして」

「長年フェルキアに住んでいたからさ。結論から言うとフェルキアのスパイだったのは国王陛下の主治医で、父は潔白だった。情報部は国王陛下の主治医が怪しいとにらんでいたが、疑われていると知ったら相手は逃げてしまう。だから軍の機密という名の下に遺族には何の説明もなく、事故で死んで間もない父に嫌疑をかけ、皆の視線を父に向けさせている間に、本ボシを探ったというわけだ。証拠が出て来て主治医が逮捕され、父の潔白は明らかになったが、俺たちの気持ちは収まらない。ディリア母上も俺達も、父の潔白を証明するために奔走していたんだから。だが情報部の陣頭指揮をとっていたのがラインハルト王子だったから、ディリア母上もあからさまな非難は出来なかったんだよ。俺はそれが歯がゆくて、ラインハルトを殴ってしまった。当時俺は12歳だったし、母上が手を尽くしてくれた事もあって停学だけですんだが、王室不敬罪で収監される場所だった」

レオンさんの黒い瞳に怒りが走ります。

「俺が短気だったから、母上や男爵家に迷惑をかけてしまった。それは申し訳なかったと思っているよ。それでも目的のために平然と死者に汚名をきせ、利用したラインハルトのやり口は許せない。フエアにいた頃から、王子はいつもそんな風だった。向こうも俺を嫌っているようだが、俺も奴は好きになれない」

怒り。 。 当時のレオンさんの怒りが伝わってくるようです。

「力が欲しいと思ったよ。家族や家族の名誉を守る力が。だがその頃の俺にできることと言ったら、拳闘ジムに通うぐらいのものだった」

拳闘ジムは元軍人や元傭兵などが経営する、民間の小さな施設です。パパもマイセルンにいた頃、短期契約で雇われて護身術を学びたい人達に教えたことがあります。

「軍人になろうという気持ちもあった。爵位のない俺が力を得るためには、軍人になるのが最も近道に思えてね。だがそのうち……」  
レオンさんは、深く黒い瞳をふっと緩めました。

「一人の力なんて、たかが知れていると思うようになった。一人では無理なことでも、大勢が集まれば成し遂げられる。フレデリクと出会ったことが大きかったな。フレデリクは愚連隊と呼ばれようとも一大チームを作り上げて、フィアの名誉を守ったんだから」

「立派な人なんですな、フレデリクさんって」

「素行面で問題はあるけどな、俺と同じぐらいに。フレデリクが留学することになって、後をまかせると言われた時、俺は辞退したん

だ。俺には彼ほどの人望はない。だが最も喧嘩が強いからと言われて、説得されてしまった」

レオンさんは、苦笑を浮かべています。

「心配していた通り、俺の代になっていざこざが増えた。チームを去る奴、裏切る奴、アーレクみたいな奴も現れて。俺には、拳闘を続けて力で君臨することしか出来なかった。他に方法があるんじゃないかと迷いながら……。そうしているうちに、気付いたことがある」

レオンさんは、僕を見つめました。

「5年前に比べ俺は強くなったと思っていたのに、間違いだった。

強くなったのは体だけで、中身は変わっていない。そのせいでお前に泣かれた後、俺は腑抜けになってしまった」

「僕……？」

拳闘倶楽部の帰り道でのことを言っているのかなと、僕は思いました。

「事あることにお前の泣き顔が浮かんで、拳闘をやるうという気にならないんだ。お前のせいじゃないよ。お前は、最強の武器を持っているというだけのことだ」

「最強の武器……泣くことが？」

「お前自身が、最強なのかも知れないぞ」

レオンさんが微笑んだから、僕の顔が熱くなりました。耳が熱いことから考えて、きっと耳まで赤くなってるに違いない。

僕が強い……？ 僕は、弱虫です。でもレオンさんは、僕が最強だと言ってくれているし……。困惑して、僕は首を傾げました。

「俺は今、岐路に立っている。腕力ではなく、フレデリクが残した  
ものやお前を守る別の方法を考えなくてはならない。もしかしたら、  
これが本当の強さにつながる道なのかもしれないと思っているよ。  
それに気づかせてくれたお前に、俺は感謝している」

本当の強さって何なのでしょう。きっと腕ではなく心の強さを  
言ってるのだろと思いますが、そのことに僕がどう関わるのでし  
ょうか。

レオンさんの話の意味はよく分からないけれど、僕の胸に希望と  
期待が芽ばえました。

僕は、勢い込んでレオンさんに尋ねたんです。

「それで、レオンさん、拳闘をやめるんですか？」

レオンさんは、口角を上げました。

「今すぐというわけには、いかないけど。力でねじ伏せるやり方  
を続けていたら、俺自身が傷つく。俺が怪我をしたら、お前を守れ  
なくなる」

そして、最も大切な人も。

ロザヴェイン姫            その名を今だけは忘れようと、僕は気持  
ちを切り替えました。

「……5年前というと、ラインハルト王子はお幾つだったんですか  
？」

「フィアの最終学年だったから、18かな」

「フィアの学生なのに、情報部の陣頭指揮……」

「ゲオルグ皇太子殿下の食事に毒を盛られたんだ。ラインハルトは

ああいう奴だが、自分の家族だけは大切にしている。国王陛下に願  
い出て、犯人捜しの指揮をとることになった。それがきっかけで大  
学を卒業後、彼は情報部に入ったんだよ」

「そうだったんですか……。レオンさんは、立派だと思います。僕  
ならきつと泣くことしか出来ないと思うんですけど、レオンさんは  
立ち向かったんですね。お父様の死にも、スパイの嫌疑にも、フィ  
アの先輩である王子にも」

「王子を殴って停学食らうことが、立ち向かうことになるならな」

レオンさんは柔らかく笑い、視線を窓辺に向けました。満月が煌  
々と輝き、窓の端っこに虹に似た色彩が見えます。

何だろう。僕は立ち上がり、窓辺に立って息を呑みまし  
た。

「レオンさん！ 見てください、虹が出ていますよ。夜なのに……」

黒々とした庭木の上にぼんやりと、半円形の虹がかかっています。  
虹のまわりに散りばめられた小さな星々、上空で白く輝く満月

。神秘的な光景に、僕はほうつと嘆息を洩らしました。

「月虹だ。月虹を見た者は幸せになれると言う。庭のベンチに座っ  
て待っていてくれないか。すぐに行くから」

レオンさんはそう言い、ダイニングから出て行ってしまいました。  
裏庭のベンチに腰かけて月虹を見てみると、レオンさんが見覚え  
のあるオルゴールを抱えて走って来ます。

レオンさんと二人でダンスの練習をした時、使ったオルゴールで  
す。

優しいワルツが流れ、レオンさんが囁きました。

「社交界デビュー、おめでとう。月虹の下でお祝いだ。君の幸福を願って」

そうして胸に手をあて、レディにするみたいに深々とお辞儀をするんです。

「私と踊って頂けませんか、姫君」

僕はドレスを着ていないし、髪はきつと飛び跳ねてると思ったけど、お姫様になった気分でお辞儀を返しました。

月と星と月虹に見守られて、僕たちはワルツを踊りました。

レオンさんの優しい瞳は僕だけを見つめているけれど、それは今だけで、もうすぐ別の人と結婚してしまうんだと思うと涙ぐみそうになります。

どんな方ですかと聞きたいのに、涙が止まらなくなりそうで、聞くことができません。

今はただ、レオンさんの幸せを祈りながら踊ろうと僕は思いました。

今夜のことを、僕は一生忘れません。レオンさんが別の女性と、遠くに行ってしまった。

一生の思い出ができた僕は、幸せ者です。

何度も瞬きして涙を押しとどめ、僕はレオンさんに精一杯の笑顔を見せました。

## 9 心を拳にのせて

「パパは、こつちと結婚することにしたよ」

「えっ!!」

こつちつて……。

パパの隣に立っているのは人の背丈ほどの、ふわふわもふもふと柔らかそうなオオカミのぬいぐるみです。

耳に赤いリボンを付けているところを見ると、女性なんでしょう。

オオカミ同士、お似合いに見えたりもするけど……。

僕のママがぬいぐるみ……そんな。

デイリアさんはトーニオさんの肩にもたれ、泣きながら屋敷に入って行きました。

レオンさんはすらりと背の高い女性の腰に手を回したまま、後ろ手に扉をぴしゃりと閉めてしまったんです。

シルエットだけしか見えないけれど、美しい女性のようにです。あの人がロザヴェイン姫なんだ……。

でも、レオンさん。僕はここにいます。レオンさん……。

「エメル、行くぞ」

パパに言われ、僕は少ない荷物を持って、暗い街中をとぼとぼと歩きました。

とうとうお屋敷を追い出されてしまったんです。

ふと気がつくとかパパの姿がありません。女の人と、どこかに行ってしまっただ……。

僕は、一人になりました。リーデンベルク家にも戻れず、パパにも見捨てられて、一人ぼっち……。

僕は泣きました。ぽろぽろ涙をこぼしていると、天使の声がしたんです。

「全部、夢だよ。夢なんだよ」

そう、夢だったんです。ママができた夢。大きなお屋敷のお嬢様になった夢。トーニオさんにかかわれた夢。レオンさんに好きだと言って貰えた夢。全部、夢だった……。

「大丈夫。俺がついてるから。泣かないで、大丈夫だから」

天使は眩しくて姿がはつきりと見えないけれど、僕は無我夢中ですがりました。

天使の首に両腕を巻きつけ、離さないでとばかりにひつしと抱きついて泣く僕。

でもこの天使、様子が変です。僕の耳を舐めたり、噛んだり、キスしたり。

天使の唇が耳から首筋に下りて、僕の鎖骨をたどり、ますます変です。

うつすら目を開けると朝の光が照りつけて、重いものが僕に覆いかぶさっています。

「嬉しいよ、メイドくん。君の方から抱きついてくれるなんて。やっと愛し合えるんだね」

そう言いながら僕のパジャマのボタンに指を掛けているのは……  
トーニオさん？

何度も瞬きました。何度も確かめました。でも、間違いない。  
トーニオさんが僕の上に覆いかぶさって僕の首筋にキスしながら  
パジャマのボタンをはずそうとしていて、僕はトーニオさんの首に  
両手を回して抱きついてる……。

「ひいつ、ひい　　っ、ひい　　つつっ！」

僕は両手を脇にぴたりと付け、イカのように両手両足をくねらせて、横に移動しました。トーニオさんの体の下からやっこの思いで這い出し、そしてベッドの端から落ちました。

床に座り、何か言わなければと思うのに口はわなわな震えぱくぱく開いたり閉じたりするばかりで、言葉が出ません。

「ま、まち、まちがい……」

ようやく言葉らしい言葉を発した僕を、トーニオさんはベッドに横たわって肘枕をし、悩ましく微笑みながら見下ろしています。

「間違い？　ひどいなあ。一晩中肉体労働にいそしんで疲れた体を君に慰めてもらおうと合鍵を使って部屋に入ったら、君が泣いてたの。大丈夫だよ夢だよってなだめてあげたら、君の方から抱きついて来たんだよ。ああ、そうか。俺を気遣ってくれてるんだね。俺って回復が早いから、今すぐでもできる。遠慮しないで」

何ができるんですか？　肉体労働って道路工事じゃないですよ？　回復って……？　想像が卑猥な方向に向かう僕の頭は、とうと

うおかしくなってしまったに違いない。

「…………遠慮します」

僕が言つとトーニオさんの顔が突然真顔になり、ベッドをおりて僕のそばでしゃがみ、「もしかして、例の悪夢を見たの?」と聞くんです。

「例の……? あ、違います。全然違う夢です」

「ふうん。違う夢ね」

トーニオさんは僕を軽々と抱き上げ、立ち上がりました。廊下を駆けて来る足音が聞こえます。…………レオンさん!

僕は、焦りました。このままでは三日続けてレオンさんに、変な場面ばかりを見られてしまうことになる。

「わ。おろしてください。僕、もう…………」

「いい加減にしておけよ、トーニオ」

間に合いませんでした。ドアが開きレオンさんが入って来て、剣呑な表情で腕を組み、トーニオさんを睨んでいます。

トーニオさんに抱き上げられ、トーニオさんの腕に包まれた僕。

…………最悪です。

「やっぱり来たか」

トーニオさんはにやりと笑い、僕を抱いたままレオンさんに歩み寄りました。

「あの、僕、大丈夫ですから、下ろしてください。あ、レオンさん。

パパについて、悪い夢を見たんです。もうすぐパパが帰ってくるので、それで。トーニオさんは慰めてくれただけなんです。それだけなんです」

僕は下りようとしたけれど、僕を抱きしめるトーニオさんの腕の力が強まっただけで、じたばたと暴れているうちに僕の胸に密着したトーニオさんの胸から体温が伝わってきて、僕の体温が一気に上昇したような気がしました。

ふと顔を上げると、二人はこれまでにないくらい凶猛な顔つきで睨み合っています。

二匹の獣が闘いを前にして間合いを詰めているような、今にも喰い合いが始まりそうな、そんな獰猛な空気があって僕は怖くなりました。

レオンさんが来ると分かっていて、トーニオさんはどうして僕を抱き上げたりするのでしょうか。

レオンさんは屋敷内での不道德を許さない人で、その事はトーニオさんが一番よく知ってるはずなんです。

これではレオンさんに喧嘩を売っているのも同然です。

不意にトーニオさんの腕がゆるみ、僕はレオンさんに差し出されました。レオンさんはトーニオさんに刺すような視線を向けたまま、奥歯をぎりっと噛んだような表情で、僕を受け取りました。

僕は荷物じゃない。そう思ったけれど二人の間に漂う危険な気配が怖くて、口には出せませんでした。

「それでは、俺は退散するよ」

トーニオさんはそう言って笑みを浮かべたけれど、とても笑みと

は言えない、獣が口角を上げて牙を見せたような表情でした。

トーニオさんは部屋を出て行き、僕はレオンさんに抱き上げられたまま、ごくりと唾を呑み込んだんです。

だって、レオンさんの顔つきといったら　　。

腕の中に僕がいることも忘れたみたいに目をあらぬ方向に向け

その目つきが険悪で、底知れない怒りと獣性を含み持っているみたいで、僕はレオンさんが今何を考えているのかは分からないけれど、きつと危険なことを考えているに違いないと全身を竦ませました。

レオンさんはやっと僕の存在に気づいたみたいにはっとして、僕を少しの間見つめた後、そっとベッドの上に座らせたんです。

「どんな夢を見たんだ？」

僕の前に座り、レオンさんは僕の顔をのぞき込みました。

「……パパと僕がお屋敷を追い出される夢……です」

「ああ……」

それだけで、レオンさんは納得したようでした。

「俺を信じるよ、エメ。何があろうとも、お前はここに残る。そう言っただろ？」

「……はい」

夢の中のレオンさんは僕の呼びかけに応えてはくれなかったけれど……。

現実とは違つと頭では分かっているけど、やっぱり不安がむくむくと湧き上がって来ます。

パパの中には虫がいるんだもん……。

そんな恥ずかしい話をレオンさんに話せるわけもなく、僕はレオンさんに笑顔向け、「朝食はワッフルです」と言いつつ立ち上がりました。

「ジャムと蜂蜜は必需品だよ」

レオンさんは意外にも甘党なんだなと思い、僕は「はい」と一生懸命笑顔を作ってうなずきました。

トリーニオさんは朝食の席には降りて来ず、レオンさんと二人で朝食をすませ、僕は勉強の前にアンナさんのお手伝いをすることにしました。

その日は、お洗濯日和でした。

ランドリー・メイドが来なくなりアンナさんは不満顔だったけれど、僕は抜けるような夏の青空を見上げながら、気持ちよく洗濯物を干していたんです。

大きなバケツの中のレオンさんのシャツに手を伸ばそうと振り返った時、レオンさん本人が後ろに立っていて、目を丸めた僕の前でレオンさんは洗濯物を干し始めました。

「自分の物くらいは、干さないとな」

レオンさんは不慣れで不器用な手つきでワイシャツを干し、僕は思わず笑ってしまいました。

トーニオさんも姿を現して、

「洗濯物を干してくださるんですか？」

と尋ねると、

「いや。ちよつと様子を見に來ただけだから」

と立ち去ろうとし、それを小耳に挟んだアンナさんが離れた干し場から歩み寄つて來ました

怒りの形相で！

「いい加減になさつてくださいまし！」

僕が飛び上がるほどの怒声でした。アンナさんは普段は温厚で、怒ることなんてないんです。

「奥様が戻られるまで、あと3日しかないんですよ。どうなさるおつもりですか。わたくし、嘘の報告は致しませんよ。ええ、ありのままをご報告申し上げますとも。お二人が言いつけに逆らい、宿題を何ひとつなさらなかったと申し上げます。いいんですか、それで！」

わけの分からない僕の前で、レオンさんとトーニオさんは困つたように顔を見合わせ、意味のわからない咳払いをしています。

「あの、宿題つて……？」

僕が尋ねると二人の咳払いはいまますます大きくなり、何だか僕に聞かせたくない話のようです。

アンナさんは二人を睨みつけ、視線を僕に向けました。

「奥様がメイド全員と執事までも別荘にお連れになつたのには、理由があつたんでございます」

「あ、それについては、俺たちにも言い分があつて」

「聞きたくございません。どうせ愚にもつかない言い訳をなさるおつもりでしょう」

アンナさんが、トーニオさんを遮ります。

「あの、理由って？」

僕は尋ねました。

今の今まで使用人を皆連れて行ってしまい、後のことをお年寄りのアンナさん一人に押し付けたデイリアさんは、あんまりなんじゃないかと思っていたんです。

「お二人に使用人の仕事全般を体験してもらおうという、奥様の計らいでございます。これまでだって何度も機会があったんですが、そのたびにお二人そろって言い訳をなさり、理由をこじつけてはお逃げになったものですから、今回は強行手段に出たんです。可愛らしい妹様と年寄りしかいないとなれば、多少は手伝いをするだろうと奥様はお考えになったのに、それなのにお二人ときたら！」

「えっ！　じゃ、家事をするのはアンナさんと僕ってことじゃなくて、全員でやれっていうことだったんですか？」

「ちょっと待つて。それは母上が一方的に押し付けただけであって、俺たちは承知していない」

トーニオさんは困惑したように、さらさらの金髪をかき上げています。

「どうして承知しないんですか？　お母様の言いつけなのに……」  
「子供じゃないんだから。俺たちは自発的に手伝ってるよ。俺は馬の世話をしている」

レオンさんの言い分に、僕の心の中で小さな怒りの炎が芽生ええました。

僕が知っている限り、レオンさんがしているのは馬の世話だけで、トーニオさんは時々朝食を作ってくれるだけです。

庭掃除、屋敷の床磨き、窓拭き、洗濯、その他諸々の細かい家事は僕が勉強の合間をぬって手伝っているにしろ、大半はアンナさんの肩にかかっているんです。

「奥様だって、何の理由もなく使用人の仕事をしろとおっしゃってるんじゃないんです。一つ社会勉強のため。二つご先祖様のご苦勞を偲ぶため」

「ご先祖様って、使用人だったんですか？」

僕の質問に、レオンさんが答えました。

「リーデンベルク家の始祖は、トライゼン王家の下男だったんだ」

「それを言うなら、その頃の王家は山賊だったんだから。我が家の始祖は、山賊の下男だった。偲ぶほどの先祖とも思えないよね」

トーニオさんが付け加えます。

「知恵と情けある、文武に秀でた下男だったんでございます。だからこそトライゼンが国家として成り立った時、爵位を頂いたんじゃないかもしれませんか。武勲もございましたね。その素晴らしいご先祖様にあやかるとともに、多少なりともご先祖様の仕事を体験して欲しいというのが、奥様のお気持ちなんですよ。それに下々の気持を知ること、上に立つ者にとって必要なことなんじゃないじゃないですか？」

「しかし、突然言われても……」

「突然？ もう何年も前から言われておられますよね？」

アンナさんが、レオンさんを睨みます。

「俺、朝帰りだから。睡眠不足で……」

「それが何か？」

アンナさんは、トーニオさんに射るような視線を向けました。

「アンナさんは腰が悪いのに、お掃除をしたり洗濯物を干したりしてたのに、それを見て何とも思わなかったんですか？」

僕は静かに言っただけで、心の中では怒りの炎がちらちらと燃え始めていたんです。

何もかもアンナさん一人に押しつけて、自分は楽をしようなんて、ひど過ぎます。

「手伝ってあげようって思うのが、人の心なんじゃないんですか？  
助けようって気持ち、全然ないんですか？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「だったら、手伝ってくださいっ！！　ごちゃごちゃ言い訳してないでっ！！！！」

自分のどこにそんな勇気があったのか、気がついたら僕は怒鳴ってしまっていたんです。

怒鳴ってしまった後で、すぐに後悔しました。レオンさんとトーニオさんが怒ったら、どうしよう……。

でも二人は驚いたように僕を見て、

「わ、わかったよ」

としぶしぶといった様子ではありましたが、洗濯物を干してくれました。

その後、

「夏休みの宿題とはいえ、今となつてはたった2日間だけのことでございませうから、笑顔で働いてくださいましね」というアンナさんの言葉に顔を引きつらせ、二人は庭掃除用の箒と窓拭き用の雑巾を受け取っていました。

午後、僕は納屋の片づけをしていました。

工具やら古い家具やらを隅にやり、箒で埃をかき出しているところに、トーニオさんがやって来たんです。

カチリと扉の鍵をかける音がして、不審に思った僕の前に立つトーニオさんは、不穏な微笑を浮かべていました。

「ごめんね、メイドくん」

そう言つて片手で僕の顔を包み、もう一方の手で何かを目の前にぶら下げます。

薄ピンク色でうねうねと丸まったそれは      ミミズ！！！

「きゃああああああ      つつっ！！！！！」

僕は、叫びました。ミミズは大の苦手です。

トーニオさんは僕が逃げないよう僕の腰を抱き寄せて、鼻の上にミミズを乗せました。

「やめてっつ！！      どうしてこんなことするのっ」

僕が庭掃除をしていた時ミミズを見て叫んでいたのを、トーニオさんは知っているんです。

でも、何故こんなことをするの？

「いやだあああ　　っつ。やめてえっ！　きゃあ　　っつ！！」  
「どうしたんだっ！　何やってるんだっ！」

鍵のかかった納屋の扉を叩く音がして、レオンさんの声が聞こえました。

トーニオさんはやりと笑い、僕を床に押し倒したんです。

「何するのっ！」

僕は、はっと気付きました。トーニオさんがまた、レオンさんに喧嘩を売ってる。

「エメル！　中にいるのか？！」

レオンさんは扉に体当たりし、鍵を壊そうとしています。

トーニオさんは僕を押さえ込み、顔の上でミミズを揺らして、先っぽを僕の脛や鼻先にぴたぴたと押しつけます。

僕はトーニオさんが何かを企んでいると思い、叫び声を吞み込みました。

「大丈夫なのか。おい、返事をしろ！！！」

トーニオさんは僕の口を押さえ、ミミズをぽいと投げ捨てました。何とかしなければと思った時、壊された扉ごとレオンさんが転がり込んで来たんです。

僕にのしかかるトーニオさんを見て、レオンさんの顔色が変わりました。

「トーニオ！　お前　　！！！」

いきなりトーニオさんに飛びかかり胸ぐらをつかんで拳を振ったけれど、トーニオさんが頭を下げたから拳は宙を切りました。

「腕が落ちたんじゃないか、レオン」

「ふざけるなっ！」

次の拳も難なくかわし、トーニオさんがレオンさんを殴り倒しました。背中から床に吹っ飛ぶレオンさん。

強い拳闘士であるはずのレオンさんを殴り倒すトーニオさんって。

もしかしたらトーニオさんは、もの凄く喧嘩が強いのかもしいい。

何とかして止めないと。トーニオさんはレオンさんを怒らせたいだけなんだから。そう思い立ち上がりかけた僕を、レオンさんが制します。

「そこにいろ、エメ。お前には聞く権利がある。話せよ、トーニオ。お前がエメルを使って企んだことを。どうせ今回のことだって、俺と殴り合うための手段なんだろう」

レオンさんには分かっているんです。レオンさんを怒らせるために、トーニオさんが僕を利用しているってことが。

僕の部屋に来て僕をからかったのも、僕に迫ってレオンさんに見せつけたのも、すべてレオンさんを怒らせて殴り合いの喧嘩に持ち込むためだった……。

でも、何のために殴り合うの……？

トーニオさんは、ふんと鼻で笑いました。

「女に惚れると男は弱くなる。何故だか分かるか？ 守りに入るか

らさ。怪我をするまい、自分以外に守らなきゃならないものがある  
と思つたら、まともには闘えない。今のおまえに、拳闘の英雄だっ  
た頃の面影はないな」

「黙れ！」

レオンさんの拳がトーニオさんのおなかにめり込み、さらにトー  
ニオさんの顎を捕えます。

今度はトーニオさんが床に倒れ込み、僕は両手で口を押さえて叫  
び声を吞み込みました。

どうして……どうして殴り合うの？ こんなことする必要、どこ  
にもないのに。

トーニオさんは床に伏すや起き上がり、レオンさんに飛びかかっ  
て、二人は床をごろごろと転がっていきます。

トーニオさんが上になり、レオンさんの顔面を殴りました。

「突然俺との競り合いをやめた理由を聞かせてもらおうか。それま  
で競争を楽しんでたくせに。何の脈絡もなく、突然やめた理由は何  
だ？」

「大人になつたんだよ」

今度はレオンさんが上になり、トーニオさんの顔を殴ります。

競り合い……。アンナさんが言っていた、昔二人の間で行われて  
いたという競争のことでしょうか。

学校の成績や女の子から貰ったラブレターの数や、何でも競争の  
対象になっていたとか。

アンナさんは悪いお仲間と悪い女性のお蔭で競争することがなく  
なつたと言っていたけれど、レオンさんが意図的に競争をやめたん  
でしょうか。……大人になつたから？

そんなことより、何とか二人を止めなくては。このままじゃ二人は死んでしまう。そんな思いで、僕は二人に近づこうとしました。

殴り合いを見るのは初めてじゃないけれど、僕にとって大切な二人が殴り合う様は怖ろしく、肉や骨のぶつかる音は生々しく、僕は怖くて腰が抜けてしまい、這って二人に近づこうとしたけれど、足が竦んで動けなくなりました。

「そんな嘘が通じると思っているなら、お前は本物の馬鹿だ。愚連隊みたいないくらない連中とつき合って、忙しい振りをして、そうまでして俺を避ける理由は何だ？」

トーニオさんが下からレオンさんの頬を殴りつけるのと同時に、レオンさんがトーニオさんのみぞおちを殴り、トーニオさんはげほっと吐き、レオンさんは大きくのけ反ってトーニオさんの隣に仰向けになって倒れました。

二人とも荒い息をつき、トーニオさんはおなかを押さえて苦しそうで、レオンさんは切った唇から流れる血を拭いています。

「くそっ 母上に頼まれたんだ。お前と喧嘩するのはやめてくれ、競うのも避けてくれってな」

レオンさんの口調は苦々しく、まるで不味いものを吐き捨てるかのようにです。

「何だと。 畜生、あの女！」

「そんな言い方はするなっ」

「どんな言い方でも足りない。あの女が俺に何をしたか、お前は知らないんだ」

「お前を置いてアーデンに行つたんだろ。聞いてるよ」

「ああ、そうだ。俺を地獄へ置き去りにしやがった。親父の奴が俺の顔を見たくないと言つたから、部屋に閉じ込められたんだ。

5年間も！ 話し相手は無口な家庭教師だけだった。使用人の一人がいい奴で、アーデンに手紙を送つたが返事が来ないと言つていたよ。あの女、俺の境遇を知っていながら知らん顔を決め込んだんだ、我が身可愛さに！」

「初めて聞いたぞ、そんな話」

「ふん」

トーニオさんは、そつぽを向きました。

両親に見捨てられた子供

それがトーニオさんの正体です。

部屋からやつと出られたと思つたら両親が離婚して、ディリアさんは領地を回つてトーニオさんは残されて、部屋で一人ぼっちだったのが広い邸宅で一人ぼっちに変わったただけだった。

ディリアさんが再婚することになって、再婚相手には父親の愛情を一身に受けて育つた同い年の少年がいて、その時のトーニオさんの気持ちはどんなだったでしょうか……。

憎しみ、嫉妬

そんな言葉が浮かんで来ます。

相手の少年を殴りつけたり、大切にしているぬいぐるみの首を引きちぎったり。

そつする事でしか自分を表現できなかったトーニオさんは、哀しい人です。

トーニオさんは体を引きずるようにして立ち上がり、レオンさんの胸ぐらをつかみました。

「母親から説教食らつたぐらいで性根を改めるタマじゃないだろ、

レオン。本当の理由を言えよ」

「今、言っただろう」

容赦なくトーニオさんの鉄拳が飛び、レオンさんは顔をのけ反らせて倒れました。

初めて出会った頃から、この二人はこうやって殴り合っていたんでしょうか。

僕にはトーニオさんが、殴り合うことでしか心の叫びを伝えられない子供に見えました。

トーニオさんが言葉で伝えられるのは、冗談や美辞麗句だけなのかも知れない。

トーニオさんという人は、本心を言葉では伝えられない人なんだ。

しかもトーニオさんの心の叫びを受け止められるのは、レオンさんだけなのかも知れない。

「くそ」

レオンさんは立ち上がり、トーニオさんに飛びかかりました。二人は埃まみれになって、取っ組み合っています。

僕は泣きそうになって口に拳を押し込んで嗚咽を堪え、二人に近づこうと必死に這って進みました。

「ちょうど1年前だ。競争以外にも大切なことがある、それをお前に知ってもらいたいと母上が俺に言っただ、お前にではなく、俺にだ。つまり俺に手を引け、お前に喧嘩を売られても我慢しろと言いたかったんだろう」

レオンさんの拳がトーニオさんを襲います。

「母上にとっては、お前が一番大事なんだ。有難いと思えよ」

「馬鹿言え。あの女は男狂いだ。俺のことなど、齒牙にもかかけちゃいない」

「そう思ってるなら、お前は愚か者だぞ。お前にとってどうであれ、俺にとって母親はあの人しかない。その母親から、俺よりお前の方が大事だと言われたようなものなんだぞ。分かってはいたが、最初から実の息子の方が大事だということは薄々感じてはいたが、いざはつきり思い知らされると」

立ち上がったトーニオさんをレオンさんが再び殴り、同時にトーニオさんの拳がレオンさんのみぞおちにめり込んで、二人はもつれ合うように倒れ込みました。

「同じ思いを、俺はお前の父親に対して感じていたよ。父上が好きだったか、あの人にとってはお前の方が大事だったんだ」

「お前には、実の父親がいるだろう」

「あんなクソ野郎！」

「やめろつ。お前の両親は生きている。俺は永遠に両親に会えない。お前が実の親を悪く言ったびに、俺がどんな気持ちになると思うんだ」

二人は息を荒げ、並んで横たわっています。しばしの沈黙の後、トーニオさんが言いました。

「お前、もしかして、俺を羨んでるのか？」

レオンさんは、片腕で顔を覆いました。

「……初めてお前に会った時から気づいていたよ。俺は……お前に嫉妬してる。両親がいて爵位も財産もあるお前が妬ましい。俺は自

分の力で生きて行こうと思っているが、男爵のお前と平民の俺とはスタート地点が違う。そう考えてしまう自分が嫌でたまらない」

嫉妬……。トーニオさんだけでなく、レオンさんにも心の闇があるんです。

二人が出会った時、トーニオさんは人と話すという手段を知らない子供で、レオンさんは口数の少ない少年だった。

二人とも、言葉で心を伝えることが出来なかった。二人が本心を伝え合う方法は、殴り合うことしかなかった。

このお屋敷で、互いに探り合うように暮らす金髪の少年と黒髪の少年の姿が、僕の脳裏に浮かびました。

二人の少年が何かの拍子に殴り合いの喧嘩になり、その時だけ心の叫びを発することが出来た。

殴り合いはやがて競争という形になり、それすらもなくなった時、二人の間で交わす言葉がなくなってしまったんです。

僕がやって来る前、二人の関係はどんな風だったのか。想像することしか出来ないけれど、会話が全然無かったのかも知れない。

レオンさんにはフレデリクさんという友人ができたけれど、トーニオさんは誰にも心を開くことが出来なかった。

トーニオさんが本当に心を開くことが出来るのは、最悪の状態のトーニオさんを知っているレオンさんだけなんです。

僕が現れて、僕をうまく使えばレオンさんが怒ることに気がついて、トーニオさんは僕を利用した。

でもそれはレオンさんが苦しみながら拳闘を続けていることにトーニオさんが気づいて、何とかしたいと考えたからじゃないかと僕

は思いました。

レオンさんが何も話さないから、昔の方法をとるしかなかった。殴り合ってレオンさんの気持ちを聞き出すしかなかった。トーニオさんは悪役を買って出たけれど、本心ではレオンさんを救いたかったのかもしれない。

トーニオさんは、美しい顔を歪めました。

「俺は、お前が妬ましいよ。一人一人、着実に友人を作っていくお前が。俺ときたら……。しかし、何でそういう事を俺に話さないんだ。同じ屋敷で暮らしてるんだから、少しぐらい話してもいいんじゃないか。一人で抱え込みやがって」

レオンさんは、腕で顔を覆ったままです。

「話せるわけないだろ」

「話せよ」

「話せない」

「話してくださいっっ！！！」

やっと二人のそばまで這ってたどり着いた僕が、いきなり膝立ちになって叫んだから、二人は仰天して飛び起きました。

「ちゃんつと、話し合ってくださいっ。殴り合ったりしないで！」

お二人が殴り合ったら僕がどんな気持ちになるか……。お二人が怪我するんじゃないか、もしかしたら死んじゃうんじゃないかって、気が気じゃないんです……」

僕はぺたりと座り込み、流れ落ちる涙をぬぐいました。

「そんなつもりは無かったんだよ」

トーニオさんが苦しそうに立ち上がり、僕に歩み寄ります。

「ごめん、メイドくん」

そう言って僕の肩をつかんで立ち上がらせようとしたけれど、僕は立てませんでした。

「腰が抜けてしまったんです……」

トーニオさんは笑いながら僕を力いっぱい抱きしめ、片手で頭を撫でて僕の髪をくしゃくしゃにしました。

「可愛い。メイドくん、ほんとに可愛いよ」

ボワツと膨らんだ髪にすりすりとはりつき、唖然として目を見張る僕を見て、トーニオさんは満足そうににっこりしています。

「さっきはごめん。ミミズのこと」

「ミミズって トーニオ、お前、まさか……」

レオンさんがそばに来て、トーニオさんを睨みました。

「うん、まあ、メイドくんの顔に、ぺたぺたと。この世の終わりみたいに叫んでたねえ」

「そんなことを平気でやる奴には、任せられん」

レオンさんは怒った顔で、僕をトーニオさんの腕の中から引っ張り出しました。右手をポケットに入れ、左手で僕を抱きしめます。

「レオンちゃん、健気だねえ。悪さしたがる男の手を、一生懸命抑えてるわけだ」

トーニオさんが言い、僕は何のことかとレオンさんのポケットを見ました。

「は？」

「黙ってるよ！」

レオンさんと僕が同時に言い、トーニオさんは笑いながら僕の耳をつかむんです。

「耳は俺のものだからね。他の部分なら、どの部分かにもよるけど、少し譲ってやってもいいよ。……名前、書いところかな」

トーニオさんが僕の耳に指を走らせたから、僕はくすぐったくて飛び上がりました。

唇にファーストキスがあるなら、耳にだってあるはず。耳初めてだったのに。そう思うと涙ぐみそうになったけれど、トーニオさんの晴れ晴れとした笑顔を見ているうちに、涙は吹き飛びました。

レオンさんとトーニオさんは顔を見合わせて笑っていて、そこにはもう火花はありませんでした。

「お二人にお願いがあるんです」

僕は、レオンさんとトーニオさんを見上げました。

「僕に甘えてください。僕、もっと勉強するし、努力して強くなりますから。だから一人で頑張ろうとしないで、僕に甘えてください」

レオンさんの目が優しくなり、口許がゆつくりとほころんで笑みを形作っていきます。

「そうだよねえ。せっかく縁があって兄妹になったんだもんね」

トーニオさんも笑っています。

レオンさんは僕の肩をつかみ、指先に力を込めました。

「そうさせてもらうよ、エメル」

そうして僕の隣に腰をおろし、

「今度はお前の番だ。聞かせてもらおう。どうしてお前は誰に対しても、敬語を使うのか」

「あ、それ、俺も前から聞きたいと思ってたんだ」

トーニオさんも僕の前に座って、僕は困ってしまいました。  
昔のことは話したくないし、思い出したくない。でも。

「あの……」

僕は、うつむきました。

「……ママが尋ねたんです、パパとママどっちが好きかって……。その日僕はパパと二人でサーカスを見に行って、パパが連れて行ってくれたから……。だから僕、パパが好きって答えてしまって……。ママは『じゃあ、エメルはパパと暮らさない』と言って、出て行ってしまったんです。僕は『行かないで』って泣いたけど、駄目でした……」

ママが家を出て行ってしまった日のことを、まるで昨日のことのように思い出し、僕は目をしばたきました。

「『ママが好き』って答えたらママは出て行かなかったんじゃないかって思ってた……。パパもママも同じくらい好きなのに、僕の答え方が悪かったからママは出て行ってしまったんじゃないかって……そう思ってたんです。そのあと、喋るのが怖くなって……」

僕は、震える唇を噛み締めました。

「……今でも喋るのが怖いんです。たった一言の失敗で誰かを怒らせたり、悲しませたり、不幸にしたり。でも学校に行くと喋らないといけない時が多いから……。そういう時、敬語なら考える時間が少し与えられるし……。人に不快感を与えることも少なくなるし……。そう思ってた」

目をごしごしこすりしました。泣き虫で弱虫の自分が、嫌でたまりません。そう思いながらも、うじうじと泣いてしまします。

「なるほどねえ。メイドくん、言ってたよね。同じことを言っても、

人によって受け取り方が違うって。そんな風に気を遣いながら喋ってるんだねえ　疲れない？」

「……慣れました」

レオンさんの腕が僕に伸び、肩を抱いてくれました。僕は自分を強く持たなければと思いつつ、レオンさんの肩に顔をつけ、やっぱり泣いてしまいました。

## 10 始まりの幸福

夕食後、レオンさんとトーニオさんは2階のサロンで何事かを話し合っているようでした。

男同士の話があるんだろうなあと思い、僕は参加しなかったけれど、しばらくして行ってみると二人は部屋に戻ってしまっていました。

話は短時間で終わってしまったようで、少しがっかりしたけれど全然話さないよりはずっと良くて、僕は満ち足りた気分ベッドに入りました。

僕のママが出て行ってしまった日のことを、誰かに話したのは初めてです。

誰かに話せるとは思っていなくて、きっと一生誰にも話せないままだろうと思っていたのに。

話し始めるとすらすら言葉が出て、本当は僕は誰かに話したかったんだなあと、自分のことなのに今更気づくなんて不思議です。

翌日、レオンさんとトーニオさんは顔中を赤や紫や黒の痣だらけにして、それでも楽しそうに笑いながら掃除にとり組み、僕の勉強を見てくれました。

二人の様子にほっと胸を撫で下ろし、嬉しかったけれど、僕自身は元気を失いつつあったんです。

ロザヴェイン姫とレオンさんの結婚について、誰も口にしません。やっぱり幸福な結婚ではないんです。

淒く気になるけれど、僕から尋ねるのも変だし……。僕が立ち聞きたことを告白することにもなるし……。

そのうえ明日になれば、パパとディリアさんが帰って来ます。

どんな様子で帰って来るんでしょうか。仲良く帰って来てほしいと願いながら、不安でたまりません。

もしも、もしも喧嘩なんかしていたら      もしもパパの浮気

の虫が騒いでディリアさんと仲違いしていたら      お屋敷を追い出されるパパに、僕はついに行こうと思いました。

パパを一人には出来ないもの。僕にとって、パパは大切な人なんです。

ママと同じぐらいに      。僕は、ママに会いに行つた時のことを思い出しました。

ジュリエッタさんが家を出て行ってしまった後、パパは他の女ののところに行つてしまっていたし、僕は寂しくて一人が怖くて不安で、実の母に会いに行つたんです。

ママはベネルチアの西にあるミラネアの富裕な商人と再婚したと聞いていたので、男の子の格好をして長い髪を帽子の中にたくし込み、乗り合い馬車で出かけたんです。

丸一日かかってやっとたどり着き、ママが住んでいるはずの豪華な屋敷をぐるりと回つて、勇気を出して呼び鈴を押しました。

扉が開き、ママが立っていたんです。別れてから4年も経ってい

たけれど、ママを見誤るわけがありません。

「ママ……」

僕は呼びかけたけれど、ママの顔は青ざめていました。

後ろを振り返り、前を用心深く確かめ、僕の顔をじっと見て小声で尋ねるんです。

「ダニエルはどうしたの　死んだの？」

「いいえ！　パパは女の人の所に行ってしまったて、一人ぼっちが怖くて、ママに会いに来たの」

「ダニエルらしいわね。……家に帰って大人しく待ってなさい。パパはきつと帰ってくるから。ここに来られると困るのよ。今の夫に前の結婚のことは話したけど、子供がいることは言っていないんだから。もう少ししたら何とかなるかもしれないけど、今は駄目なの。いい？　すぐに帰って、二度と来ては駄目。わかった？」

そう言つて

出かける直前だったらしく

手にした

豪華なバッグの中から財布を取り出し、

「さあ、これを持って行って。人に見られないうちに早く帰りなさい」

と、ぴしゃりと扉を閉めてしまったんです。

僕はもう一度呼び鈴を押そうとして、中から声が聞こえることに気づきました。

「誰だったんだい？」

「知らない子供よ。家を間違ったみたい」

そんな会話を耳にして、呼び鈴に置いた手がだらりと下がってしまいました。

翌日あきらめきれずに再びママの家を訪れて、塀のひび割れから

中をのぞくと、庭にいるママが見えました。

そばで小さなよちよち歩きの男の子が遊んでいて、ママは笑顔で男の子の手を取り、歩く手助けをしていたんです。

もう僕のママじゃないんだ　　そう思いました。

僕はぼろぼろ泣きながら、乗り合い馬車に乗って家に帰りました。馬車の待合室から重い足取りで家の近くまで来ると、家の周りをおろおろ歩き回っているパパが見えたんです。

「パパ！」

僕は走りました。

「エメル！」

パパは僕に駆け寄り、僕を力一杯抱き締めてくれました。

「心配したぞ。お前に何かあったんじゃないかと、気が気じゃなかったぞ。一人にして、すまなかった。ジュリエッタが家を出たと聞いて、お前が心配で急いで戻ったんだが　　本当にすまなかった。もう一人にしないからな。許してくれ」

パパの腕の中が暖かくて、パパの言葉が嬉しくて、僕は涙が枯れ果てるまで泣きじゃくりました。

やっぱり僕は、パパが好きです。でもできることなら、ママが欲しい。　　。

デイリアさんが好きだからママになって欲しいけれど、大人の都合は僕の願いと相容れないことが多くて、もしも僕の願いがかなわなかったら……。パパと僕は、このお屋敷から出て行くことになりました。

もしもそうになったら……。僕の思いは悪い方ばかり向き、口数

も少なくなってしまったんです。

鬱々として眠れない夜を過ごし、とうとう訪れた運命の日。

夏の太陽が傾き夕風が木々を揺らす頃、パパとデイリアさんの乗った馬車が到着しました。

僕とレオンさんとトーニオさんは2階のサロンで待っていて、僕は外が賑やかになり僕の心臓が騒がしくなるのを聞いていました。

トーニオさんが窓のそばに立ち、外を眺めています。

さらさらの金髪に陽が当たり、白いシャツと淡い色のズボンとクラバット姿で、白金色の麗しい芸術品のようです。

僕の前にはレオンさんが黒いスーツを着て、黒い美獣が一休みしているような風情で座っています。

僕はこの光景を目に焼き付けておこうと思いました。

パパが部屋に入って来るなり、「荷物をまとめろ、エメル」と言うかもしれないんですから。

「心配するな」

レオンさんが僕の気持ちを察したように、優しく言いました。

「二人は、きつとうまくいつてる」

レオンさんの温かい視線が泣きたいくらいに嬉しくて、僕はうなずきました。

「ここから見る限り、仲良さそうだよ」

とトーニオさん。

「本当ですか」

ほっと胸を撫で下ろしていると、足音がしてサロンの扉が開き、パパとディリアさんが入って来たんです。

「やあ、子供たち。ただいま」

美男のパパはディリアさんと手をつなぎ上機嫌で、まずはディリアさんをソファに座らせました。

「みんな、いい子にしてた？」

ディリアさんは満面の笑みで幸せそうで、僕の顔が思わずほころびます。

「はい。別荘はいかがでした？」

「それはもう……ねえ？」

ディリアさんがうつとりとパパを見上げ、

「うーん。別荘なんて、目に入らなかったなあ」

パパはディリアさんの隣に座り、指と指をからめたまま、ディリアさんの青い瞳に見入っていました。

「君しか見ていなかったよ、ハニー」

「ハ、ハニー……？」

トーニオさんの咳きが聞こえます。

「私だって あなたしか目に入らなかったわ、ダーリン」

花のような笑顔のディリアさんを見つめながら、パパはからめた指を口もとにもって行き、愛しそくにキスをするんです。

レオンさんが酢を飲んだような顔つきで目をそらし、聞こえるか

聞こえないかぐらいの小声で「ダーリンだって？」と言い、

「ちよっと、トイレへ」

と立ち上がりました。

「あ、俺も」

トーニオさんが後に続き、

「早く戻ってらっしゃい。話したいことが、沢山あるんだから」

というデイリアさんの声を聞き流して、二人は小走りで部屋を出て行きました。

二人が戻って来るはずはなく、そのことに気づいた時にはすでに手遅れで、逃げ遅れた僕はパパとデイリアさんののろけ話を辟易するまで聞かされるはめになりました。

僕がお嫁入り前の娘だということもすっかり忘れられたようで、別荘のベッドは狭かったのだ、二人で入れる大型のバスタブを特注しようだのと聞かされ、挙句に実は部屋から一步も出なかったのだと聞かされて、僕は自分でもわかるくらい真っ赤になり、どうにも居心地が悪くなって立ち上がりました。

「あ、あの……レオンさんとトーニオさんを探して来ます」

「そうだわ。あの二人、何してるのかしら。随分長いトイレじゃない？」

「悪いものでも食べたんじゃないか？」

「とにかく、探して来ます。すぐに戻りますから」

そういい残してサロンを出たけれど、もちろん戻る気はさらさらなく、だってパパとデイリアさん、僕がいることすら忘れてるみたいだから。

自分の部屋に戻り、胸を押さえほっと息をつきました。

何とも言えない歓喜がこみ上げてきます。

よかった　　本当によかった。二人が仲良さそうで、幸せそうで。パパとディリアさんの幸せが、僕の幸せにつながるんです。

ソファに座って喜びを噛みしめようとしたけれど、ふと思いました。

レオンさんとトーニオさんを探すと言っておきながら、自室にいたら変です。

カムタンに好物の林檎をあげて幸せのお裾分けをしようと思いつき、キッチンに入ると、コックのハンスさんとアンナさんが話している最中でした。

「納屋がいいですよ」

アンナさんが僕を見て、笑いながらウィンクしました。レオンさんやトーニオさんから、パパとディリアさんの様子を聞いたんでしょうか。

「以前ディリア奥様が納屋に入った時、蛇が出ましてね。以来奥様は、納屋には近づかなくなっただんですよ」

「そうなんですか」

いいことを聞きました。

勝手口から外に出ると涼風が西陽を払い、さわさわと葉ずれの音が心地よく聞こえます。

厩舎に入り林檎をカムタンに食べさせた後、納屋に向かったんです。

ゲイルお爺さんが修理した扉を開けると中は薄暗く、壁際に人影が見えます。

「レオンさん！ 何してるんですか？」

「お前と同じだよ。避難してるんだ」

レオンさんは笑いながら、膝の上にすり鉢を乗せて何かをすっています。

「それは？」

レオンさんの前に腰をおろし、すり鉢の中をのぞくと、薬草の香りがありました。

「馬の傷薬だ。昔、父から作り方を教わってね」

レオンさんは手馴れた手つきで、薬草をすり潰しています。

「レオンさんのお父様、お医者様でしたね。ファイアの卒業試験に合格したら、レオンさんは医科大学に進まれるんですか？」

「どうするかな。まだ決めてないんだ。リーデンベルク家の次男は軍人になることになっているが、母上は好きな道に進んでいいと言ってくれるしね。……お前は将来、どうするんだ？」

「高等学校を卒業して、就職するつもりだったんですけど。ディリ……いえ、お母様と相談しないと……」

お母様。その言葉の響きは穏やかで優しく、僕の胸に沁み渡っていきます。

「良かったな。ほっとしただろ」

気づかないうちににんまりしていたらしい僕の顔を見て、レオンさんが言いました。

「はい」

僕は晴々とした気分で笑いました。レオンさんの綺麗な顔に浮かんだ、澄んだ青空のような微笑。僕を包み込むような黒く甘い瞳。

レオンさんを独占できる女性がいると思うと、羨ましくなります。

「どうした？ まだ気になることがあるのか？」

突然暗くなったらしい僕の顔に気づいたように、レオンさんの低い声が降ってきました。

僕は勇気を振り絞り、お祝いを言おうと思ったんです。泣いてしまいかもしれないけれど、泣いたらレオンさんの幸せに水を差すことになると自分を戒めて。

「ごめんなさい、レオンさんとトニーオさんが話しているのを聞いてしまったんです。レオンさんがロザヴェイン姫と婚約するって……。すみませんでした。立ち聞きするつもりはなかったんですけど……」

僕は、まず謝りました。

「それから、おめでとうございます。その話が全然出ないから秘密結婚かなって思ったんですけど、そうなんですか？ 僕に出来ることがあれば、何でも言うってください。僕、レオンさんの味方ですよ。ディリアお母様が反対なさってるんですか？ 僕からも説得してみましようか？ もしもお相手の家族が反対してるなら、僕に出来ることはありませんか？」

真剣な気持ちで話す僕をじっと見ながら、レオンさんの表情が何とも言えないものに変わっていきます。

うなだれて長い睫毛を伏せ、ゆっくり視線を上げて、僕を見つめました。

「少々、傷ついたよ。俺が他の女性と婚約すると聞いても、お前は

何とも思わないんだな。それどころか祝ってくれるのか……」

レオンさんのがっかりしたような声色に、僕はわけが分からなくなりました。

「でも、レオンさん。婚約するということは、そのお相手のロザヴェイン姫を愛してるっていうことでしょう？　僕が何かを思ふ余地なんか、ないような……」

「ロザヴェインは、クラレストから馬車で三日ほど走った所にあるリーデンベルク家の地所だ。『姫君の地所』とも呼ばれていて、もともとディリア母上の母上が嫁入りした際の持参金だったんだ。祖母からディリア母上に贈られ、今回お前に贈られた。それほど広くはないが、美しいところだよ」

「僕に贈られた……？」

レオンさんは、苦笑しました。

「パパから何も聞いてないんだな。結婚の際、ダニエル卿には称号が、お前には持参金となる領地が贈られた。ロザヴェインは、お前の持参金だ。ロザヴェインを所有する女の子だから、お前は『ロザヴェイン姫』なんだよ」

「と言うことは……レオンさんの婚約相手は……」

「お前がこの屋敷に残れる方法を考えると約束しただろ？　パパがこの家を出ることになったらお前と相談して、場合によっては無理やりにでも、俺たちの結婚申請書を王立裁判所に提出するつもりだった。結婚予定日を四年後ぐらいにしておけば、お前は俺の婚約者としてこの屋敷に住むことが出来る。母上が反対するようなら、全力で説得するつもりだった。……そんな事をする必要はなくなっ

しまったけど、少し残念だけど」

僕はしばらくの間、言葉が出ませんでした。レオンさんが僕と結婚するつもりだった……。そこまでしてくれるつもりだった……。

「レオンさん。そこまで考えてくださって……。ありがとうございます」

でもそのせいでレオンさんの人生が不幸なものになってしまったら、どうすればいいんでしょうか。僕のせいでレオンさんが不幸になっただら……。

「どういたしまして。……喜んでしたことなんだが」  
レオンさんは優しい表情で、僕を見つめています。

僕の頭の中は霞がかかったようにぼんやりとして、ただレオンさんの言葉が目まぐるしく繰り返されていました。

婚約      喜んでしたこと。喜んで      婚約。

「レオンさん……」

言いかけた時、納屋の扉が大きな音を立てて開き、トーニオさんが飛び込んで来て、ばたんと扉を閉めたんです。

「何やってるんだ？」

トーニオさんの質問に、レオンさんは小さく悪態をつきました。

「トーニオ。お前こそ何しに来たんだ」

「ひどい言い方だな。せつかく母上がこっちに向かっているって、知らせて来てやったのに」

トーニオさんはやや息を切らせ、僕とレオンさんの前に立っています。

「裸足でか？」

レオンさんは、トーニオさんの足に目をやりました。

「母上が俺の部屋をノックしたから、窓から逃げたんだ」

「つまり、母上をここに誘導して来たというわけか」

トーニオさんは、にやりとしました。

「そういう見方もできるな」

「ふざけるなよ」

「ふざけてるのは、そっちだろう。俺の彼女になれなくするなよ」

トーニオさんはそう言って僕の隣に座り、蕩けるような目で僕を見つめるんです。

「彼女?!」

いつ僕がトーニオさんの彼女になったんでしょうか。

『メイドくん』から『俺の彼女』に変わったみたいだけど、喜ぶべきなのか怖れおのくべきなのか、僕には判断できません。

トーニオさんはにつこり微笑んで、僕の耳を引っ張りました。

「耳の次は、どこにしよう。指を一本一本っていうのは、どう？」

それともいきなり、行っちゃう？」

行くとて、どこへ？ …… や、やっぱり、怖れおのいた方がいいような。

「エメルは妹だと、話し合って決めただろう」

レオンさんは嘆息まじりに言い、鋭い横目をトーニオさんに走らせています。

「ああ、そうだった。決めたんだったね。そうそう。でもねえ、レオンちゃん。ルールっていうのは、その時々で改正されるからね」

「改悪だろう……」とレオンさんが呟き、レオンさんの声に重なるように微かに女性の声が聞こえました。

風に乗って歌うような声で、僕たちの名を呼んでいます。

レオンさんは慌ててすり鉢を横に置き、壁際まで下がりました。僕も急いでレオンさんの隣で小さくなり、トーニオさんが僕の隣に飛び込みます。

「トーニオー、レオン、エメルちゃん」

ディリアさんの声が、屋敷の勝手口の方から聞こえて来ます。

「この年になって、かくれんぼをするとは思わなかったな」とトーニオさん。

「ダーリンとハニーは勘弁してほしいよ」

レオンさんの呟きにトーニオさんが吹き出し、僕は両手で口を押さえてくすくす笑いました。

「本当だよねえ。大体さ、母親のノロケ話を息子が喜んで聞くと思ってるのかなあ」

レオンさんとトーニオさんは声を出さずにおなかを抱え、目を見合わせて笑っています。

二人に挟まれて、僕は幸せな気分でした。

遠い昔、庭に隠れた僕をパパとママが探しに来た時のことを思い出しました。

あの時はくすくす笑って、ママに見つかってしまったけれど。

昔のことを思い出しても、少しも悲しい気持ちになりませんでした。

今が幸せだから。大好きなトーニオさんと、大切なレオンさんがそばにいるから。

「トーニオー、レオン、エメルちゃん、美味しいお菓子があるのよ。一緒に食べましょう」

「子供じゃあるまいし」

トーニオさんが言い、レオンさんが吹き出しました。

「お菓子より、エメルのアップルケーキの方がいいな」

「賛成、賛成。あれは最高だった。また食べたいよー」

「近いうちに作ります。心をこめて」

僕は、うきうきしながら答えたんです。美味しいと言ってもらえたら、毎日でも作ろうという気になります。

僕のくすくす笑いはいよいよ止まらなくなり、ディリアさんの足音が納屋の前で止まってもくすくす笑っぱなしで、笑いはレオンさんとトーニオさんにも伝染したようで、二人は肩を震わせ、堪えきれずに堰を切ったように笑い転げました。

「もう駄目だ」

「あきらめよう。見つかってしまってるよ」

トーニオさんが笑いながら立ち上がって納屋の扉を開け、僕たちは外に出ました。

ディリアさんが笑顔で立っていて、向こうからパパが歩み寄って来て、僕の両側にはレオンさんとトーニオさんがいます。

僕は、新しい家族を見上げました。

幸福感で一杯になって涙ぐみそうになったけれど、泣き虫と弱虫は卒業するんだって決めたから、ぐっと我慢しました。

夕暮れに近づきながら夏の空は抜けるように青く、果てしない高みまでつづいているかのようでした。

これからはきつといい事がある。きつといい事が続く。心の底からそう思えました。

僕の心は夢見る思いと憧憬に彩られ、豊かな未来へと飛んで行くのでした。

完

## 10 始まりの幸福（後書き）

長らくご愛読くださいまして、ありがとうございました。  
本作品は、いったん完結とさせて頂きます。

「アップルケーキに愛をこめて2 ～ギムナジウム篇～」を現在  
構想中です。

さらにパワーアップしたエメル達とともに、再び皆様にお会いで  
きる日を楽しみにしています。

最後まで読んでくださって、本当にありがとうございました。

セリ

## 1 初登校の不幸（前書き）

新しい家族に囲まれた幸せも束の間、入学した王立ギムナジウムはセクハラだらけ。ユリアス（女の子）の愛人に指名され、教師に迫られ、義兄2人は相変わらず、義兄の知り合いは美形ぞろい。どうなる、エメル！

## 1 初登校の不幸

「1時間目は、キスの練習ですよ」

教壇に立って声を張り上げるヘルガ先生は、僕が通っていたランツ中等学校の担任だった女教師です。

「皆さんはいずれ結婚するんですから、上手にキスが出来よう今から練習しておきましょうね」

「はい」

教室で可愛らしく返事をしているのは、貴族のお姫様たちです。

顔の部分がぼやけているけれど、高価そうなドレスを着ているから、お姫様と分かるんです。

色とりどりのシフォンやサテン地に金銀の刺繍が施されたドレスはスカート部分がたつぷりとして、デコルテや袖にフリルやレースやリボンがふんだんに使われて、とても華やかで豪華です。

貴族のお姫様たちは立ち上がり、二人ずつ向かい合って互いの唇に……キスしてる……。

僕は、必死に先生に訴えました。

「あの、あの、先生。僕、お腹が痛いんです」

「我慢なさい。授業放棄する者は、落第です」

「そんな……」

途方に暮れる僕を、お姫様たちが取り囲みます。

「さあ、キスの練習をしましょう」

「上手になったら、いい縁談が来るのよ」

「僕、べつに、縁談は、今のところ……」

後ずさる僕に、お姫様たちが迫って来ます。ピンクの唇、紅い唇、小さな唇、厚い唇。顔は見えないのに、唇だらけ……。

女の子に迫られるという前代未聞の珍事に、僕の頭は爆発寸前です。

「さつさとしなさいよ！。あんたがやらないなら、わたし達まで落第しちゃうじゃない」

聞き覚えのある声に振り返ると、髪を振り乱した怖ろしい顔つきのカミィラさんが立っています。

「自分から出来ないなら、わたしがやってあげる」

そう言っカミィラさんはたった三步で僕に歩み寄り、唇を僕の唇につけたんです。……え？

ぷちゅつと湿った音がしました。

僕は今……カミィラさんとキスをしています。えっと……正確にはカミィラさんとのキス、終わりました。……ひっ。

「ひっ、ひっ、ひいええええ      っっ！！」

汗びっしょりになって、僕は飛び起きました。白々とした夜明けの曙光が、カーテンの隙間から差し込んでいます。

夢だった……助かった。早鐘を打つ心臓を押さえ、はあはあと肩で息をし、僕は怖ろしい事実気がつきました。

女の子とキスする夢を見るなんて、僕の頭はとうとうおかしくなっってしまったんです。

しかも相手は、あのカミールさん。どうしよう……。とり返しのつかない事をしでかしてしまった気分で頭を抱え、さらに怖ろしいことに気がつきました。……正夢かもしれない。

ランツにいた頃、ファイア的女子クラスは花嫁学校だと聞いたことがあります。

男子クラスとはカリキュラムが違っていて、美しい歩き方の練習とか刺繍の授業なんかがあるとか、爵位とお金を持つお年寄りとの縁組が多いから、入れ歯の磨き方を練習するとか。

同級生の男子たちの悪い冗談だとばかり思っていたけれど、冗談とは思えなくなって来た……。

僕は貴族の習慣やしきたりを知らないから、貴族や王族の学校で何を学ぶのかよく分からないし、もしかすると普通にキスの練習が授業中にあるのかもしれない。

と、とてもついていけない……。夢の中でさえ衝撃的だったのに、実際にするなんてとても……。

やっぱり、平民の僕なんかが貴族のお姫様たちと同じ教室で学ぶなんて、無理なんです。

レオンさんとトーニオさんは守ると言ってくれたけれど、お姫様たちのお喋りを想像するだけで汗が流れ落ちるし足が震えるし、その上どんな授業があるかも分からなくて、恐怖と不安が募ります。

そうだ、デイリアお母様に尋ねてみようと思いつきました。パパはファイアについてよく知らないだろうけれど、お母様なら知っているはずです。

ベッドから飛び降りドアを細く開き、首だけ出して廊下をのぞきました。

リーデンベルク邸の三階にはパパとお母様と僕の部屋があり、廊下でつながっています。

パパとお母様の寝室のドアは閉まったままで、少しの間待ってみただけで偶然開くはずもなく、僕は諦めてパジャマを脱ぎ、いつものシャツとズボンに着替えました。

大人たちには夜遅くまで社交界でのお付き合いがあり、この時間はまだ眠っているはずです。

秋の社交シーズン前のプレ・シーズンが始まっていて、避暑地や別荘から戻って来た貴族のお歴々が、各々のお屋敷で軽い舞踏会や晩餐会を開いているんです。

パパとデイリアお母様は結婚報告を兼ねて、あちこちの集まりに顔を出さなければならなくて、忙しいようです。

廊下を静かに歩き階段を1階まで降りると、黒いスーツを着た執事のニクラスさんに会いました。

「おはようございます、エメル様」

「おはようございます、ニクラスさん。誰か、ダイニングにいます？」

「いいえ。今朝はまだ、どなたもお見えではございませんよ」

ニクラスさんは五十代の中肉中背の男性で、背筋をぴんと伸ばし血色のいい顔に笑みを浮かべた、温厚そうな紳士です。

使用人に「さん」付けは不要だとパパにもお母様にも言われたけれど、習慣を変えるのは難しく、何となく呼び捨てにしづらくて。

「そうそう、レオン様をお見かけしました。ネフィリムの朝駆けにお出かけになりましたよ」

ネフィリムはレオンさんの愛馬で、黒いたてがみと尻尾を持つ茶色い牡馬です。

フィアの授業についてレオンさんに尋ねてみようと思い、厩舎に入った途端、トーニオさんとぶつかりそうになりました。

「おっと。おはよう、メイドくん。よく眠れた？」

「はい……。おはようございます」

トーニオさんは、昨夜着ていた服のままです。トーニオさんが好む華やかなクラバット、翡翠のピン、黒の夜会服。……怪しい。

僕がじろじろ見ていることに気づいたトーニオさんは、にっこりして僕の肩を抱きました。

「どんな女性も君には及ばない。すべての女性は俺にとって、君のいない寂しさをまぎらすための代わりに過ぎない。俺を満たすことが出来るのは、君だけなんだよ」

トーニオさんが甘ったるく囁き、いきなり唇で僕の左耳をくわえたから、僕は飛び上がりました。

「ひゃあっ」

「よし、左耳を手に入れた！　こうやって君は少しずつ、俺のものになるんだね」

なりません。少しずつなりません。僕が口をへの字に曲げて見上げると、トーニオさんは気持ち良さそうに笑い、僕の頬にキスをするんです。

「怒った顔も可愛いよ。いつか全部俺のものになったら、指に絵の具をつけて君の裸体に俺の名を書くのが夢なんだ」

「……別の夢に変更してください」

「朝っぱらから、何やってるんだ」

レオンさんが、厩舎に入って来ました。

薄青のワイシャツにグレイのスラックスを穿き、グレイのウエストコートのポケットから金時計の鎖が見えています。

レオンさんが黒い瞳で優しく僕を見た途端、熱くなる僕の頬。

「あの、実はその……」

フィアの女子クラスでは、キスの実習はありますか？ そんなこととレオンさんに聞けるはずもなく、僕の隣で悩ましく立っている眠れる狼を叩き起こすことにもなり、僕は言葉に詰まってしまいました。

「明日から学校が始まるので、その……」

「不安なのか？」

レオンさんが心配そうに僕を見たから、僕は焦りました。

「そんなことないです、本当です。学校すごく楽しみにしてます、本当です」

ぺらぺら棒読み状態の僕に、レオンさんはくすりと笑いました。

「カフェの『ヤークト』に行ってみないか？ 俺の友人たちの溜まり場になってる。お前を皆に紹介しておきたい」

「あ、俺も行く。エメルの恋人として紹介してくれ」

「えっ。僕、まだ恋人はいませんが……」

僕が目をはちくりさせると、トーニオさんは悲しそうな顔をしました。

「……仕方がないなあ。『未来の』を付け加えて」

「お前、馬鹿だろ」

「今、気がついのか？ 俺も今、気づいたんだけど」

呆れた様子のレオンさんの前で、トーニオさんは首を振っています。

納屋で殴り合って以来、二人の間で軽口が交わされるようになりました。

内容は僕にはよく分からないけれど、言いたいことを言い合っている時の二人は楽しそうで、見ている僕まで幸せな気持ちになります。

「父上の了解を貰わないと。エメルを振り回すな、みたいな事をそれとなく言われたからね」

「そうなんですか？ でも僕、振り回されてませんよ？」

「俺は、娘に手を出すと殺すぞみたいな事を遠まわしに言われたよ。了解と言ってもねえ……」

トーニオさんは、三階の寝室を見上げています。僕は、絶句してしまいました。

パパが避暑地の別荘から帰って来てすぐ、レオンさんとトーニオさんを一人ずつ呼んで話をしていたことは知っています。

大人の男同士の話があると言っていたから、仲良くなってくれたらいいなと喜んでいました。

それなのにパパときたら……。

「無理じゃないかなあ。あの二人、夜まで起きて来ないと思うよ」  
「お昼には起きるんじゃないですか？ だって、お腹が空くでしょう？？」

「食欲より強烈的な衝動というものがあるんだよ、メイドくん」

「何ですか、食欲より強烈って？」  
「知りたい？」

トーニオさんが悪魔めいた微笑を浮かべたから僕はぎよつとし、レオンさんはトーニオさんを睨みながらしきりに妙な咳払いをしていました。

昼食をレオンさんがよく行くというカフェ『ヤークト』で食べる  
ことになり、僕たちは馬で出かけました。

僕は老牡馬のカムタンに乗り、レオンさんは愛馬のネフィリム。  
ゲイルお爺さんから馬を運動させて欲しいと頼まれたトーニオさん  
が乗っているのは、黒鹿毛の牝馬です。

『ヤークト』はフィアからほど近い大通り沿いにある、小奇麗な  
店です。『ヤークト』とは「狩猟」という意味で、その名の通り店  
内の壁やいたる所に怖ろしげな獣の剥製やハンティングナイフの類  
が飾られています。

店の最奥には10人ほどが座れるカウンター席があり、テーブル  
席は30ほど、そのうち10席は店の外の舗道に出されていて、僕  
たちは外のテラス席に座りました。

秋めいた風が涼しく、昼食には早い時間だったにも関わらず店内  
は一杯で、大半はフィアの学生のようにです。

数人が席を立てレオンさんに挨拶に来て、僕は目を見張りまし  
た。

レオンさん……怖れられてるみたい。

二人の学生が僕らの隣の席に移って来て、そのうちの一人は何度も見かけた人です。拳闘倶楽部でも、王宮舞踏会でも。

「やあ、また会ったね」

ふっくらした顔と体型と油断のならない鋭い目を持つその学生は、につこり笑って僕を見てブルーノ・フォン・シュバイツと名乗り、一緒にいたもう一人の学生がマテオ・フォン・ザイエルンと自己紹介すると、ずっと笑みを消してレオンさんに真顔を向けました。

「アーレクが来てる。フォルクの野郎と飯を食ってるぞ」

「あれれ。カミーラちゃんまでいるよ」

トーニオさんの言葉にドキリとしながら店内に目を馳せると、奥の暗いテーブル席に怖い顔でこちらを見ているアーレクさんとカミーラさんがいます。

もう一人いるようですが、背中を向けていて顔が見えません。あの人が、『フォルクの野郎』さんなんでしょうか。

「放っておけよ」

レオンさんが冷たく言い、僕たちは料理を注文することにしたんです。

今日はビルド料理（野生獣料理）があると聞き、僕は「ヤマウズラのオレンジソース」に決めました。

ビルド料理は冬場に出されることが多く、今日は幸運の日のはずだったんですけど。

フィアの女子クラスの授業は芸術（音楽や美術）の授業が男子よ

り多いことを除けば、男子クラスと大差ないといった話をレオンさんとトーニオさんから聞きながら、甘酸っぱいオレンジ味の鳥肉を堪能していると、見知らぬ若者がテーブルの横に立ったんです。

隣の席ではブルーノさんとマテオさんが席を立って若者を両側から挟み、レオンさんの視線が剣呑なものに変わっていきます。

「落ち着けよ。お前の妹に挨拶するだけだ」

「必要ないんだが？」

若者の言葉を突き返すレオンさんの口調は、凍てつく氷のように冷やかです。

僕は怖くなってレオンさんと若者を交互に見て、首をすくめました。

若者はジプシーの血が混じっているようで、高い頬骨と浅黒い肌と黒々とした瞳が印象的な、細面の美しい顔立ちをしています。

薄い唇が嘲笑うように曲げられ、両手はズボンのポケットの中。ゆったり構えているようで、飛びかかる寸前の獣のような獰猛な気配があります。

対するレオンさんは体をややフォルクさんに向けて足を組み、椅子の背に片手をあずけてくつろいでいるように見えますが、近寄りがたい狂猛な気配はフォルクさんに引けを取りません。

美しい獣と獣。

そのうちの一匹が僕に目を留め、獣には相応しくない優雅な微笑を浮かべました。

「俺は、フォルク・ノイドハイム。よろしくな、お嬢さん」

「よ、よろしく……お願いします」

僕ががちに硬くなつて答えると、フォルクさんの手が僕に伸びてきたんです。

「へえ。可愛いなあ」

硬直した僕の頬にフォルクさんの手が触れる寸前でガタンと大きな音がして、椅子を倒して立ち上がったレオンさんがフォルクさんの胸ぐらをつかみ、フォルクさんは片手で骨をへし折ろうとするかのようにレオンさんの手首を握りました。

「やめて！ お願いだから、やめて」

獣の闘いが始まる。何とか止めようと必死に訴える僕の前で、トーニオさんがレオンさんの肩に手を置いています。

「レオン、ここではまずい。場所を変えよう」

フォルクさんに険しい視線を向けたままレオンさんが手を緩めると、ブルーノさんがレオンさんとフォルクさんの間に割って入りました。

「アーレクの子分など相手にしたくはないが、日時と場所を指定しろよ。行ってやるから」

「食事をしただけで子分扱いとは、おまえら頭が悪過ぎるだろ」  
「何だこつ」

「レオンが出るまでもない。僕が相手だ。いつでもやってやる」  
マテオさんが言いましたがフォルクさんはふんと鼻で笑っただけで、黒々とした鋭い目はレオンさんに向けられています。

「足もとが崩れかけてるんだから、そっちに専念しろよ。せいぜい頑張れ」

そう言ってフォルクさんはもう一度僕を見て、立ち塞がるマテオさんを「坊やはママのところへ行けよ」と嘲笑い、去って行きました。

「フォルクは第二高等学校の生徒だけど、クラレストにある三つの高等学校の頂点にいる奴だ。レオンを排除してフィアの学生から上納金をせしめようとしてる、あくどい貧乏人だよ」

トーニオさんが僕に説明してくれ、ブルーノさんはフォルクさんの背中を睨みつけています。

第二高等学校      平民が通う3つの高等学校の中で最もリーデンベルク邸に近く、もし僕がフィアに通わなかったら入学したはずの学校です。

マテオさんが、レオンさんに歩み寄りました。

マテオさんは目のくりくりした女の子のような顔立ちだけど、怒った顔には小さな傷がいくつも付いていて、喧嘩が日常茶飯事なのかなと僕は思いました。

「フォルクを叩きのめそうよ。あんな口を聞かせておいて、いいの？」

「静かにしろよ、マティ。今日は俺の妹のお披露目だ。悪かったな、エメ」

レオンさんが申し訳なさそうに言ったから、僕は笑顔を作りました。

「……そうだった」

マテオさんは、僕の目にも分かるくらいしよげ返っています。

「ごめんなさい。レディに聞かせる話じゃなかったよね。食事中だしね。つい頭に血が昇ってしまっただけ」

「いいんです。僕、慣れてますから。僕のパパは元傭兵だから、荒っぽいことは平気なんです」

嘘です。僕は、縮み上がっていました。でもマテオさんは僕の嘘を信じてくれて、にっこりしてくれたんです。

騒ぎが収まり再びオレンジソースをたっぷり付けたヤマウズラの肉を堪能していると、いきなり腕を持ち上げられ僕は立ち上がりました。

「な、何……」

「エメル。久しぶりじゃないの。ちょっとだけエメルを借りるわね。女同士の大事な話があるの」

そう言ってカミーラさんは、僕を大通りに連れ出してしまったんです。

呆氣にとられたレオンさん達には聞こえない場所まで来ると、カミーラさんのぎらつとした眼が僕に注がれ、僕は反射的にカミーラさんのピンク色の唇を見てしまい、夢での衝撃的な体験を思い出してうなだれました。

夢とはいえ、思い出すと恥ずかしい……。

「クラレストを囲む用水路で泳いだことある？」

カミーラさんは僕の動揺に気づくことなく、唐突に尋ねました。

クラレストの周囲は大昔からある用水路で囲まれているけれど泳ぐ？

「……泳ぐのは得意だけど……用水路で泳いだことはないです」「夏場でも、とっても冷たいんですって。いったん底に沈んだら、二度と浮かんで来れないんですって。本当かどうか、試してみたくない？」

「えっ……」

カミーラさんは凶悪な笑みをたたえていて、僕の背筋を冷たいものが登って来ます。

「あんたの歓迎パーティーをやらなきゃね。そう思ってた色々考えるとこころよ。楽しみにしていて頂戴。ほーほほほっほ」

高笑いしながら去って行くカミーラさんを見ているうちに、僕の頭から夢の記憶は木端微塵に消え、唇がわなわな震え始めました。

これは、脅しです。歓迎パーティーに名を借りた、殺害予告です。カミーラさんは僕をひどく恨んでいて、近いうちに僕は用水路に放り込まれることになる……。

「ひっ、ひっ、ひ……」

僕の口からこぼれ落ちる、悲鳴にならない叫び。がくがく震える足を引きずり、僕はテラス席に戻りました。

頭の中で僕のささやかな脳が、力を振り絞って働いています。考えなくてはいけません。自分の身を守る方法を考えなくては。

「どうした？」

レオンさんが案ずるように僕の顔をのぞき込み、僕は大切なことに気がつきました。

男同士の闘いがあるように、女の子同士にも闘いがあるんです。

これは僕とカミィラさんの問題で、レオンさんやトーニオさんに助けてもらうわけにはいかない。

「何でもないです」

笑顔で答え、僕は決めました。僕は、一人で闘う。

どんなに怖くてもどんなに足が震えても、たった一人で闘わなければならぬ時が、長い人生の間で一度は訪れるんです。

レオンさんやトーニオさんのように、僕だって逃げることなく闘いながら生きていきたい。

具体的にどう闘えばいいのかわからないけれど……。男同士のように拳で闘うわけにはいかないんだけれど……。

でもきつといい方法が思いつくはずで、これは人に頼らず自力で闘うための天から下された試練だと思いました。

よし、やるぞ。そう思うと全身が熱くなり、何にも方策が思いつかないにしては何だかやれそうな気がしたけれど、カミィラさんの怖ろしい顔を思い出すと急激にやる気が萎えていくのでした。

それでも翌朝、僕はパパとディリアお母様の前で高らかに宣言し

たんです。

「当分の間、この恰好で学校に通います！」

もちろん、男の子の服装です。僕の一張羅とも言うべきスーツと蝶ネクタイを着込んで。

お母様は通学用のドレスを作ってくださったけれど、ドレス姿では闘えません。

手には、2本のモップ。1本は折れた時に備えた予備です。

「え……え？」

お母様は啞然としていて、パパは顔を引きつらせています。

「ああ、エメル。パパはこれまでお前の自由意思を尊重してきた。今回もそうしたいのはやまやまなんだが……」

「リーデンベルク家の家訓にもあるわ。正直であれ、自分のものを守れ、自由意思を持て。でもね……」

「そうか。私が教育方針としてきたものは、我が家の家訓でもあるわけだな」

「そうよ、あなた。わたくしは自由意思で、あなたを夫に選んだの」

「私が君を選んだのは愛ゆえだよ、愛しいハニー」

「わたくしだって。心から愛してるわ、ダーリン」

あの……。

何だか話が違う方向に進みつつあるみたい。

レオンさんは苦虫を潰したような顔をしているし、トーニオさんは背中を向けて「おえっ」と言ってるし……。

「そうだ。君たちに言っておかなければならない事がある。これから秋の社交シーズンが始まり、私たちは結婚の挨拶を兼ねて毎晩のように出かけなくてはなくなるだろう。留守をすることが多くなるから、家のことは君たち3人に頼みたい。特に、ベルトラム男爵」

パパはトーニオさんに向かい、自然な仕草で軽く頭を下げました。パパはトーニオさんのこともレオンさんのことも、決して子供扱いしないんです。

「家内が万事つつがなく治まるよう、気を配ってほしい。凶悪犯が逃亡したという話もある。……話しづらいことだが、5年前のスパイ事件の犯人が脱獄したらしい。王都にひそんでいるという噂もあるから、気をつけてくれ」

レオンさんの顔色がさつと変わり、ディリアお母様がパパの手を握りました。

「あなた。もう、そのお話は……」

「ああ、終わりにするよ。すまない」

「わかりました、父上。おまかせください」

トーニオさんの返答はそつが無く、優雅な所作でパパに礼をして、そうして僕の戦闘服と武器についての話は終わってしまったんです。

僕は馬車で通学することになり、モップ2本を苦心して馬車に押し込み僕自身も乗り込んで扉を閉めようとした時、レオンさんとトーニオさんがすぐそばにいる事に気がつきました。

二人とも僕に背を向けて、肩がひくひく震えています。二人で顔

を見合わせ、ぷふーっと吹き出して、僕の目の前で大笑いを始めました。

「メイドくん。世界中を探しても、モップを持って学校に行く子は君以外にはいないだろう」

「不安な気持ちは分かるが、モップは置いていったらどうだ？ 俺たちが守るし、ユリアスも目を配ると約束してくれたよ」

「えっと……どうしても……必需品で……」

声が小さくなっています。モップを持った僕を見て笑う人がいるかもしれないけれど、僕にとっては唯一の武器です。

学校内で武器の携帯は禁止されているけれど、モップなら先生方も駄目とは思わないと思うんです。

平民の中等学校とは違いフィアの教室には掃除用具入れが無いそうだけど、教室の隅に置いておけば邪魔にならないだろうし、汚れた箇所があったらすぐに掃除できるし。

僕は真剣なのに、再び僕に背を向けた二人の肩がひくひく震えています。

まだ笑ってる。そんなに笑わなくても。僕の命がかかってるっていうのに。

こうなったら自分を頼るしかない、僕は気を引き締めました。しっかりと闘うんだぞと自分に言い聞かせ、僕は馬車の扉を閉めました。

僕が乗る馬車の左右をレオンさんとトーニオさんの馬が守るように走り、僕たちは王立ギムナジウム 通称フィア に向かいましました。

秋の青空はひつじ雲に飾られて、大通りのプラタナスが黄色く色づき始めています。

リーデンベルク邸からファイアまで、馬車で約20分かかりました。獅子を象った門柱を抜けると広大な庭園があり、その先に5階建ての白っぽい石造りの建物があります。

馬車置き場で降り、今日のところは1本でいいかなと新品の2本のモップを見比べていると、背後でレオンさんの声がしました。

「ユリアス。おはよう」

ユリアスさん？ 僕の味方になってくれる女の子の名です。僕は喜び勇んで振り返り、笑顔のまま凍りついてしまったんです。

レオンさんとトーニオさんに挟まれるように立っているのは、流りりのウェスト部分を絞ったスーツを身にまとう絶世の美青年です。

プラチナブロンドの髪が白い大理石のような優美な顔を取り巻き、肩の下辺りまで泡のように渦巻いて流れ落ち、瞳の色は宝石のような青紫。

赤く小さな唇が愛らしく、でも美しい目は大人びていて、レオンさんやトーニオさんと変わらない背丈はどう見ても青年です。

「ユリアーネ・アドリアナ・フォン・ラーデン。ユリアスと呼んでくれ。よろしく」

ユリアーネもアドリアナも、女性の名前です。するとこの人は、女の子……？ 僕はぽかんと口を開け、慌てて閉じました。

「えっと……僕、エメル・フォン・リーデンベルクです。……自分を僕と呼ぶことにつきましては、その、様々な事情が……。武器携帯につきましても……武器ってこのモップのことですけど、色々考えた末でのことで……あの、よろしく願います」

僕は耳まで熱くなって、つまり耳まで真っ赤になってるに違いないくて、しどろもどろの舌に鞭打って喋りました。

学校では貴族のお姫様とお喋りするものとはかり思っていたのに、目の前にいるユリアスさんは王子様のようです。

ユリアスさんはくすりと笑い、白く長い指を僕の顎に置きました。レオンさんとトーニオさんの息を呑む音をかき消すように、ユリアスさんの朗々とした声が響いたんです。

「気に入った。君を私の愛人にしよう」

そう言ってユリアスさんは、僕に綺麗な顔を近づけてきます。

「えっ……」

愛人……？ 女の子の……？

や、やっぱり、一昨日の夢は正夢だったんです。フィアでは女の子同士でキスの練習をするばかりか、キスだけじゃないんです。だって愛人だもの！

硬直した僕にはおかまいなしに、ユリアスさんの唇が僕に近づいて来ます。

どうしよう。断ったら落第？ まさか。でも、どうしよう……

…。

僕の可哀相な脳がめまぐるしく働き、爆発しそうになりました。

## 2 僕の仕事は用心棒と……愛人？

「くっふふ……あっはっは」

ユリアスさんの口元から忍び笑いが洩れ、茫然とする僕の前で、ユリアスさんは綺麗な顔をそむけて可笑しそうに笑い出しました。

「どうして逃げない。そんなに私のキスが欲しいのか？」

笑いながら尋ねるユリアスさんに、ぶんぶん首を横に振る僕。

「君は面白いな。顔立ちは絵に描かれた天使のようなのに、身にもとう雰囲気は困り果てた子犬だな」

困り果てた子犬って、どんな子犬なんだろう。

飼い主に捨てられガリガリに痩せて、ずぶ濡れになってお腹を空かせた子犬が浮かびます。

僕も痩せてるけど、そこまでひどくない！……と思ったけど、もしかしてそこまでひどいのかな……。

「僕は、人間のつもりですけど……」

「見ればわかるよ」

「ユリアス。愛人の件だが、エメルが女子クラスに慣れるまで避ける方向で検討して貰えないだろうか。せめて、女子クラスの仕組みをエメルに説明し終えるまで。俺が説明してもいいんだが、俺は女子クラスに詳しくないし……」

レオンさんが珍しく下手に出て、僕はレオンさんが女の子同士の問題は手に負えないと言っていた事を思い出しました。

ユリアスさんの顔には、冷笑が浮かんでいます。

「もちろん、説明する。だがこの子を守るためには、私の愛人にするのが最も確実な方法だと思ったのだが？」

「ああ……そうだな。分かってる」

そうだな……？ 僕はレオンさんの言葉に落胆しました。僕がユリアスさんの愛人になってもいいと、レオンさんは考えているんです。

愛人なんて、嫌です。相手が男性でも、女の子でも。

僕は心優しい夫と可愛い子供たちに囲まれて、平凡で穏やかな暮らしがしたい。

レオンさん、助けて……。僕の声は咽喉で止まってしまい、声になることはありませんでした。

レオンさんは僕のために、心を砕いて考えてくれたに違いないんです。その結果がユリアスさんの愛人なら、僕は黙って従うしかない……。

「エメルをからかうのも迫るのも言い寄るのも、俺の専売特許なんだよねえ」

トーニオさんが呟くように脅すように言い、ユリアスさんはちらちらと横目でトーニオさんを見ました。

「君は、年上の貴婦人専門だろう」

「俺は、すべての女性を愛する神の如き男さ」

「人はそれを、女たらしと呼ぶんだよ」

「傷つくなあ……」

トーニオさんは胸を押さえ、ユリアスさんはトーニオさんを追い払うようにひらひら手を振りながら、僕の肩を抱きました。

「さあ、行こう。授業が始まる。モップが邪魔だな。武器になりそうな物は、持ち込めないことになっている」

「あの、これは、その……」

モップを取り上げようとするユリアスさんに僕は懸命に抵抗し、レオンさんの手が伸びてモップを押さえました。

「持たせてやってくれ。エメルにとっては大切な物だ。先生方には、俺たちから話を通しておく」

「レオンさん……」

見上げると、レオンさんの温かい目が僕を見下ろしています。

「何かあったら、俺の教室まで来るんだぞ。場所は分かってるな？  
一人で解決しようなんて考えるなよ。それから……」

レオンさんは優しい微笑を浮かべ、僕の顔をのぞき込みました。

「……楽しめよ。きっと楽しいことが沢山あると思うから」

「はい」

愛人でも……？　僕はレオンさんに心配をかけまいと、こみ上げる涙を堪えました。

「エメちゃんには俺たちがついてるんだからね。それを忘れないでね」

トーニオさんがつこりして言い、僕の隣でユリアスさんが呆れたように首を振っています。

「過保護な兄どもだ。私が肌身離さず身につけるのだから、心配はいらん」

肌身離さず……魔よけのお札になった気分です。

長身のユリアスさんに肩を抱かれ、左手にモップを握りしめ、僕は歩き出しました。

振り返るとレオンさんが腕を組んで僕を見つめていて、隣でトー  
ニオさんが笑いながら小さく手を振っています。

僕の兄さんたち。僕を心配してくれる、僕の大切な兄さんたち。

兄さんたちが望むなら、僕は立派な愛人になります。そうするしかないんだと涙を押しとどめ、僕は覚悟を決めました。

兄たちを安心させようと、右手を大きく振りしました。  
「行ってきます。心配しないで。僕、大丈夫だから！」

全然大丈夫じゃないけど。気分はまるで、売られて行く牛です。  
僕なんかきつと、ユリアスさんにすぐに飽きられて、場末の競り  
市に売り飛ばされるに決まってる……。

「泣いてるのか？」

ユリアスさんに顔をのぞき込まれ、僕は無理をして笑顔を作りました。

「目にゴミが入って。あの、僕、頑張って働きますから、よろしく  
お願いします」

「働く、か」

ユリアスさんは考え深そうに僕を見つめ、僕が手にしたモップを  
見やりました。

「ゲルタから聞いたが、君の棒術の腕は相当なものだそうだな。私  
の愛人というだけでなく、用心棒も兼ねて貰おうか」

「えっ……その……」

棒術の腕は全然まったくこれっぽっちも大したことはないと言  
かけて、口をつぐみました。

これは、チャンスかもしれない。用心棒として一生懸命働いて認められれば、愛人としてのお仕事を容赦してもらえるかも知れないんです。

「用心棒、やらせてください。僕、一生懸命働きますから」

「決まりだな。今日は私の家に来てくれ。放課後、ラーデン侯爵家の馬車に乗るように。いいね？」

「はい」

良かった……。愛人生活から逃れられるかもしれないと僕の胸に希望の火が灯り、につこり笑うユリアスさんに満面の笑顔を返しました。

白い石造りの本館の脇に、裏手に回る小道があります。ユリアスさんと僕は、薔薇が咲き乱れるその小道を並んで歩きました。

「女子クラスは、離れの別館にあるんだ」

薔薇園の先に見える、白い建物がそうなんだろうか。小じんまりとした三階建てで、金の飾り物の付いた白い柵に囲まれています。

「現国王アルベルト三世陛下が即位されてすぐに教育改革が行われて、トライゼン国内の公立学校は一部を除き、すべて男女共学となった。地方の平民たちの小さな学校では、昔から男の子と女の子が机を並べて読み書きを学んでいたから混乱はなかったが、フィアはもともと男子だけの学校だったから、反対運動が起きたんだよ」

「男子生徒が、女子と一緒に学ぶのは嫌だと言ったんですか？」

僕が尋ねると、ユリアスさんはにやりとしました。

「とんでもない。クラレストの貴族の子女が、男どもと机を並べる

のは嫌だと言ったんだよ。それまで貴族の子女は数人単位で集まって、家庭教師から学びながら他愛のないお喋りを楽しみ、自由を謳歌していた。学校に集められて男たちの監視付きとなったら、自由がなくなってしまう」

「監視……ですか」

ユリアスさんの言葉や口調に引つ掛かるものを感じ、僕はユリアスさんを見上げました。

ユリアスさん、男性が嫌いなのかな……。

「男どもは、自分たちにとって都合のいい価値観を女性に押し付ける。女らしさ、色気、母性。押しつけられた側はたまったものではないが、いつしかありのままの自分を忘れ、男たちの価値観に合わせるようになる。我々の先輩はそんな窮屈な学校生活を、拒否したんだよ。結婚すれば社会の規範に合わせなければなくなるのだから、せめて結婚前ぐらい好きに暮らしたいと考えたのだろう」

「はあ……。好きに暮らすって、僕には想像できませんけど」

僕が通って来た初等学校も中等学校も共学でしたから、共学でない学校が想像できないし、価値観や自由といった難しい言葉を使ったことがないので、ぴんときません。

「フィアの初代女子学生は1年間だけ本館で男子生徒と共に学び、その間に激しい反対運動を繰り広げたんだ。揃いの赤い靴下を穿いていたことから、『赤靴下』と呼ばれてね。赤い靴下を穿くなんて、当時も今も娼婦ぐらいのものだから、親たちが慌てふためいたのなんのって」

ユリアスさんはくすくす笑いながら、別館の門の前に立つ守衛に片手を上げて挨拶をし、別館建物に近づいて行きました。

「すったもんだの末、ファイアの子子クラスは別館に移ることで双方が妥協することになったんだ。男どもが侵入しないよう柵を張り巡らし、本館から双眼鏡でのぞかれないよう女子クラスのカーテンは開かないこととなった。そうしてようやく我らが先輩たちは、女の子だけの世界を取戻したんだよ」

「女の子だけの世界って、僕には想像できないんですけど、どんな事をするんですか？」

「例えば、胸の大きさコンテスト。もちろん、上半身裸で」

「えっ……えええっ」

そんな……そんな事されたら僕の最下位は決定です。……上半身裸?! そういう事をするから侵入者やのぞく者が現れるんじゃないか、という気もするようないか……。

「鼻の穴に豆を押し込んで飛ばす大会。下品な言葉でシリトリ大会。男の品定め。下ネタが飛び交うのは日常茶飯事、すべて先輩たちの話だ。今現在は……」

納得しました。そばに居られて困るのは、男子生徒だけじゃないと思います。そばに居る側だって困るでしょう。

僕だって、困っています。貴族のお姫様に対する幻想が、音を立ててがらがらと崩れ落ちていきました。

「実体験することだよ、エメル。女子の帝国によっこそ」

ユリアスさんがそう言って重い櫳の扉をボタンと閉めたから、僕は「ひっ」と飛び上がりました。

女子の帝国……。何だか怖そう……。



2

僕の仕事は用心棒と……愛人？  
？（前書き）

## 2 僕の仕事は用心棒と……愛人？

眼前にはその昔舞踏室だったであろう絢爛たる空間が広がっていて、中央奥にある螺旋階段で上階とつながっています。

壁も柱も螺旋階段も白を基調にし繊細な模様が彫刻されていて、彫刻部分は黄金色です。

天井一面に天使の絵が描かれ、豪華なシャンデリアが三つ、咲き誇る花のように下がっています。

床は明るい色彩の木材で、楕円形の窓から差し込む光に照らされ、金色の絨毯のようです。

隅に置かれた椅子や物書き用の小机も白地に金細工が施されて、白と金に彩られた華麗な世界に圧倒されそうです。

でもその時の僕には鑑賞する余裕もなく、ひたすら目を見開いて前方を見ていたんです。

螺旋階段の下に、ドレス姿の姫君たちが集まっていました。

通学用なんでしょうか、ドレスの材質は丈夫な木綿のようだけれど、レースやフリルに飾られて華やかです。

凛と背筋を伸ばした人、扇で口元を隠した人、様子は様々だけれど、視線は一樣に僕とユリアスさんに注がれています。

「紹介しよう。私の愛人兼用心棒となった、エメル・フォン・リーデンベルクだ。先輩方の承認を得たい」

ユリアスさんの声が朗々と響き、僕は一瞬目をつぶりました。用心棒はいいとして、愛人……。

とても大声で人様に聞かせるような言葉じゃないし、ましてお姫様たちの承認を得るような話じゃないと思うんです。

僕の脳裏に、ユリアスさんと僕の姿が映りました。

最新流行のお洒落なスーツを着て華やかなアスコットタイを結んだユリアスさんと、地味なスーツに金色ストライプの蝶ネクタイを付けた僕。

美青年風のユリアスさんと、地味な男の子に見えるに違いない僕。  
この2人が愛人関係　　怪しい。怪し過ぎます。すごく不謹慎で不道德な関係です。

「ユリアス。あなたには既に一人、愛人がいるでしょう。リーザのことは、どうなさるおつもり？」

お姫様達はきつと眉をひそめるだろうと思ったのに、これといった動揺もなく、中央に立っていた女子学生が静かに尋ねました。

髪をゆるやかに結い上げ、落ち着いた大人の雰囲気から見て最上級生のようにだけれど、僕は別のことで頭が一杯になっていたんです。  
もう一人の愛人……。リーザって……？

「愛人が2人いた例は、これまでにもある。問題にはならないと思うが」

ユリアスさんが僕の腰に腕を回し、僕を抱き寄せました。ぎよつとして体をこわばらせる僕に、ユリアスさんの青紫の瞳が流れるように注がれます。

プラチナブロンドの髪が僕の肩にかかり、甘くミステリアスな香りがほのかに漂って、ユリアスさんは女の子だと分かっているのに僕の馬鹿な心臓がドキドキしてしまします。

ユリアスさんが美し過ぎて、貴族の雰囲気濃厚過ぎて、華麗な舞踏室に負けないくらい華麗で、眩暈がしそうな僕に顔を近づけ、ユリアスさんは僕の額に唇をそつと置いたんです。

「ひっ……」

僕の咽喉の奥で悲鳴にならない声が絡み、ユリアスさんはふっと微笑んで上級生たちに顔を向けました。

集っていた姫君たちからため息が洩れ、先ほどの最上級生が呆れたように首を振っています。

「ユリアス、あなたって……仕様のない人ね。問題を起こさないと約束してくださいわね？ 痴話喧嘩などもっての他ですよ」

「承知しました」

ユリアスさんが僕から手を離し、優雅な仕草でお辞儀をしたから、僕も慌てて頭を下げました。

上級生たちは螺旋階段をのぼって行き、解放されたのかなと思っただけ、ユリアスさんの腕が再び僕の腰を絡め取り、息をつくことが出来ません。

「6年生の教室は、1階にある。教室に入るまで、もう一波乱あるからね」

ユリアスさんの言葉の意味は、すぐに分かりました。2組の教室に入るには、1組の教室の前を通らなければならないんです。

案の定1組の教室の前で、悪鬼めいた微笑を浮かべたカミィラさんが、廊下を塞ぐように立っていました。カミィラさんの周囲にはマチルダさんを初め数人の女子学生がいて、僕を睨みつけています。

「エメル。モップを持ってるなら丁度いいわ。トイレが汚れてるから、掃除しておいて頂戴ね」

カミィラさんが言い、周囲の女子学生たちが声を上げて笑い出した。

「カミィラ。エメルのモップで張り倒されたそうだな。見たかったよ」

ユリアスさんの言葉にも、カミィラさんに動じた様子はありません。

「夏休み中、わたしの屋敷でモップを持った猿が暴れたけれど。どこをどう聞き間違ったのかしら。耳まで悪くなるとはお気の毒様、ユリアス」

カミィラさんの取り巻き達の笑い声がますます大きくなり、僕の顔が熱くなりました。

モップを持った猿って僕のこと……？ ひどい。

「臭いませんか？ 何だか猿臭いわ」

カミィラさんがじつと僕を見たから、もしかして僕って臭いのかなと鼻をひくひくさせました。

そんなはずはないような……。

だって僕は、僕に似合う香りだからとトーニオさんがプレゼントしてくれた香水をつけていたんです。

「私には、バニラの香りしかないが？」

ユリアスさんはそう言って、僕の髪に鼻を寄せました。

「エメルは、ケーキのような美味しそうな香りがする。それに臭いといえば、カミィラだろう。毎日豚小屋で皇太子殿下とデートして

いるそうだな」

「えっ」

僕はユリアスさんを見上げ、カミーラさんに視線を転じました。

「な、何を言ってるの。哀れな子豚の様子を見に行ってるだけよ。殿下とは何の関係もないわっ」

カミーラさんの口調は慌てふためいているようで、頬がほんのり赤らんで、僕ははっとしました。

もしかしてカミーラさん、ゲオルグ皇太子殿下に交際を申し込まれたんでしょうか。そこまで行かなくとも、頬を赤らめるような素敵な出来事があったんでしょうか。

怖ろしいカミーラさんがごく普通の女の子に見え、不意に鼻に豆を詰めて飛ばしたというとても信じられない過去の姫君達の武勇伝が、僕の脳裏をよぎりました。

ユリアスさんがそんな事をする場面は想像も出来ないけれど、負けず嫌いなカミーラさんならしゃにむに勝ちに行きそうな……。

鼻の穴に豆を押し込んだカミーラさんの顔が浮かんで僕は笑いそうになり、慌てて両手で口を押えたけれど抑えきれず、指の間から笑い声が漏れ出てしまったんです。

「ひっひ、ひっひ、ひ……」

カミーラさんはぎょっとして顔を引きつらせ、頭のおかしな子を見るような目つきで僕を見えています。

僕の想像は留まるところを知らず、緑の豆を鼻の穴いっぱい押し込んだカミーラさんの顔がアップになったところで、

「何がおかしいの」

と怒りに鼻の穴を膨らませたマチルダさんの顔が、視界の隅に入って来ました。

マチルダさん、怒ると鼻の穴がふくらむのかな。あれなら豆が10個ぐらい入るかな……。

そう思うと笑いが止まらなくなり、僕は口から手を離し、顔中を口にして笑いながら言っただんです。

「同じファイアの女子クラスに通うことになったので、よろしく願います。くふふっ……ごめんなさい。マチルダさんの鼻の穴、ふくらんでるから……おかしくて」

「はあ？」

怒ったマチルダさんの顔を周囲の女の子達がのぞき込み、ぷつと吹き出しました。

「何が可笑しいのよ！」

そう言っただけを見回すマチルダさんの鼻はますます膨らみ、取り巻きの女の子達が次々に笑い出して、マチルダさんの怒りは頂点に達してしまっただんです。

「何言いがかりつけてんのよっ。覚悟しなさいよ、殺してやるから」  
僕の笑いが、いつぺんに引っ込みました。殺す……？　そ、そんな……。

おかしいな想像をしたばかりに、カミィラさんのみならずマチルダさんの怒りまで買ってしまった……。

「エメルに手を出したら、私に宣戦布告したものと見なす」

ユリアスさんの声が厳かに響き渡り、続いてカミィラさんの声が響きます。

「リーザがどう思つかしらね」

「君には関係ない」

ユリアスさんはぴしゃりと言い、僕はユリアスさんに抱きかかえられるようにしてカミィラさんの横を通り過ぎ、2組の教室に向かいました。

教室の中はしーんと静まり返っていて、白く冷たい視線が僕に突き刺さります。

僕の笑いは完全に消失し、足がすくんでしまいました。

そのうえユリアスさんが「リーザ・フォン・ヴァイヘンだ」と一人の美少女を紹介してくれたから、僕は硬直してしまっただけです。この人が、ユリアスさんのもう一人の愛人……。

「よろしくお願いします」

僕が恐る恐る手を差し出すと、リーザさんはにっこり笑って手を握り返してくれました。

「よろしくね、エメル」

リーザさんは澄んだ水色の瞳が印象的な、とても可愛らしくて優しいそうな女の子です。

一つ括りの三つ編みはつややかな黒髪で、僕はほっとして笑顔を返しました。リーザさんとならもしかすると友達になれるかもしれないと、淡い期待が湧いて来ます。

ユリアスさんの隣の席に座るよう言われ、モップを部屋の隅に置いて戻ると、反対側の隣にゲルタさんが座っていました。

「ゲルタさん。よろしくお願いします」

僕は勇気を振り絞って話しかけたけれど、ゲルタさんは返事をせずに立ち上がり、ユリアスさんの前でにこやかに微笑むんです。

「ユリアス。あなたの隣に座れると思ってたのに、とっても残念だわ」

「次の機会があるよ。席替えは、毎月一回行われるからね」

「そう？ 次に期待するわね」

ゲルタさんは微笑んだまま、まるで僕なんかないみたいに僕の前を素通りして元の席に戻り、反対側の隣に座る女子学生と仲良さそうにお喋りを始めたんです。

やっぱり僕は、ゲルタさんに嫌われてる……。そう思いました。

ユリアスさんは隣のリーザさんと話してるし、僕は一人ぼっちになった気分で悄然として、始業時間を待ちました。

担任のクリスティン先生が入って来て、一人一人名前を呼ばれて新しい教科書が配られました。

僕が取りに行くのと僕の前に呼ばれた女の子が教科書を渡してくれ、僕は笑顔でお礼を言っただけで、女の子は顔を引きつらせて席に戻って行きます。

何か気に障る事をしたかなとか色々考えたけれど思いつかず、最終的にカミーラさんのお屋敷で暴れた話が広まっていて、そのせいで僕はみんなに嫌われてるんだという所で落ち着いて、泣きそうになりました。

廊下から1時間目終業のベルの音が聞こえ、休憩時間になりました。始業・終業の合図は、先生が廊下を歩きながらハンドベルを鳴らして知らせることになっています。

驚いたことにフィアの女子クラスでは、30分授業をすると1時間の休憩が取られることになっているんです。長時間の授業をするとお姫様達のみならず、疲れて容色が衰えるという理由で母親達から苦情が来るそうです。

休憩時間が始まった途端クラスメイト達がユリアスさんとリーザさんを取り囲み、一大グループにゲルタさんまで加わって、僕はぼつんと座っていました。

グループの中に入って行く勇氣は、僕にはありません。自分にはっぱをかけたけれど、どうしても入って行けない。

ユリアスさん達の会話が耳に入ってくるけれど、流行のドレスとか髪型とか、宝石や装飾品の話とか、とても僕にはついて行けそうにありません。

「エメル。図書室に移動するよ」

ユリアスさんに声を掛けられたけれど、

「すみません。僕、ちょっと、トイレに……。先に行っていてください」

ほんの少しだけ迷い、やっぱりモップを持って行くことにして、モップを抱えて1組の教室の前を走り抜け、舞踏室脇の小部屋のドアを開けました。

中は倉庫のようで、大小様々な机や椅子が整然と積まれています。

壁にもたれて座り、モップを抱きしめました。何やってるんだろ  
う、僕。

どこに行っても何をしても、情けない奴です。恥ずかしくて先行

きが不安で、涙が出そうです。

でも頑張らなきゃ、闘って生きていかなきゃ。

そう自分に言い聞かせていた時、突然ドアが開き、女の子が一人入って来たんです。

豪華なドレスに身を包んだ人目を引く美少女で、どこかで見たことのある顔立ちです。

「あっ……」

僕は、目を見開きました。

「もしかして……マテオさん？」

「正解！」

昨日カフェの『ヤークト』で会ったレオンさんの友人の一人、マテオさんがお姫様の恰好をして、それも凄い美少女で、僕は呆氣にとられました。

## 2 僕の仕事は用心棒と……愛人？

「裏庭から教室を見たけど窓にカーテン掛かってよく見えないし、従妹に頼んで君を呼んでもらおうと思って広間で隠れてたら、君がやって来たの。会えて良かったあ」

「僕もお会いできて嬉しいですけど、どうしたんですか、その恰好……」

僕はマテオさんの金髪のかつらや、小さなリボンが沢山ついた華やかなピンクのドレスをまじまじと見ました。

どこから見ても美少女に見え、顔中についていた小さな傷はクリームを塗ったんでしょうか、目立たなくなっています。

「もちろん、君の様子を見に来たんだよ」

マテオさんは愛らしい顔でにっこり笑い、僕の隣に腰かけ、僕の顔をのぞき込みました。

「もしかして泣いてたの？ 何かあった？」

心配なのは、マテオさんの方です。女子の帝国に、男子が女装して潜入していいんでしょうか。

でもマテオさんの表情は心から僕を案じてくれているようで、胸がじんときします。

「学校が豪華過ぎて、僕なんか場違いみたいで……気持ち落ち着かせていたんです」

「エメルちゃん、広間の天井に描かれた天使みたいで、全然場違いに見えないけどなあ。やったらめったらきらびやかだって言うのは、賛成。本館はもっと凄いよ。初めて本館に入った時、目がチカチカ

して貧血を起こしそうになったもん」

マテオさんはそう言って笑い、僕も思わず笑ってしまいました。

「実際、何度も貧血起こしてぶっ倒れたんだ。小さい頃、体が弱くってね。フィアも休みがちで。通学路にあつた拳闘ジムをのぞいて、こういう所に通ったら丈夫になるのかななんて考えてたら、いきなり襟をつかまれて中に連れ込まれたの。連れ込んだ奴が、レオンだった。体はいたわるもんじゃない、鍛えるもんだなんて言つてさ。あの頃僕はレオンが怖くって、喧嘩は強いし上級生にも一目置かれてるし、逆らうなんて露ほども考えられなかったんだ。言いなりになってるうちに、気がついたらレオンと一緒に殴り合いの喧嘩をしてぶっ倒れるようになってたよ。同じぶっ倒れるでも、貧血でぶっ倒れるより喧嘩でぶっ倒れる方が、男として恰好いいと思わない？」

「え……」

結局ぶっ倒れるんだから同じだと思います……と言える雰囲気でもなく、マテオさんにとっては明らかに違うみたいで、僕はうなずくことにしました。

それにレオンさんの話を聞いたのが嬉しかった。レオンさんはきつとぶつきら棒なやり方で、体の弱いマテオさんを気遣ったんだと思う。

「レオンさんとは長いお付き合いなんですね」

「5年になるかなあ。……ところで、女子クラスの愛人というのは親友を意味してるって話、聞いてる？」

「えっ！　そうなんですか？！」

「あ、やっぱり説明されてないんだ」

マテオさんは顔をしかめ、舌打ちしました。

「ユリアスの奴。そういう大事な部分を先に話してくれないとなあ」  
「ユリアスさん、色々と忙しそうだったから……。でも、そうなんですか。ちよつと安心しました」

ちよつとどころじゃありません。ものすごく安心して、肩の力がすつと抜けました。

「もともとは貴族の子女が慣れない学校生活を始めた頃、互いに助け合えるようにと始まった女子クラス独特の制度だったんだよ。誰かが遊び半分で親友を『愛人』と呼んだことから、そのまま定着してしまった。色々と特殊な文化があるからね、女子クラスには。僕らには見えない部分がたくさんあって、さすがのレオンも不安になったんだろうね。今朝教室に入るなり、姉と妹が女子クラスにいて奴に、女子クラスの現状について話を聞いたんだ。レオンとトーニオとブルーノと僕がその場にいたけど、僕ら女子クラスとは全然縁がないし、トーニオは王宮の女官にはやたら詳しいけど、年の近い女の子には興味ないみたいで全然知らないって言うし」

そこまで話し、マテオさんは困ったように視線を落としました。

「それでね、女子クラスの『愛人関係』は『親友関係』をさすんだけど、ごく稀に本物になった例が過去あったらしい」

「本物って……？」

「うん……つまり……そういうこと」

マテオさんの顔がピンク色に染まっています。

「ユリアスについてなんだけど、春のパーティーの時、リーザとキスしてるのを見たって奴がいるらしい」

「キス……額に？」

額にキスなら、僕もされたけど……。

「そういうんじゃないくて、本物のキス。つまり……」

マテオさんは言いにくそうで顔が赤くなっていて、僕の顔まで熱くなって来ました。

「ということは、ユリアスさんは……ユリアスさんとリーザさんは……」

「本物かもしれない。噂だから、確かではないけどね。それでレオンとトーニオは今日の放課後、愛人関係の解消をユリアスに申し入れることにしたんだけど、トーニオは珍しく顔色を失くしてるし、レオンといったら……」

マテオさんが、首をゆっくりと振ります。

「あんなに狼狽したレオンを見たの、初めてだよ。男子クラスは朝から授業があったけど、心ここにあらずって感じでね。見るに見かねて、学校の備品室にあった仮装用の衣装をみつくるって、僕が君の様子を探りに参上したってわけ」

「ありがとうございます、じゃなくて、ご心配をおかけしました。でも、僕、大丈夫です。マテオさんこそ、大丈夫なんですか。女子クラスに潜入したってバレたら、困ったことになりませんか？」

「なる」

そう言って澀刺と笑うマテオさんを、僕は呆氣にとられて見ていました。

「レオンさんは知ってるんですか？　あなたが女装して別館に潜入してることを」

「言ってるじゃないよ。言えば口では『やめろ』、心の中では君の様子が知りたくてたまらない、そんなますます困った状態になるのは目に

見えてるから」

悪戯っぽく笑い、僕に片目をつぶって見せるマテオさん。

「君は元気そうだったと伝えれば、レオンの心配症も少しは癒されるだろう。それじゃ、僕は報告に戻るから」

衣擦れの音と共に立ち上がるマテオさんに合わせ、僕も立ち上がりました。

「どうやって戻るんですか？ 門には守衛さんがいるはず……」

「何とかなるよ。来る時は、遅刻したふりをして走り抜けたから」

「でも、走って門から出るのは不自然ですよ？ きつと見咎められると思うんです。えっと……僕が一緒に行きます。本館で入学の手続きがあるってことで、マテオさんは道案内の女子学生ということ。守衛さんに聞かれたら、何とか僕がごまかします」

僕を心配して女装までして来てくれたんだから、マテオさんを無事に送り届ける義務が僕にはあると思うんです。

「それはどうかなあ。もし見つかったら、普段から問題児の僕はまったく問題ないけど、君に罪をかぶせることになる。駄目だよ」

「きつとうまく行きますって。まかせて」

僕はすっかり元気を取り戻し、とんと胸を叩きました。

僕には心配してくれる人たちがいる。そう思うと元気になれるし、その事を知らせてくれたマテオさんに感謝の目を向け、モップをつかみました。

「それ、いつも持つてるの？」

面白そうにモップを見て、マテオさんは顔を引きつらせています。

「はい。学校にいる間は。僕の唯一の武器ですから」

そうして僕はマテオさんと並び、胸を張って門に向かったんです。

「マテオさんって、よく女装するんですか？」

「まさか。これで2度目。1度目は仮装パーティーの時で無理矢理だったけど、今回はレオンのためでもあり、僕自身君が心配だったというもあるよ。ユリアスってどこか得体がしれないし、女子クラス自体謎めいてるし……。本当に大丈夫だった？ 嫌な思いしなかった？」

「はい。本当に大丈夫です」

マテオさんの優しい目に癒されて僕が笑顔で答えると、マテオさんは僕の顔を食い入るように見つめ、突然うつむいて髪をかきむしりました。

マテオさんの指が動くたびに金髪のかつらがユサユサ動き、落ちるんじゃないかと僕は気が気じゃありません。

「畜生、エメルちゃん、ほんとに可愛いよ。女の子に興味のなかったレオンが夢中になるはずだ。でも気をつけて。レオンのファンの女の子たちに恨まれるかも」

「それも大丈夫です。レオンさんは僕を妹だと思ってくれてるし、僕はカカシだし」

「カカシ……？」

マテオさんの不思議そうな表情に、僕は嫌な思い出を話さざるを得なくなりました。

「僕のあだなです。カカシって呼ばれてました。痩せつぱちで髪がボワツとふくらむから、マッチ棒とも。あと目が大きいからカエルとか、金魚とか」

「信じられない。本気で自分がカカシや金魚に似てると思ってる？」  
「はい。毎朝姿見を見ますけど、カカシみたいだなあって思います」

マテオさんは驚いたように僕をまじまじと見て、僕はマテオさんの審美眼はおかしいと思いました。

僕よりマテオさんの方がずっと可愛いのに、自分の顔を見慣れるはずなのに、僕が可愛く見えるなんて変です。

マテオさんが突然僕の両肩をつかみ真剣な顔を向けたから、僕は飛び上がりそうになりました。

「僕を信じて。君は、すごく可愛いよ。ブルーノから聞いたけど、王宮舞踏会では君の美少女ぶりが評判になってたらしい。カミィラは色っぽいけど、君には清楚な美しさがあるって。これから断り切れないくらい縁談が来るだろうけど、レオンとトーニオの様子から見て、片っ端から断るんだろうな」

「縁談……」

「だからね、エメルちゃん。僕の言葉を信じて。君は僕が知ってる女の子の中で、一番可愛いよ」

そう言っマテオさんは僕の頬にキスをし、僕の頭の中が真っ白になりました。

「唇にキスしたいけど、レオンに殺されそうだから、やめておく」

僕の頭の中で、同じ言葉がぐるぐる回ります。君は可愛い……君は可愛い……。

「やばい。何か、ドキドキしてきた。一気に駆け抜けよう」

マテオさんの視線は門に向けられていて、門を抜ける話だったみたいで、僕の手を握り引つ張ろうとしています。

「逆がいいかも。君は男の子に見えて、僕は女の子に見えるはずだ

から。男の子が女の子の手を引いて走った方が、自然だろ？」

「えっ……」

不自然だと思っけど……。男子学生が女子学生の手を引いて別館から走り出たら、誘拐か駆け落ちみたいですよ。

「あの……普通に歩いた方が……」

僕の声に守衛さんの声が重なり、僕はまたもや飛び上がりました。  
「少々お待ちを、プリンセス」

守衛さんはフィアの女子学生をプリンセス、男子学生をプリンセスと呼びます。

僕にとってはくすぐったい敬称だけれど、それどころじゃなく硬直してしまい、がちがちにこわばった笑みを守衛さんに向けたんです。

「僕、エメル・フォン・リーデンベルクです。今日から入学することになりました。よろしくお願いします。えっと、手続きを本館でしなくちゃいけなくて、場所がよく分からないのでクラスメイトが付き添ってくれることになって、休憩時間の間に行って来ます！」

にこっと笑ったけれど、守衛さんは渋い顔で、

「そちらの方は、どちらの令嬢ですか？」

とマテオさんに近づこうとし、マテオさんはうつむいて手提げ袋を探る振りをしているし、僕は守衛さんとマテオさんの間に立ち塞がりました。

「彼女が不審者に見えるっていうのは、もの凄くよく分かります。僕も会った瞬間、変な令嬢だなあって思ったもの。彼女のご両親に伝えておきます。もっと胸を張らないと学校の守衛さんに不審者扱いされて、門を通るたびに名前を聞かれるって」

「あ、いや、それは……」

「僕、急ぐんですけど。休憩時間の間に手続きを済ませてしまいたいし、次の授業に遅刻したら先生に叱られるし。彼女の名前の確認は、戻って来てからでいいですか？ 出来るだけ急いで戻って来ますから」

「お急ぎにならなくてもいいですよ」

守衛さんはまだ不審げだったけれど、困った顔で引き下がり、僕はマテオさんの手をぐいと引っ張って脱兎の如く守衛さんの前から逃げました。

マテオさんの手を引いて、別館と本館の間にある芝生を駆け抜ける僕。

振り返るとマテオさんは楽しそうな様子で、ピンクのスカートがひらひら舞い、何だか美少女の手を引いて走る男の子になった気分です。

初めて女の子の手を握った男の子って、こんな気持ちなのかなあって思いました。

ドキドキするような、幸福感で全身が満たされるような、高揚感でジャンプしたら空を飛べそうな、そんな気持ち。

そのまま僕たちは本館そばの灌木の茂みに駆け込み、顔を見合わせました。くすくす笑いが大きくなり、マテオさんと二人でお腹を抱えて大笑いしたんです。

急にマテオさんが、真顔になりました。

「エメルちゃん、一生懸命僕を守ろうとしてくれたね。感激だよ」

「そんな……当たり前のことですから」

「気分が落ち込んだ時は、僕に言って。君は世界で一番魅力的な女の子だって、何百回でも何千回でも言うから。本当のことなんだか

ら、何万回だって言えるよ」

「マテオさん……ありがとうございます」

マテオさんの方こそ、一生懸命僕を守ろうとしてくれている。そう思うと胸がいっぱいになって、涙ぐみそうになりました。

「それからね、何でも話してよ。くだらない話でも悩み事相談でも何でも大歓迎。僕はもっと君と話したい。この恰好の方が話しやすいなら、いつでも女装するからね。って言ってる間に女装が癖になつたりしてね」

僕はくすくす笑い、マテオさんも可笑しそうに笑っています。

「スリル満点だったよ。次は教室に潜り込んで、女子クラスの授業を受けてみたいよ」

本当にやりかねないなあと思っていたと、マテオさんの背後の木陰から人が現れ、僕は凍りついてしまいました。

「あ、あの……」

「もうちょっと趣味のいいドレスがいいな。かつらも今風の髪型にしよう」

「マテオさん、うしろ……」

「え？」

振り返ったマテオさんの正面に長身の男性が立ち、マテオさんの首根っこをつかまえ、にやりと笑っています。

「趣味のいいドレスと今風のかつら？ いいねえ。俺のベッドで女装してくれ。ま、どうせ脱がせるんだから、何着たって同じだけど」

男性は磨き抜かれた銅のような色合いの髪を後ろで束ね、細面の

顔に眼鏡をかけています。

顔立ちは知性的なのに、言うことときたら……ベッド？

「うわあつ、ナサニエルかよ。離せ、痛いだろ」

「ナサニエル『先生』だ。教師には如何なる場合も敬語を使うべし。ファイアの鉄則だろう」

ナサニエルと呼ばれた男性が言い、僕は目を丸くしました。教師……がベッドで脱がせる発言？

マテオさんは僕より長身だけれどそれでもナサニエル先生の肩までしかなく、先生の手を離そうと暴れたけれど無駄な抵抗でした。

「君は？」

「エメル・フォン・リーデンベルク……です」

僕がすっかり諦めて名乗ると、ナサニエル先生はゆっくりと両口角を上げ、知的な顔には不釣り合いな獲物を見つけた狼のような形相になっていました。

「ほう？ レオンの妹だな、ふむ。今回のこの不祥事、エメル君に事情を聞くことにしよう。レオンに立ち合うよう、伝えに行け」

最後の一言はマテオさんに向けられた言葉で、先生はマテオさんをつかんでいた手を離し、マテオさんは怒った顔で先生を見上げました。

「レオンは関係ない！ 僕の一存でしたことだ。罪は僕一人にある」  
「恰好つけずに早く行け。レオンが来るのが遅くなればなるほど、こちらの美少年だか美少女だかの貞操が危うくなるぞ。一人で来いと、そう伝える。いつそ来ない方がいいかもしれん。見れば見るほど、美味しそうだ」

知的な顔立ちで知性あふれる砂色の目をしたナサニエル先生の口元には、狼が笑ったならこんな感じじゃないかと思えるような笑みが浮かび、舌なめずりして僕を見るんです。

「ひっ……」

後ずさる僕の手首をつかみ、先生は声を上げて笑いしました。

「今日一番の獲物だ」

「エメルちゃんに触るな。悪い病気が移るだろう」

「もう移ってるだろう。お前と手をつないで走っているところを見たぞ。エメル君、手を洗いなさい」

「畜生、何てことを」

「早く行け！」

先生の一喝で、マテオさんは悔しそうに口を閉ざしました。

「次の音楽のテスト、問答無用で50点引かれたいか？ 卒業できないぞ」

「残念だったな。0点は何点引かれても0点なんだよつ。エメルちゃん、待っててね。必ず助け出すからね。ナサニエル、てめえは最低だ」

マテオさんは言い捨てて、ドレスの裾を膝まで持ち上げ、猛スピードで走って行きました。

「誰に合わせてやってると思うてるんだ。あれが伯爵の御子息とは、やれやれ」

ナサニエル先生は苦笑し、ついで僕に目を向けました。

「さて、エメル君。レオンを釣る餌になって貰おうか」

餌……？ レオンさんを釣るって、どういう意味でしょうか。

先生の顔はやっぱり狼に見え、さっきまで女の子をリードする活発な男の子だったはずの僕は、狼の口にくわえられてぐったりしたウサギに成り果て、そうして狼の巣穴へと連れ去られてしまったんです。

## 2 僕の仕事は用心棒と……愛人？

ナサニエル先生が僕を連れて行ったのは、音楽室でした。

額縁に入った音楽家の肖像画が壁一面に飾られ、マホガニーの机と椅子が整然と並べられて、部屋の隅にはコントラバスやハープや打楽器が置かれています。

「そこに座ってくれ」

モップをこわばった動作で窓枠に立てかけ、言われた通りに窓際の席に座ってかちーんと凍りついていると、先生は僕の正面に腰かけて、真面目な顔を僕に向けました。

笑っていない時のナサニエル先生は威厳ある教師そのもので、僕のお腹の底にひやりと冷たいものが走ります。

「説明してもらおうか。マクリミリアン・アリストオ・フォン・ザイエルンがなぜ女装していたのかを」

「えっと……あの、あの……」

うまく言い逃れようと思ったのですが、何の言い訳も浮かんで来ません。マクシミリアン・アリストオだからマテオと呼ばれてるんだという、本件に何ら関係ないことで感心するばかりです。

「なるほど。マテオが女装して別館をのぞきに行き、たまたま出くわした君を口封じのために連れ出した、と。そういうことだな」

「えっ。違います。全然違います！」

僕は、必死に食い下がりました。

「色々と事情があつて、でも悪いのは僕なんです。僕が悪くて、マテオさんは悪くないんです」

「マテオの罪を君がかぶるということか。トライゼン刑法第123条、国家風紀法違反により、監獄行きだ。刑期は7、8年といったところだろう」

「ええっ」

監獄行き……。そんな……。でもマテオさん、教室の窓をのぞいたと言つてたし、あれはのぞき行為に該当して処罰されてしまうんでしょうか。

「という事になればフィアにとって不名誉だから、学内処罰に留めておく。不名誉は体であがなう事になっている。腕立て伏せ500回だ」

「えええっ」

死にます。500回も腕立て伏せをしたら、僕の場合、永遠に伏せたままです。

「無理か？」

「……はい」

先生は眼鏡の縁を人差し指で持ち上げ、砂色の目をキラッと光らせました。

「君は女の子だ。女の子だけの特別恩赦を用意しよう。体で払え。意味は分かるな？」

「え……」

おもむろに立ち上がり、先生は僕の腕を引きました。

「さあ、ベッドへ行こう。医務室のベッドが空いている。『使用中』と書いて貼っておけば、誰も入って来ない」

「ひいつ」

何言ってるの。学校の先生なのに、フィアの教師なのに……。僕の中で威厳ある教師像が、がらがらと音を立てて崩れていきました。

「入、入って来るんじゃないですか？ 何事かと先生方や学生が押し寄せるんじゃないですか？」

『使用中』なんて、思いっきり不審です。

「その時は見せつけてやるうではないか。俺は、かまわない」

僕のかまいます！ もの凄くかまいます！ 先生に腕を引っ張られ、僕は抵抗しました。

「ひつ、ひ つつ」

「ベッドが嫌なら、女装した変態のマテオに別館から無理矢理拉致されましたと言え。それが嫌なら腕立て伏せ500回」

「そんな……」

どれも選べません。どれも嫌だ。

「早く選べ。時間がない」

そんなこと言われても……。僕が泣きそうになっていると、先生はため息をつきました。

「まったく女という奴は。こんなチビのうちから、男を待たせる才能にたけている。……俺にも憐みの心というやつが無いわけじゃない。あと一つだけ、選択の余地を与えよう。あと一つだけだ、これが最後だぞ。レオンに歌を歌わせる」

「……は？ 歌？」

僕が間の抜けた返事をする、先生はズボンのポケットに両手を入れ、僕を凝視しました。

「レオン・クラウド・フォン・リーデンベルクは過去5年間、一度も歌の試験を受けていない。理由は分かっている。音程を維持する能力に欠けているからだ。逃げ切つて卒業する気のようなだが、それでいいと思うか？ 思わないだろう？ 苦手だからと言って逃げていいもんじゃない。彼に歌の試験を受けさせることが出来たら、俺は何も見なかったことにしよう」

「でも、でも、僕なんかの言うことをレオンさんが聞くとは思えません」

聞くどころか、レオンさんはきつと怒るでしょう。

レオンさんは僕を妹として大切に思ってくれているけれど、だからと言って僕が何を言ってもレオンさんが許してくれるわけじゃない。

まだそこまで仲良しとは言い切れないんです。

仕方がありません。僕は決心しました。マテオさんを罪に陥れることは出来ない、レオンさんに無理強いすることも出来ない、体で払うなんて論外です。消去法で残ったのは……腕立て伏せ。

「あの、先生。僕にはレオンさんに何かをしてもらう力はありません

ん。ですから……」

「体で払うことを決意したか」

「そっちゃんなくて、腕立て伏せの方に……」

「時間切れのため、腕立て伏せ法案とマテオ変態法案は消滅した。残ったのは歌か、体で払うか。どちらを選ぶ？」

「うっ、うっ……」

ひどい。ひど過ぎる。僕が恨みをこめて横暴なナサニエル先生を見上げると、先生はにやりと意味ありげに笑い、首を廊下側に巡らせました。

「レオンが来たようだ」

遠くから走って来る足音が聞こえ、僕の頭の中はめまぐるしく働きました。どうしよう、どうしよう、どうしよう……。

浮かんでくるのはその一言だけで、何の解決法も見出せない自分の頭をぽかすか殴っているうちにドアが音高く開き、険しい顔つきのレオンさんが入って来ました。

「レオンさん！」

僕は何も考えずに駆け出し、レオンさんに飛びつきました。サデイストのナサニエル先生から逃れたい一心で。

レオンさんは僕を背中に押しやり、先生を睨みつけています。

「エメルに何をした」

「まだ何もしていない。君が来るのが早過ぎて、口説き損ねたよ。さあ、レオン。独唱台に立て。課題曲を用意する間、発声練習をしておけ」

「俺は、歌わない」

レオンさんは低い静かな声で言い、僕の肩をつかみました。

「行くぞ、エメル」

「逃げるのか。寛大だったこれまでの音楽教師に甘え、5年間も逃げ回った。今やらないと一生逃げ続けることになるんだぞ」

「俺は、完璧な人間じゃない。欠点なら山ほどあるさ。歌はそのうちの一つだ」

レオンさんの歌って、そんなにひどいんでしょうか。僕は首をかしげました。レオンさんの声は低くて少しかすれていて、とても魅力的なのに……。

これまでレオンさんの歌を聞いたことは、一度もありません。もしかすると、一生聞くことはないかも知れません。

これはレオンさんの歌が聞ける、最初で最後のチャンスかもしれない。

「僕、聞きたいです。レオンさんの歌……」

気がつくと、僕は呟いていました。最初で最後のチャンスなら、逃したくない。心の底から、レオンさんの歌が聞きたいと思いました。

「本当に聞きたいです。歌ってください、レオンさん。もしできるなら 僕のために」

レオンさんは驚いたように目を見開き、ふつと顔をそむけました。怒ったのかなと思っていると、深いため息をついて目を伏せたレオンさんは、困惑するように髪をかきむしり、ゆっくりと目を僕に向けたんです。

「……笑うなよ」

「はい。笑いません」

僕は、笑って答えました。さっそく笑ってるんだけど。

ナサニエル先生に挑むような強い視線を送り、覚悟を決めたらしいレオンさんは廊下側の壁際に置かれた譜面台の前に立ち、それでもまだ逡巡するように片手で顔の半分を覆っています。

先生から楽譜を手渡され、

「何だ、これ」

「何ですかこれ、だろ？ 忘れているようだが、俺は教師で君は学生だぞ」

「何ですか、これ」

「楽譜だ」

レオンさんはちつと舌打ちすると楽譜を荒っぽく譜面台に置き、顎を引いて下から先生を睨み上げました。

先生は指揮棒を手にし、にやりと笑っています。

「覚えていてくださいよ。いつかこの借りはお返しします。特に夜道の一人歩きには、くれぐれも御用心を」

「そう言う奴が多くてな、いちいち覚えてられないんだよ」

先生の指揮に合わせ、レオンさんが歌い出しました。……トライゼンでよく知られた、恋の歌を。

君に会えない夜、僕はせつなくて眠れない

君に会えなかった朝、まどろみから目を覚まし、僕は幻を見る

愛しい君を

1小節に1度は音程がはずれるけれど、はずれっぱなしの時もあるけれど、少しも気になりませんでした。

恋の歌を歌うレオンさんから目が離せなくて、低くかすれた声は囁いているみたいで、僕の胸が高鳴ります。

君に会いたい      君の声が聞きたい      君を抱きしめたい

愛してる

レオンさんが横目で僕を見たから目と目が合ってしまい、レオンさんはすぐに楽譜に視線を戻したけれど頬が赤くなっていて、僕は目を見張りました。レオンさんが、赤くなってる……。

僕は、君を愛してる

愛してる

## 愛してる

それは、奇跡のような出来事でした。

レオンさんが頬をほんのり赤らめて、愛していると歌いながら、僕に目を向けるんです。

レオンさんの黒い瞳は深くて謎だらけだけど澄んでいて、僕に何かを伝えようとしているかのようです。

何だろう。僕には分からないけれど。

ただ僕の心の奥深くから、熱くて激しくて圧倒されるような何か湧き上がって来て、胸の辺りで渦を巻きました。

胸が痛いのに、幸せです。レオンさんに出会えた僕は、幸せです。そう思うと涙がぼろぼろこぼれ落ち、手で拭っているとレオンさんは驚いた顔をして、それから優しく微笑むんです。

ずっと歌ってくれたらいいのにと願ったけれど、歌はあつという間に終わってしまい、僕はがっかりしました。

魔法の時間は夢のように儚くて、心に心地良い感動を残して消えていきました。

「レオンさん、素敵でした。歌も素敵だったけれど、レオンさんも素敵でした」

僕が言うと、照れたような困ったような笑みを浮かべ、僕の髪をくしゃくしゃにするレオンさん。

「9年生の分は終わったが、まだ4年生から8年生のが残ってるか

らな。あと5曲だ」

「勘弁してください」

怖い顔でさっさと教室を出て行くレオンさんを追いかけて、僕はモップを抱えて走りました。

廊下に出るとトーニオさんとブルーノさんがいて、スーツに着替えたマテオさんと、ユリアスさんもいます。

トーニオさんが僕を力一杯抱きしめて頬を髪にすり寄せ、僕はぎよつとしてトーニオさんを見上げました。

「可哀相に、あんな怖ろしい呪文を聞かされて。家に戻ったら、俺が愛の囁きをいっぱい聞かせてあげるからね」

「俺は、歌っていたんだ」

レオンさんがトーニオさんの腕の中から僕を引っ張り出そうとし、トーニオさんはにやりとしました。

「呪いの言葉を吐いてるのかと思ったよ」

「エメルちゃんが無事で良かった。ナサニエルみたいな奴の所に一人残して来たかと思うと、心配と罪悪感でどうにかなりそうだったよ」

マテオさんが言い、僕は胸を張りました。

「ご心配をお掛けしました。レオンさんが歌ってくれたから、無事解放されました」

「人質を取って、身代金代わりに試験強要か。何でかな、血が騒ぐ」  
「先祖の血だろう。山賊の子孫だからねえ、トライゼンの国民は」  
ブルーノさんとトーニオさんは、笑いながら顔を見合わせています。

「そろそろ教室に戻ろう。次の授業が始まる」

壁にもたれ皆の話を聞いていたユリアスさんが、僕に歩み寄りました。

「ユリアス。愛人の件で話がある。時間を取って貰えないか」

レオンさんがユリアスさんに真剣な口調で言っただけで、ユリアスさんの反応は冷ややかです。

「放課後、私の屋敷に来るといい。さあ、エメル。急ごう」

僕はユリアスさんに肩を抱かれ、振り返ってレオンさん達に軽く頭を下げ、歩き出しました。

本館を出て芝生の上を別館に向かって歩くと、左右に見事な庭園が見えます。

見に行ってみたいなあと思う僕の耳に、ユリアスさんの沈痛な声が飛び込んで来たんです。

「……実は、エメル。ラーデン侯爵家は今、危機に陥っている。君の助けが必要だ」

「危機……？」

ユリアスさんは美しい顔に憂いを漂わせ、流れるような視線を僕に向けました。

「詳しいことは屋敷で話すが、私には身辺警護が必要なのだ。屋敷には警護の男たちがいるが、もっと身近で私を守ってくれる女性が必要だ。腕が立ち信頼できる女性が見つからなくて、困っている。愛人の件は、なかった事にしてもいい。ただ暫くの間、そうだな、1週間から1か月ほど私の屋敷に住み、私の警護をして貰えないだろうか」

つまり……用心棒です。用心棒が必要なほどの危機って、何なの

でしょうか。

その前に、僕にユリアスさんが守れるでしょうか。僕の棒術の腕前なんて、褒められたものじゃないし……。

でもじつと僕を見つめるユリアスさんの青紫の瞳には懇願するような色があつて、僕なんかに頼むなんてよほど困ってるんじゃないかと思いました。

困ってる人に頼まれて、断れるわけがありません。

「わかりました。僕なんかでお役に立てるとはとても思えないけれど、頑張つて働かせて頂きます」

僕が言つとユリアスさんはほつとしたように微笑んで、ユリアスさんの憂い顔を笑顔に変えることが出来るなら、そのために僕が役に立つのなら、一生懸命働こうと思うのでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2960w/>

---

アップルケーキに愛をこめて

2011年10月8日11時35分発行